

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

保谷民博関係人名録

メタデータ	言語: ja 出版者: National Museum of Ethnology 公開日: 2021-07-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 朝倉, 敏夫, 飯田, 卓, 井上, 潤, 卯田, 宗平, 加藤, 幸治, 菊池, 暁, 木村, 裕樹, 小島, 摩文, 小林, 光一郎, 齋藤, 玲子, 坂野, 徹, 永井, 美穂, 野林, 厚志 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00009823

保谷民博関係人名録（個人名）

● 青木巖（1900-1973）

あおき・いわお

【事績】

哲学研究者。ギリシャおよびローマの哲学を研究し、その紹介に携わった。大阪府生まれ。慶應義塾大学とミズーリ大学を卒業し、慶應義塾大学予科長、同大教授、上智大学教授などを歴任した。アリストテレス『国家学』（第一書房、1937年）、ヘロドトス『歴史（上・下）』（生活社、1940-1941年）、クローチェ『ヴィコの哲学』（東京堂、1942年）など、訳書も多い。（上智大学英文学科・英語学科 1973）

【著作】

青木巖『アリストテレース』岩波書店、1927年。

青木巖『イタリア哲学の主流』第一書房、1938年。

青木巖『古代ギリシア人の社会・政治思想（上・下）』好学社、1959-1960年。

【コレクションとの関係】

1938年に広島県安芸郡中野村で集めた輪飾りをコレクションに加えている。

----- 執筆者：菊地暁

● 明石貞吉（?-?）

あかし・ていきち

【事績】

民俗研究家。秋田県北秋田郡扇田町（現 大館市比内町扇田）の地主の生まれ。慶應義塾大学の史学科で松本信広に学ぶ。1931年の夏休みに学友と郷里を調査、その成果を雑誌『民俗学』に寄稿し、収集資料を渋沢敬三の主宰したアチックミュージアムに寄贈した。1933年には雑誌『民俗学』編集の中心を担った。その後の足跡は未詳。（明石 1933; 1944; 1947; 松本 1935）

【著作】

明石貞吉「魚がいるふゆ」見山敬一（編）『おとのない三角』106ページ、短歌表現社、1932年。

明石貞吉「短歌形式の存在理由」見山敬一編『おとのない三角』246ページ、短歌表現社、1932年。

明石貞吉・今井晋「米代川中流扇田町附近の土俗」『民俗学』4(2): 94-10、1932年。

明石貞吉「大葛金山ゆき」『民俗学』4(6): 463-474、1932年。

明石貞吉「大葛金山ゆき (二)」『民俗学』4(7): 546-560、1932年。

明石貞吉「老頼稚伝説の安南異伝」の霊物と天文との関係に就いて」『民族学研究』1(2): 354-360、1935年。

【コレクションとの関係】

1931年8月の夏休みに郷里・扇田町で採集した資料が大部分を占める。

----- 執筆者：菊地暁

●安達和太郎 (???)

あだち・わたろう

【事績】

漁業経営家。隠岐島前船越の網元の家生まれ、漁業・廻船業のほか、糸満の漁師と契約した漁や、潜水漁などの多角的な漁業経営を行った。1934年におこなわれたアチックミュージアムの隠岐調査において渋沢敬三らと知遇を得た。翌1935年の第二次隠岐調査のさい、アチックミュージアム一行は、安達家に宿泊して調査を行った。(安達 1986; 小林 2015a; 2018)

【コレクションとの関係】

1935年の8月から10月にかけて、島根県下の履物や漁具などをコレクションに加えた。1935年および1936年にアチックミュージアムがおこなった隠岐調査が資料収集のきっかけになったと考えられる。

----- 執筆者：小林光一郎

●天野芳太郎 (1898-1982)

あまの・よしたろう

【事績】

実業家、アンデス文明研究者。1928年に南米に渡り、パナマを拠点に中南米で幅広く事業をおこなった。太平洋戦争開戦直後にアメリカ当局によって逮捕され、収容所に収監されるが、1942年に交換船で日本に帰国。戦後、中南米での事業を再開し、1951年よりペルー

に暮らしながら広く事業を展開した。また、アンデス文明の遺跡発掘も開始し、1956年に調査で南米を訪れた泉靖一（文化人類学者、当時 東京大学助教授）と出会い、戦後日本におけるアンデス文明研究を支援した。1964年、ペルーの首都リマに天野博物館を設立し、コレクションの一部を数度にわたって日本に巡回させた。（尾塩 1984; 大貫・加藤・関 2010）

【著作】

天野芳太郎『わが囚われの記—第二次大戦と中南米移民』中央公論社、1983年。
天野芳太郎・義井豊『ペルーの天野博物館—古代アンデス文化案内』岩波書店、1983年。

【コレクションとの関係】

1953年から1954年にかけてペルーで集めた資料約20点をコレクションに加えた。

----- 執筆者：坂野徹

● 綾部恒雄（1930-2007）

あやべ・つねお

【事績】

社会人類学者、教育人類学者。1954年に東京都立大学人文学部を卒業した後、同大学院で社会人類学を学ぶ。大学院修了後、都立大助手となり、カリフォルニア大学ロサンゼルス校（UCLA）に留学、1961年に九州大学教育学部に専任講師として赴任。その後、同大学助教授、教授を経て、1979年、新設された筑波大学の民族学（文化人類学コース）初代教授となった。この間、多くの後進の養成にも尽力し、1980年には日本民族学会（現 日本文化人類学会）会長も務めた。筑波大学を定年退職後は、愛知学院大学や京都文教大学、城西国際大学の教授を歴任。東南アジア、北アメリカの少数民族を主要研究テーマとし、文化人類学の概説書も多い。（小野沢 2009）

【著作】

綾部恒雄『アメリカの秘密結社—西欧的社会集団の生態』中央公論社、1970年。
綾部恒雄『タイ族—その社会と文化』弘文堂、1971年。

【コレクションとの関係】

収集年については記述がないが、タイやラオスなどで集めた20点近くの資料をコレクションに加えた。寄附者にはいずれも「第一東南ア調査団」とあり、明らかに、1957年から1958年に派遣された第1次東南アジア稲作民族文化総合調査団に参加した際に収集したも

のである。

----- 執筆者：坂野徹

●有川金吉（?-?）

ありかわ・かねよし?

【事績】

株式会社十六銀行員。1928年5月18日、十六銀行常務取締役 山崎丈夫が兼務していた支配人を辞任したのに際し、支配人に就任した。1936年の足半収集者の一人。（十六銀行編 1978; 藤井 2010）

【コレクションとの関係】

1936年5月2日に岐阜市長良町で集めた履物をコレクションに加えた。

----- 執筆者：井上潤

●有坂与太郎（1896-1961）

ありさか・よたろう

【事績】

本名は有坂正輔。昭和初期の郷土玩具愛好運動を主導した趣味家。「郷土玩具普及会」を立ち上げ、雑誌『おしゃぶり』や『がらがら』を刊行する一方、自ら起こした出版会社で『日本玩具史』を刊行するなど、郷土玩具の普及につとめた。有坂が主宰した郷土玩具普及会は、後に日本郷土玩具協会となり、機関紙『鯛車』を舞台に精力的な執筆活動を展開した。（加藤 2011）

【著作】

有坂与太郎『日本玩具集おしゃぶり（第1～4輯）』郷土玩具普及会、1926年。

有坂与太郎『郷土玩具種々相』高山房、1926年。

有坂与太郎『おもちゃ絵本（全6冊）』郷土玩具普及会、1927年。

有坂与太郎『日本雛祭考』建設社、1931年。

有坂与太郎『玩具叢書 日本玩具史篇』雄山閣、1934年。

有坂与太郎『玩具叢書 世界玩具史篇』雄山閣、1934年。

【コレクションとの関係】

1926年から1928年にかけて、凧や人形などの玩具、福引種や熊手、船玉様などの民間信仰資料をコレクションに加えた。朝鮮で集めた資料も1点ある。保谷民博の原簿番号が805番になっている卯槌も、「有坂」が1927年に集めたとあることから、有坂与太郎の手で集められた可能性が高い。

----- 執筆者：加藤幸治

● 有賀喜左衛門（1897-1979）

あるが・きざえもん

【事績】

社会学者、東京教育大学教授。長野県上伊那郡朝日村（現 辰野町）の地主の家に生まれる。義弟に池上隆祐（政治家）、池上広正（宗教学者）がいる。諏訪中学校、第二高等学校、京都帝国大学を経て東京帝国大学文学部に進み、美術史を専攻した。柳宗悦の民芸運動に触れ、卒業研究では朝鮮仏教美術にとり組んだ。大学院進学後は柳田国男との知遇を得て日本の農村社会研究に転じ、雑誌『民族』（1925-1928年）に参加した。のち、高校の同級生である渋沢敬三の率いるアチックミュージアムによる岩手県二戸郡石神村（現 花巻市）の共同調査に参加、大地主 斎藤善助の協力を得てモノグラフ『大家族制度と名子制度—南部二戸郡石神村に於ける』を執筆する。同書は日本の農村社会学や家族社会学の金字塔というべき著作で、非血縁者を包含した世帯経営に日本のイエの特質を見出した。これに異を唱える喜多野清一との間に交わされた「有賀・喜多野論争」は、学史上有名。戦後は東京教育大学の社会学講座を主導し、数多くの後進の育成に貢献した。また、アチックミュージアムの後身である日本常民文化研究所が財団法人化した際、初代の代表理事を務めた。（有賀 1939; 1943; 1976; 1966-71）

【著作】

有賀喜左衛門『大家族制度と名子制度—南部二戸郡石神村に於ける』アチックミュージアム、1939年。

有賀喜左衛門『日本家族制度と小作制度—「農村社会の研究」改訂版』河出書房、1943年。

有賀喜左衛門『一つの日本文化論—柳田国男に関連して』未来社、1976年。

有賀喜左衛門『有賀喜左衛門著作集（全11巻）』未来社、1966-1971年。

【コレクションとの関係】

1932年に郷里の長野県上伊那郡朝日村平出で集めた田下駄と豆叩き棒をコレクションに加えた。

----- 執筆者：菊地暁

●安済満 (1913-1988)

あんざい・みつる

【事績】

栃木県出身。1932年に京都帝国大学法学部を卒業し、東邦火災保険株式会社に勤務、1936年に株式会社石川島造船所に入社、1949年に同取締役、1959年に同監査役、1963年に同退任、同年に石川島興業株式会社常務取締役。安済が渋沢敬三の弟の渋沢信雄と初めて出会ったのは、1931年秋であったという。(『朝日新聞』1963年7月27日付; 安済 1968; 日本興信所連合会編集部編 1978; 『アチックマンズリー』)

【コレクションとの関係】

1935年に、栃木県河内郡絹島村の「足半草履」「火吹竹」「ボージボ」2点をコレクションに加えた。いずれも安済円次氏製作となっている。

----- 執筆者：永井美穂

●安藤定一 (1860-?)

あんどう・さだいち

【事績】

千葉県の教員。1876年に小学助教として教鞭をとり、1881年に初等科教員免許状・中等科高等科教員免許状を授与され、1893年より暢発尋常高等小学校長に任ぜられた。香取郡栗源町の教育に尽力し、1936年から町長として町政にあたった。(元兼 1995)

【コレクションとの関係】

1938年に、教員をしていた香取郡栗源町岩部収集の筥をコレクションに加えた。

----- 執筆者：加藤幸治

●李周泳（?-?）

イ・チュヨン

【事績】

医師。東京医学専門学校を1930年度に卒業後、赤十字京城本部病院に勤務した。在学中は、朝鮮からの留学生として、自彊会から支援を受けていた。自彊会は、渋沢栄一や阪谷芳郎、建設業界などの賛助の下、朝鮮の天道教組織が基盤となり、朝鮮人留学生を「支援」した団体であり、寄宿舎運営、学費支援、苦学生の仕事と卒業後の就職先斡旋をおこなった。（自彊会 1935; 裴 2010）

【コレクションとの関係】

1929年10月に朝鮮 慶北星州で集めた民具など10点あまりをコレクションに加えた。

----- 執筆者：朝倉敏夫

●五十嵐幹雄（1919-2017）

いがらし・みきお

【事績】

考古学者、郷土史家。長野県小県郡和村（現 東御市）生まれ。長野県師範学校を卒業後、県下の小中学校教員を歴任して教育に携わるかたわら、考古学や郷土史の研究に従事した。1949年、東京大学考古学教室に内地留学した。青木村や和村、平賀村、東部町、丸子町、上田市などの市町村史編纂にも協力した。

【著作】

五十嵐幹雄『東部町の遺跡と文化財』大将会、1986年。

五十嵐幹雄『上田・小県地方の「地字略考」』私家版、1996年。

【コレクションとの関係】

1955年に長野県で集めた藁製の馬の玩具をコレクションに加えている。

----- 執筆者：菊地暁

●池上隆祐 (1906-1986)

いけがみ・たかすけ

【事績】

教育者、政治家。政治家としては教育問題を中心にとり組み、地方活性化にも貢献した。長野県松本市の織物問屋に生まれ、松本高校を経て東京帝国大学農学部に入學、のち法学部に再入學して卒業。東京の成城に居を構え、柳田国男と交流するかたわら、義兄の有賀喜左衛門らと雑誌『郷土』(1930-1932年)を創刊した。また、1932年、柳田国男『石神問答』(1910年)を記念した「石」を『郷土』で特集し、当時の民俗学関係者を集結させて斯学を組織化するなど、学界に多大な貢献をおこなった。池上の業績に感謝した柳田からは、『遠野物語』初校本3部を寄贈されている(これらは、池上の没後に遠野市立博物館に寄贈された)。1942年、松本市議員に初当選、1946年に衆議院議員、1950年に長野県教育委員となった。長野県教育委員中央連絡会会長にも推挙された。信濃木崎夏期大学の理事長を長く務め、社会教育の振興に尽力した。(石井 2005)

【著作】

池上隆祐遺文集刊行会(編)『池上隆祐遺文集』池上隆祐遺文集刊行会、1992年。

【コレクションとの関係】

郷里の長野県松本市伊勢町で集めた資料10点あまりをコレクションに加えた。年代は不明なものが多いが、脚絆やガンドウ提灯などは1933年に採集されており、他のものもほぼ同時期と推測される。

----- 執筆者：菊地暁

●五十沢二郎 (1903-1948)

いざわ・じろう

【事績】

文筆家。神奈川県出身。本名 伊沢二郎。慶應義塾大学を中退。1930年に会員制のやぼんな書房を創立し、文芸雑誌『古東多万』などを刊行した。1934年に渋沢敬三が主宰していたアチックミュージアム同人となり、「文献索隠」の作成に従事した。1936年より青淵先生伝記資料編纂委員となる。その後、『阪谷芳郎伝』の編纂にも携わった。中国古典文学についての著書を多く残した。(中山編 1956; 五十沢 1986; 『アチックマンズリー』)

【著作】

五十沢二郎『伎道一夕話』発藻堂書院、1928年。
五十沢二郎『東方古典叢刊』竹村書房、1933-34年。
五十沢二郎『新約列子』版画荘、1937年。

【コレクションとの関係】

1935年に神奈川県で集めた履物を、1936年に長野県や新潟県で集めた履物や民具を、1937年に東京都で集めた竹筒をコレクションに加えた。その数は10点あまり。

----- 執筆者：永井美穂

●石井光雄（1881-1966）

いしい・みつお

【事績】

大正・昭和初期の銀行家。三重県に生まれ、京都帝国大学を卒業後、神戸地方裁判所検事となった。その後、朝鮮銀行に入学し、後に朝鮮殖産銀行の理事を務めた。1927年に日本勧業銀行に転籍し、1936年に総裁となった。（上田・西沢・平山・三浦監修 2015）

【著作】

【コレクションとの関係】

1956年から1957年にかけて茨城県日立市で集めた背負い梯子をコレクションに加えた。

----- 執筆者：井上潤

●石倉久太郎（?-?）

いしくら・ひさたろう

【事績】

岩手県盛岡市の大工。市指定保存建造物である盛岡市紺屋町通りの通称「紺屋町番屋」を建築した大工として名が残っている。この建物は、1891年に盛岡消防組よ組番屋として建てられ、1913年に消防組第四部事務所として改築された。石倉はこの改築に携わったと推測される。戦後は消防組が改組されて消防団第五分団となり、建物は屯所として2005年まで用いられた。

【コレクションとの関係】

1931年に履物や藁皿などの資料数点をコレクションに加えた。

----- 執筆者：飯田卓

●石黒忠篤 (1884-1960)

いしぐろ・ただあつ

【事績】

農政官僚、政治家。「農政の神様」と称される。東京都生まれ。父 忠恵は軍医、子爵。東京高等師範学校附属中学校、第七高等学校を経て、東京帝国大学法学部を卒業。農商務省に入り、以後、生涯をかけて農政に従事した。農林次官、農林大臣、農業報国会長、貴族院議員、参議院議員などを歴任。穂積陳重の娘にして渋沢敬三の従姉である光子と結婚。渋沢が兄事する。新渡戸稲造や柳田国男が呼びかけた郷土会にも参加した。今和次郎の民家探訪を支援する。1934年に日本民族学会が発足したときには発起人を、1947年に民俗学研究所が設立されたときには同人となった。(日本農業研究所編 1969)

【著作】

石黒忠篤『農政落葉籠』岡書院、1956年。

【コレクションとの関係】

1929年に東北地方や北陸地方で集めた履物を、1937年には満洲で集めた民具をコレクションに加えた。また、1956年にも若干の資料を追加しており、それらの総数は約10点にのぼる。

----- 執筆者：菊地暁

●石坂仙太郎 (?-?)

いしざか・せんたろう

【事績】

富山県婦負郡百塚村(現 富山市)の在住者。『民具問答集』において、百塚村で採集した民具(ドーハ、フカグツ、アミダイ)について回答した。回答期はいずれも1934年。『民具問答集』は、民具1点1点の製法や用法、現地での名称や由来、伝承などを使用地の人たちに尋ね、得られた情報をまとめたもの。(アチックミュージアム編 1937)

【コレクションとの関係】

1933年に富山県婦負郡百塚村で集めた民具20点あまりをコレクションに加えた。

----- 執筆者：木村裕樹

●石坂由三（?-?）

いしざか・よしぞう

【事績】

銀行員。富山県出身。1931年より書生として東京市芝区三田綱町の渋沢敬三邸に寄寓。1935年より東京貯蓄銀行に勤務。同行は改組によって、1945年に日本貯蓄銀行に、1948年に協和銀行になっている。（中山編 1956）

【コレクションとの関係】

1933年に、富山県婦負郡百塚村の鎌をコレクションに加えている。

----- 執筆者：永井美穂

●石田英一郎（1903-1968）

いしだ・えいいちろう

【事績】

民族学者。大阪府生まれ。男爵 石田八弥の長男。第一高等学校を経て京都帝国大学経済学部に入学したが、マルクス主義に傾倒し1928年の3.15事件で逮捕され、5年間の禁固刑に服した。獄中、人類学の著作に親しみ、出獄後は柳田国男ら民俗学者たちと交流。1937年から39年までウィーン大学に留学し、文化史学派に学んだ。その手法は『河童駒引考』などの作品に結実。戦時中は、中国張家口の西北研究所でムスリム研究に従事。占領中はCIE（民間情報教育局）に勤務し、学会誌『民族学研究』の編集長を務めるとともに、1948年には座談会「日本民族＝文化の源流と日本国家の形成」を企画し話題を呼んだ。1951年に、新設された東京大学教養部文化人類学教室の初代教授となり、戦後の人類学の「顔役」として活躍した。（山口 1979; 杉山 1988; 鶴見 1998）

【著作】

石田英一郎『河童駒引考』筑摩書房、1948年。

石田英一郎『桃太郎の母』講談社、1966年。

石田英一郎『石田英一郎全集（全8巻）』筑摩書房、1970-72年。

【コレクションとの関係】

1941年に樺太（サハリン）や北海道で集めた民具や祭具70点あまりをコレクションに加えた。

----- 執筆者：菊地暁

●石田収蔵（1879-1940）

いしだ・しゅうぞう

【事績】

人類学者、考古学者。秋田県鹿角出身。1901年に東京帝国大学理科大学動物学科入学、1905年に同大大学院に進み、人類学教室初の大学院生として坪井正五郎に師事した。1906年に東京人類学会幹事となり、長年にわたり『東京人類学会雑誌』の編集を手がける。1907年に初めて樺太調査をおこなって以来、1939年までに5回樺太に渡り、考古学的調査ならびにウイルト、ニブフ、アイヌの人類学的調査をおこなった。1908年に東京帝国大学理学部動物学科人類学教室講師、1925年に東大を退職、東京農業大学図書館長となる。論文は少ないが、多くの写真やノート、スケッチ、はがきなどの貴重な記録を残した。その多くは、板橋区立郷土資料館が所蔵。（小西編 2000; 守屋編 2012; 財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構編 2012）

【著作】

石田収蔵「樺太紀行（上・中・下）」『東京人類学会雑誌』265: 257-266、266: 302-305、267: 341-345、1908年。

石田収蔵「南部樺太に於ける土人」『東京人類学会雑誌』270: 438-446、1908年。

【コレクションとの関係】

1935年-1936年に出身地の鹿角郡毛馬内町などで収集したと推定される民具9点がある。また、樺太で収集されたと考えられる50点あまりの民具があり、記録では石田の没後10年以上を経てから別の研究者によって寄附されている。

----- 執筆者：齋藤玲子

● 伊豆川浅吉（1903-1968）

いずがわ・あさきち

【事績】

神奈川県小田原市生まれ。高校卒業後、水産会社で鰯油関連事業に従事したり、小田原市場に勤めたりしたのち、法政大学経済学部に進学。1935年に卒業、1937年に法政大学大学院を修了する。アチックミュージアムの水産史研究室研究員として、捕鯨の経済史的研究で業績を残した。1948年に鹿児島水産専門学校（後の鹿児島大学水産学部）教授に就任、1954年に東京水産大学教授に就任、1967年に退官し、1968年に没した。（山口 1969）

【著作】

伊豆川浅吉『土佐捕鯨史』（上巻・下巻）日本常民文化研究所、1943年。

伊豆川浅吉『日本鰹漁業史』（上巻・下巻）日本常民文化研究所、1958年。

伊豆川浅吉『神奈川県水産業共同組合十年史』水産業協同組合育成強化対策神奈川県協議会、1962年。

【コレクションとの関係】

1936年に神奈川県の漁具や足半などをコレクションに加えた。文書の調査でアチックミュージアムに貢献したが、民具はあまり収集していない。

----- 執筆者：加藤幸治

● 儀貝勇（1905-1977）

いそがい・いさみ

【事績】

工業教育者、民俗学者。広島市生まれ。1926年に神戸高等工業学校（現 神戸大学工学部）機械科を卒業後、広島（県立工業学校）、東京（府立電機工業学校）、新潟、愛知などの県立工業高校で教諭や校長を歴任した後、中部工業大学教授となった。1935年に渋沢敬三が主宰したアチックミュージアムの同人となり、とくに足半と背負梯子の調査に従事した。足半については、共著『所謂足半（あしなか）に就いて（予報）』で「足半の製作及足半と他の履物」を執筆分担、『民具問答集』で広島県下の足半について回答した。また、背負梯子については、論文「背負い梯子について（予報）」の中で儀貝が示した運搬具の分類案がその後の民具研究における運搬具分類の基準となった。1937年、保谷に開設された日本民族学会附属民族学研究所の研究員となるも、やがて戦時体制下における工業教育の強化か

ら多忙となったため辞任。1943年頃、京都府綾部の工業学校校長として赴任した。当時の調査研究をまとめた『丹波の話』に序文を寄せた渋沢敬三宛の礼状が渋沢史料館に残されている。(アチックミュージアム 1936; 宮本馨太郎1963; 無署名 1988; 中村 1992; 藤井 2010)

【著作】

結城次郎・礒貝勇『中国地方に於ける砂鉄製錬法の史的研究』出版者不明、1931年。

礒貝勇『安芸国昔話集』岡書院、1934年。

礒貝勇「アシナカ」アチックミュージアム(編)『民具問答集 第1輯(アチックミュージアムノート 第1)』291-295ページ、アチックミュージアム、1937年。

礒貝勇「背負梯子について(予報)」『民族学年報』1: 271-340、1939年。

礒貝勇『丹波の話』東書房、1956年。

礒貝勇『日本の民具』岩崎美術社、1971年。

【コレクションとの関係】

足半や草履などの履物や手甲や脚絆などの衣類の点数が多い。全体で110点を数えるが、半数ほどが広島県下での収集品である。

----- 執筆者：木村裕樹

●市川信次 (1902-1982)

いちかわ・しんじ

【事績】

民俗学者。新潟県高田市大町(現 上越市)に生まれる。1919年、新潟県立高田中学校で3学年を修業したのち、群馬県立富岡中学校へ転校。1924年に高田市役所に職を得るも、1929年に退職。高田市長と代議士を務めた川合直次の秘書となり、『高田市民読本』を編集。1932年に新潟県中頸城郡桑取村(現 上越市)の小正月調査をおこない、高田瞽女の調査にも着手した。1933年に柳田国男に同行して新潟県東頸城郡(現 上越市ほか)の民俗を調査、翌年に柳田主宰の「山村調査」に参加し、富山県中新川郡白萩村(現 上市町)を探訪してアワラの田植を観察報告した。1934年11月に上京し、渋沢敬三が主宰したアチックミュージアムの同人となる。1935年に日本人類学会・日本民族学会の第1回連合大会が開かれたさい、アチックの代表として高田瞽女について報告。1936年に中央電気(現 東北電力)嘱託となり一時帰郷し、同社の三十年史編纂に従事。1939年に再び上京し、1940年に神田御崎町に丸六商會を設立して社長に就任。戦後は、1947年に高田市公民館運営委員長、

1952年に高田市教育委員、1962年に高田市文化財調査委員、1964年に新井市史編纂専門委員、1972年に上越市立総合博物館長などを歴任した。1972年に第10回第四銀行賞を受賞した。（無署名 1984）

【著作】

市川信次「高田瞽女」『頸城文化』14: 4-7、上越郷土研究会、1962年。

市川信次「中正善寺獅子舞随想」『頸城文化』21: 89-93、上越郷土研究会、1964年。

市川信次「「瞽女」という呼称について」『頸城文化』35: 90-94、上越郷土研究会、1975年。

【コレクションとの関係】

1933年から1939年にかけて新潟県や群馬県、岐阜県、富山県で収集した足半や草履など84点をコレクションに加えた。

----- 執筆者：木村裕樹

● 伊藤金左衛門（?-?）

いとう・きんざえもん

【事績】

1925年、渋沢栄一の唱導する道徳経済合一主義に基づいて主に商工業者の知徳を進め人格を高尚にすることを目的とする竜門社に、通常会員として入社した。当時の肩書きは第一銀行行員。（無署名 1925）

【コレクションとの関係】

1928年に主として愛知県で集めた郷土玩具20点あまりをコレクションに加えた。

----- 執筆者：木村裕樹

● 伊藤力（?-?）

いとう・つとむ

【事績】

詳細は不明だが、アチックミュージアムが刊行した『民具問答集』において、愛知県北設楽郡下川村下田（現 東栄町）の苗代ごてについて解説をしている。『民具問答集』は、民具1点1点の製作法や用法、現地での名称や由来、伝承などを使用地の人たちに尋ね、得

られた情報をまとめたもの。(アチックミュージアム編 1937)

【コレクションとの関係】

1929年に愛知県北設楽郡下川村下田で集めた自在鉤をコレクションに加えた。なお、『民具問答集』の資料を集めたのは、記事に付されていた番号を手がかりにすると、渋沢敬三である。

----- 執筆者：飯田卓

● 稲喜蔵 (?-?)

いな・よしぞう

【事績】

日本統治下のミクロネシア（南洋群島）で公学校教員をつとめた教育者。静岡県の菅沼小学校校長をつとめた後、1938年頃、トラック諸島（現 ミクロネシア連邦チューク諸島）の夏島（トノアス島）公学校で校長をつとめた。民博に収められた資料からは、パラオの主島であるバベルダオブ島のマルキョク公学校にも勤務していたことがわかる。当時、同じくミクロネシアのサタウル島に在住していた彫刻家で画家、民族誌家の土方久功とも親交があった。（南洋経済研究所編 2004; 土方著・須藤・清水編 2012）

【著作】

稲喜蔵「実績を挙げつつある児童の口腔衛生について」『養護』3(1): 13-15、1930年。

稲喜蔵「トラック支庁夏島公学校寄宿舎竣成」『南洋群島』4(9): 36-37、1938年。

稲喜蔵「赤山白三郎伝」『南洋群島』3(8): 19-22、1937年。

【コレクションとの関係】

「パラオの手紙 参考品」と題された結縄標本（紐の結びかたによって用件を伝えたもの）一式をコレクションに加えた。年代は不明。箱のおもて書きには「出品者 マルキョク公学校 稲喜蔵」と記されており、保谷民博の管理台帳はこれに従って稲を採集者としている。寄附者は永積昭となっている。永積は歴史家で東京大学文学部教授、1929生まれ、1987年没。

----- 執筆者：坂野徹

● 伊波普猷（1876-1947）

いは・ふゆう

【事績】

言語学者、民俗学者。沖縄県那覇市出身。「沖縄学の父」と呼ばれ、沖縄言語学や沖縄民俗学の分野を開拓した。東京帝国大学を卒業したのち、帰郷し、沖縄県立図書館の館長を務めた。1924年に図書館長を辞任したのち再び上京し、柳田国男らと交流して、言語学のみならず、日本民俗学でも南島研究、沖縄研究の分野に大きな影響を与えた。（金城 1948; 東恩納 1949; 鳥袋 1949）

【著作】

伊波普猷『古琉球』沖縄公論社、1911年〔岩波書店、2000年〕。

伊波普猷『をなり神の島 1』平凡社、1973年。

伊波普猷『伊波普猷全集（全11巻）』平凡社、1993年。

【コレクションとの関係】

1928年に、沖縄県や東京都、京都市、朝鮮半島、台湾、中国などで集めた資料20点あまりを寄贈している。

----- 執筆者：小島摩文

● 揖斐仙次郎（?-?）

いび・せんじろう

【事績】

詳細は不明だが、アチックミュージアムが刊行した『民具問答集』において、新潟県のカンジキについて解説をしている。『民具問答集』は、民具1点1点の製作法や用法、現地での名称や由来、伝承などを使用地の人たちに尋ね、得られた情報をまとめたもの。（アチックミュージアム編 1937）

【コレクションとの関係】

1933年に新潟県西蒲原郡四ツ合村水沢新田で集めたカンジキをコレクションに加えた。当時の資料管理原簿を見ると、『民具問答集』の記事に付されていたものと同じ番号が記されており、同一のものであることがわかる。

----- 執筆者：飯田卓

●入江銀吉 (???)

いりえ・ぎんきち

【事績】

明治30年代に東京の穂積陳重家の書生となって大倉商業学校を卒業し、第一銀行に入行した。同行の神戸支店および下関支店等を経て、1918年頃には木下貿易会社支店、1921年頃にはペン貿易商会に勤務した。1922年頃から升本本店支配人を務めた。穂積陳重が一時期養子に出ていた宇和島の入江佐吉家の嫡子。(穂積 1989;『竜門雑誌』)

【著作】

入江銀吉「地むしのよだれ」『竜門雑誌』576: 42-45、1936年。

入江銀吉「癌」『竜門雑誌』654: 30-32、1943年。

【コレクションとの関係】

1921年に、ジャワの「ワンヤン」「仮面」をコレクションに加えた。

----- 執筆者：永井美穂

●岩井亀千代 (???)

いわい・かめちよ

【事績】

文化自動車株式会社社員か。文化自動車株式会社は、島根県松江市に本社を置く島後地方(隠岐)の自動車サービス会社。岩井は、アチックミュージアムが1934年5月に隠岐調査をおこなったさい、自動車の運転手として雇われた。なお、文化自動車株式会社は、1946年5月までに、現在の一畑電気鉄道株式会社によって吸収合併された。

【コレクションとの関係】

1934年5月24日から28日にかけて、島根県の資料をコレクションに加えている。日付のわからないものも含めれば、資料の点数は30点近くにのぼる。おそらく、アチックミュージアム同人たちが現地で譲りうけたり買いとったりしたものを、岩井が東京に送ったものだろう。

----- 執筆者：小林光一郎

● 岩片白銅（?-?）

いわかた・びゃくどう

【事績】

新潟県中頸城郡桑取村（現 上越市）の者。1935年2月に渋沢敬三やアチックミュージアムの同人たちが小正月行事の調査に訪れたさい、岩片は一行の宿舎として自宅を提供した。渋沢の職歴や調査旅行に関する写真を集めた写真集『柏葉拾遺』には、岩片家のいろりに集まった一行と家人の写真が収められている。（中山 1956）

【コレクションとの関係】

1935年5月30日に新潟県中頸城郡谷浜村西横山で集めた芋桶（おほけ）をコレクションに加えた。調査団が帰京した後に岩片から東京へ送ったものと推測される。

----- 執筆者：飯田卓

● 岩倉市郎（1904-1943）

いわくら・いちろう

【事績】

鹿児島県大島郡早町村（現 喜界町）阿伝出身。1923年に大阪の懐徳堂で学び、1927年に上京して伊波普猷のもとで琉球列島の言語学と民俗学を学んだ。1931年に新潟県南蒲原郡で昔話の調査を行い、文野白駒の筆名で『加無波良夜譚』として出版した。1935年に渋沢敬三が主宰していたアチックミュージアムの研究員となり、同年11月から翌々年3月まで、故郷 喜界島で過ごして民俗調査や民具調査にあたった。このうち1936年5月から1ヶ月間は沖永良部島で調査し、喜界島を離れる際にも甌島に寄って昔話を採集した。喜界島では、小学校教員をしていたときの教え子である拵嘉一郎を助手として、共同で調査している。拵は、後に渋沢敬三の書生となった。（宮本馨太郎1943; 鹿児島県姓氏家系大辞典編 1994; 拵 2007）

【著作】

文野白駒『加無波良夜譚』玄久社、1932年 [岩倉市郎『南蒲原郡昔話集』三省堂、1943年]。

岩倉市郎『喜界島方言集』中央公論社、1941年。

岩倉市郎『喜界島漁業民俗（アチックミュージアム彙報 第55）』アチックミュージアム、1941年。

【コレクションとの関係】

アチックミュージアムの同人として活動していたこともあり、保谷民博ができる以前にコレクションを管理していたアチックミュージアムに多数の収集品を納めた。その数は200点を超える。なかでも、帰郷して民俗調査をおこなった1935年から1937年にかけては多数の民具を網羅的に採集し、当時の島の生活を知るための貴重な資料となっている。

----- 執筆者：小島摩文

● 岩崎卓爾 (1869-1937)

いわさき・たくじ

【事績】

気象技術者、民俗学者。仙台藩士の子として現在の宮城県仙台市に生まれる。第二高等学校へ入学するも、気象観測手を志したため、中退して札幌測候所に入所。1899年に開設されたばかりの中央気象台附属石垣島測候所（現 石垣島地方気象台）へ赴任した。翌年には所長となり、以後、死去するまでの40年間を石垣島で過ごした。気象観測のかたわら、八重山の民俗や歴史、生物などを研究し、2001年に石垣市より名誉市民として顕彰された。（瀬名波 1942; 幹 1983; 上田・西沢・平山・三浦編 2001）

【著作】

岩崎卓爾『石垣島案内記』岩崎卓爾、1909年。

岩崎卓爾『八重山童謡集』肥後藤八、1912年。

岩崎卓爾『ひるぎの一葉』浜崎莊市、1920年。

岩崎卓爾『岩崎卓爾一卷全集』伝統と現代社、1974年。

【コレクションとの関係】

1935年から1936年にかけて約80点の石垣島の資料を寄贈。

----- 執筆者：小島摩文

● 岩田慶治 (1922-2013)

いわた・けいじ

【事績】

文化人類学者。神奈川県横浜市生まれ。京都大学文学部史学科人文地理学専攻を卒業後、

大阪市立大学、東京工業大学、国立民族学博物館、大谷大学などで教鞭をとる。東京工大名誉教授、国立民族学博物館名誉教授。1957年から1958年にかけて、日本民族学協会が組織した東南アジア稲作民族文化総合調査に参加し、タイ、ラオス、カンボジアを調査。以後も東南アジアの稲作民族を精力的にフィールドワークし、多くのモノグラフを執筆した。また、地理学者フンボルトの「コスモス」概念や道元の禅仏教を手がかりに、ユニークな人類学的世界像を提起した。（有馬 1976）

【著作】

岩田慶治『日本文化のふるさと—東南アジア稲作民族をたずねて』角川書店、1966年。
岩田慶治『草木虫魚の人類学—アニミズムの世界』淡交社、1973年。
岩田慶治『岩田慶治著作集（全8巻）』講談社、1995年。

【コレクションとの関係】

1957年から1958年にかけて、ラオスやタイなどで集めた資料30点あまりをコレクションに加えている。明らかに、東南アジア稲作民族文化総合調査のさいに集められたものである。

----- 執筆者：菊地暁

● 上原専禄（1899-1975）

うへはら・せんろく

【事績】

歴史学者。京都に生まれ、東京商科大学研究科を卒業後、ウィーン大学に留学し、帰国後の1926年に高岡高等商業学校（現 富山大学）教授となった。その後、東京商科大学教授および草創期の横浜専門学校（現 神奈川大学）講師を務め、東京産業大学（東京商科大学の後身、現 一橋大学）学長を歴任した。ドイツ中世史を専攻し、戦後は新しい世界史像の形成を模索。また国民文化会議議長などを務め、平和運動や教育運動を進めたほか、晩年は日蓮を研究した。（上原 1944; 1948; 1949a; 1949b; 1953a; 1953b; 1957a; 1957b; 1958; 1974; 1975; 土肥 2012; 上田・西沢・平山・三浦編 2001）

【著作】

上原専禄『独逸中世史研究』弘文堂、1942年。
上原専禄『学問への現代的断想』弘文堂、1950年。
上原専禄『平和の創造—人類と国民の歴史的課題』理論社、1951年。
上原専禄『世界史における現代のアジア』未来社、1956年。

上原専禄『歴史学序説』大明堂、1958年。

上原専禄『国民形成の教育』新評論、1964年。

【コレクションとの関係】

1929年にイタリアおよびハンガリーで集めた玩具数点をコレクションに加えた。

----- 執筆者：井上潤

● 牛尾三千夫 (1907-1986)

うしお・みちお

【事績】

民俗芸能研究者、宮司。在野の研究者として民俗芸能、なかでも中国地方の大田植研究を精力的におこなった。1929年、國學院大學神道部に入学。同大学卒業までの4年間に民俗学に興味を抱き、柳田国男、折口信夫、西角井正慶らと面識を持つ。卒業後は島根県邑智郡で宮司を務めるかたわら、在野の研究者として、中国山地をフィールドに大田植と神楽の調査・研究をおこなった。渋沢敬三による1940年の出雲調査に同行し、アチックミュージアムが刊行した『粒々辛苦・流汗一滴——島根県邑智郡田所村農作覚書』（1941年）の著者 田中梅治にも会っている。戦後は島根県文化財専門委員なども務めた。(牛尾 1979; 高野 2009)

【著作】

牛尾三千夫『大田植と田植歌』岩崎美術社、1968年。

牛尾三千夫『大田植の習俗と田植歌』名著出版、1986年。

【コレクションとの関係】

1939年から1941年にかけて、島根県邑智郡で集めた民具をコレクションに加えている。

----- 執筆者：小林光一郎

● 歌川節雄 (?-1957)

うたがわ・せつお

【事績】

新潟県西頸城郡糸魚川町（現 糸魚川市）出身。1920年から1927年まで、渋沢敬三家の書生として三田綱町の渋沢邸に寄寓した。電気学校を卒業後、沖電気株式会社に入社。1949

年に同社を退社して新光梱包運輸株式会社を創立、取締役として経営にあたった。また、西銀座で料理屋「歌川」を営んだ。（柏窓社 1957; 永島 1957; 弓野 1957）

【コレクションとの関係】

1922年に新潟県西頸城郡糸魚川の「藁靴」を、1927年に同所の「独楽」、「鳩笛」、「蛙笛」、「瓢箪」、「前掛」、「煙草入」、「弁当箱」、「下駄」、同県佐渡郡相川の「野呂間人形」、同県長岡市の「厚司」、東京の「手品玩具」、中国の「太鼓打人形」、「松風ゴマの一種」等を、1929年に東京の「槍振人形」を、1930年に栃木県法師の「草履」、「煙草入」、「背負縄」、「ビク」、「藁靴」、「砥石 砥石入」、「張子面」をコレクションに加えた。

----- 執筆者：永井美穂

● 内田武志（1909-1980）

うちだ・たけし

【事績】

方言研究者、菅江真澄研究者、点字翻訳者。秋田県角館市出身。父の勤務地の関係で静岡商業学校に入学したが、在学中に発病。静岡県葵文庫長 貞松修蔵の紹介で渋沢敬三に会った縁で、上京して柳田国男や渋沢敬三の指導を受け、寝たきりのまま民俗学の研究を続けた。1945年に妹のハチと共に秋田市に移り住み、同年、柳田や渋沢を顧問として菅江真澄研究会を設立、菅江真澄や角館方言の研究に情熱を注いだ。1971年以降、未来社から『菅江真澄全集』（全12巻、別巻2巻）を宮本常一と共編で出版。民俗学への貢献に対して、1952年に秋田市文化賞（妹ハチと共同受賞）、1967年に秋田県文化功労賞、1975年に柳田国男賞を受賞した。また、点字を習っていた内田は、視覚障害者の教育にも情熱を示して「みちびきの会」を発足させ、「ジャン、クリストフ」その他文学作品を日本で初めて点訳している。（渋沢 1933a; 1955b; 内田 1979）

【著作】

内田武志『鹿角方言集』刀江書院、1936年。

内田武志『静岡県方言誌 分布調査第三輯 民具篇（アチックミュージアム彙報 第25）』アチックミュージアム、1941年。

内田武志『菅江真澄全集』（全12巻＋別巻2）未来社、1971-1981年。

【コレクションとの関係】

1935年1月18日に編み細工を中心とする静岡県の民具を、同年2月14日に同じく履物を

中心とする静岡県の民具を、同じく同年11月7日に同じく漁具を中心とする静岡県の民具を、それぞれコレクションに加えている。

----- 執筆者：小林光一郎

● 内山敏 (?-?)

うちやま・びん

【事績】

渋沢敬三が主宰したアチックミュージアム（アチック・ミュージアム・ソサエティ）初期の同人。『A・M・S日誌』によると、1921年2月2日に本郷のフランス料理店「鉢の木」でおこなわれた「第1回の集会」に出席した。アチックミュージアムの資料台帳である『おもちゃ箱原簿 第壺』の中扉に連記された同人名に、内山敏の名がみえる。（伝記編纂刊行会編 1979; 近藤雅樹編 2001; 『アチックマンスリー』）

【コレクションとの関係】

1920年から1921年にかけてのきわめて早い時期、すなわちアチックミュージアムの草創期に、神社で集めた縁起物をコレクションに加えた。

----- 執筆者：木村裕樹

● 梅原達治 (1928-?)

うめはら・たつじ

【事績】

民俗学者、先史人類学者。福岡県福岡市生まれ。東京大学理学部人類学科卒業後、理学部助手となり、札幌大学教養部助教授、同教授を経て、札幌大学法学部教授。1953年に日本民族学協会がおこなったアイヌ民族総合調査では、祖父江孝男や蒲生正男らとともに行動した。北海道の神社祭祀などについて多くの論文を執筆したほか、北海道の農耕についての考古学的調査もおこなっている。（無署名 1998）

【コレクションとの関係】

1954年から1955年にかけて、北海道で集めた民具など数点をコレクションに加えた。

----- 執筆者：飯田卓

●江上恒之（?-?）

えがみ・つねゆき

【事績】

銀行家。熊本県出身。1903年の『龍南会雑誌』編集委員に名があることから、第五高等学校出身と推測される。1908年に東京帝国大学法科大学を卒業。戦前は台湾銀行に務め、大阪支店支配人代理にまで昇格した。1920年に福岡鉱業専務取締役となり、現在の福岡市内に位置する早良炭田の経営を担うが、台湾銀行からの出向と思われる。その後、台湾に戻って頭取を側近として補佐したらしく、『台湾統治と其功労者』によれば「今や、其事績頗る顕著なるものがある」「我が台湾の財界に於ける古参株」だったという。戦後の経歴は不明。（橋本 1930; 薄田 2009; 永江 2014）

【コレクションとの関係】

1953年にタイの風俗人形をコレクションに加えた。

----- 執筆者：飯田卓

●江上波夫（1906-2002）

えがみ・なみお

【事績】

東洋史学者、考古学者。1930年に東京帝国大学文学部東洋史学科を卒業後、北京に留学し中国で学ぶ。1931年に東方文化学院研究員、1944年に民族研究所の所員となった。戦後は1948年に東京大学東洋文化研究所の教授、1962年からは同研究所の所長となり、数多くの海外調査を企画・実施した。東大定年後は札幌大学教授や上智大学教授、古代オリエント博物館館長などを歴任。北アジアから中東にかけて幅広く調査をおこない、多くの後進に影響を及ぼした。日本のユーラシア考古学を代表する研究者である。また、1948年の『民族学研究』13巻1号に掲載された座談会「日本民族＝文化の源流と日本国家の形成」のなかで彼が提唱した騎馬民族征服王朝説は、その後、多くの歴史・考古学ファンの人気を博し、一世を風靡した。（江上 1995; 斎藤 2006）

【著作】

江上波夫『ユウラシア古代北方文化—匈奴文化論考』山川出版社、1950年。

江上波夫『騎馬民族国家—日本古代史へのアプローチ』中央公論社、1967年。

【コレクションとの関係】

1931年から1944年にかけて中国内蒙古で集めた民具や祭具のほか、1953年にタイで集めた民具、1955年にスペインで集めた民具、1960年にイランやイラク、トルコで集めた民具や祭具、1966年に青森県で集めた民具などをコレクションに加えた。1960年の資料は、東京大学イラク・イラン遺跡調査団に加わって調査した時に集めたものと思われる。また、年代は不明だが、満洲で集めたらしい民具も多数ある。これら資料の総数は130点を超える。

----- 執筆者：坂野徹

●江木盛雄（?-?）

えぎ・もりお

【事績】

渋沢敬三が主宰したアチックミュージアム（アチック・ミュージアム・ソサエティ）の活動初期の同人。「A・M・S日誌」によると、渋沢がイギリス駐在を終えて帰国した直後の復興第1回例会（1925年12月4日開催）を機に、アチックミュージアムがとり組んだ「チームワークとしての玩具研究」では、牛の玩具を担当した。1940年に大日本製糖ジャワ工場長を務めた。（天野ほか 1940; 渋沢 1992; 飯田・朝倉編 2016）

【著作】

江木盛雄「世界の砂糖事情を展望」『砂糖経済』15(2): 1-4、1949年。

江木盛雄「世界の砂糖事情と我国の需給」『食糧の科学』4(4): 28-31、1950年。

江木盛雄「砂糖海外相場とその背景」『食品加工』5(11): 35、1951年。

【コレクションとの関係】

1928年に東京都や東北地方などで集めた玩具を、1930年にインドネシアのジャワ島で集めた玩具をコレクションに加えた。しかし、1905年に和歌山県高野山で集めた「楊枝」をはじめとして、もっと古い時期の採集もあり、採集時期が不明のものも含めれば資料の数は約80点にのぼる。また、1926年と1927年に集められ、採集者の欄に「江木」とのみ記された資料も、江木盛雄が集めた可能性が高い。これらを含めれば、江木盛雄が集めたとおぼしき資料は合計で125点にのぼる。

----- 執筆者：木村裕樹

● 江坂輝弥（1919-2015）

えさか・てるや

【事績】

先史考古学者。専門は縄文文化と韓国考古学。1948年、慶應義塾大学文学部史学科東洋史専攻を卒業して同専攻副手となり、助手、専任講師、助教授を経て1971年に教授となった。定年後、松阪大学教授も務めた。清水潤三や八幡一郎とともに、1957年から1958年に日本民族学協会が組織した第1次東南アジア稲作民族文化総合調査団に加わり、考古・歴史学班の一員として調査を実施した。（ニュー・サイエンス社編 2015; 渡辺 2015）

【著作】

江坂輝弥『土偶』校倉書房、1960年。

江坂輝弥『縄文土器文化研究序説』六興出版、1982年。

【コレクションとの関係】

1953年から1954年にかけて東北地方や関東地方で集めた民具のほか、1957年にタイやラオスで集めた民具をコレクションに加えた。その総数は約30点にのぼる。タイやラオスの資料は、年代が不明なものも含め、「第一東南ア調査団」などと記載されていることから、明らかに東南アジア稲作民族文化総合調査団に際して集められたものである。

----- 執筆者：坂野徹

● 遠藤武（1911-1992）

えんどう・たけし

【事績】

服飾史研究家、生活文化学者。東京生まれ。1935年に立教大学文学部史学科を卒業後、帝室博物館研究員となる。日本実業史博物館準備室に招かれて主事を務めた後、文部省学術課史料館文部事務官と和洋女子大学教授を兼任し、文化女子大学主任教授並びに文化学園服飾博物館館長となった。福島大学や大妻女子大学、静岡女子大学、関東学院女子短期大学、郡山女子短期大学、湘北短期大学でも教鞭をとった。日本服飾学会会長、日本風俗史学会東京副支部長、文化財保護審議会専門委員、神奈川大学日本常民文化研究所理事、江戸東京博物館資料収集委員等を歴任。1961年に國學院大學で文学博士の学位を取得した。

【著作】

遠藤武『日本の民具』慶友社、1964年。

遠藤武『遠藤武著作集（全3巻）』文化出版局、1985-1988年。

【コレクションとの関係】

1958年に八丈島などで集めた民具約10点をコレクションに加えた。

----- 執筆者：井上潤

● 及川宏（1911-1945）

おいかわ・ひろし

【事績】

社会学者。親族研究や村落研究に貢献した。北海道旭川市生まれ。幼少期に岩手県増沢村（現 奥州市江刺区）に転居。盛岡中学卒業後、水戸高校を経て、東京帝国大学で戸田貞三に師事。卒業後は、労働科学研究所の研究員補、帝国学士院東亜諸民族調査嘱託、民族研究所助手・研究員などとして、学術調査に従事した。1944年、古野清人とともに南方出張（マレー、スマトラ、ジャワなど）に出て帰国した後、体調が回復せず35歳で他界した。「同族組織と婚姻及び葬送の儀礼—旧仙台領増沢村に於ける慣行に就いて」（1940年）など、精緻なモノグラフ研究を残した。（喜多野 1967）

【著作】

喜多野清一（編）『同族組織と村落生活』未来社、1967年。

【コレクションとの関係】

1938年に千葉県で集めた履物をコレクションに加えた。

----- 執筆者：菊地暁

● 大賀一郎（1883-1965）

おおが・いちろう

【事績】

植物学者。東京帝国大学理科大学を卒業後、1910年に第八高等学校講師、翌年に同校教授となったのち、1917年より南満洲鉄道株式会社（満鉄）に勤務する。大連での勤務中、泥

炭から発掘された蓮の葉の発芽について研究を始め、留学先のアメリカや帰国途上のイギリスでも実験を試みた。1926年、奉天教育専門学校で満鉄社員の教育にあたるものの、満洲事変直後の1932年に退職して東京に戻り、非常勤講師のかたわら研究を続けた。1952年には2000年前の地層から出土した蓮の種子を発芽・開花させることに成功し、話題を呼んだ。（大賀一郎博士追悼文集刊行会編 1967）

【コレクションとの関係】

1956年に府中市で採集した団扇をコレクションに加えた。大賀は、終戦直前頃から府中に居を構えており、1956年頃には府中市文化財専門委員の委嘱を受けていた。

----- 執筆者：飯田卓

● 大里雄吉（?-1939）

おおさと・ゆうきち

【事績】

民具研究者。1937年、アチックミュージアムの民具研究を担った第二部会の幹事となり、筥研究に関わる。考古学関連分野の交友が深く、山内清男とともに1922年に上本郷貝塚を発掘調査した。（アチックミュージアム 1937）

【著作】

大里雄吉「水郷の有史以前」『武蔵野』3: 40-42、1920年。

大里雄吉「所謂文祿在銘の板碑に就いて」『歴史地理』49(3): 81-82、1927年。

大里雄吉「宋時代の文獻に見ゆる雷斧・雷楔」『社会及国家』10月: 41-45、1936年。

【コレクションとの関係】

1938年から1939年にかけて、アチックミュージアム同人たちが研究しようとしていた筥3点をコレクションに加えている。資料の数は少ないものの、収集した場所は岩手県、千葉県、東京都と広範にわたる。

----- 執筆者：加藤幸治

●大沢三千三（?-?）

おおさわ・みちぞう

【事績】

1935年10月発行の『アチックマンズリー』第4号に、「九月二十六日 田中薫、大沢三千三、安済満、門川盛人、有賀博、森武の諸氏来訪」とある。大沢、安済、門川はともに足半草履の提供者であることから、まもなく刊行される『所謂足半（あしなか）に就いて（予報一）』にかかわる訪問であったと考えられる。（アチックミュージアム編 1935; 1936; 『アチックマンズリー』）

【コレクションとの関係】

1935年8月19日に千葉県夷隅郡御宿町大字浜で集めた足半草履2点をコレクションに加えた。これらはアチックミュージアムにおける足半研究の標本資料として使用された。

----- 執筆者：飯田卓

●太田孝太郎（1881-1967）

おおた・こうたろう

【事績】

中国史家、篆刻家、中国古印の収集家としても知られる実業家。中国金石文と古印研究をきわめ、福岡県で出土した「漢倭奴国王」印の偽物説に終止符を打ち、国宝指定に際して功績をあげた。旧盛岡藩士の長男として生まれ、1906年に早稲田大学を卒業後、横浜正金銀行に入行。天津支店次席を経て本店総務部の勤務となるも、1920年に退職し、盛岡銀行支配人に就任した。この年は、アチックミュージアムを主宰していた渋沢敬三が横浜正金銀行に入行した年である。帰郷後は『南部叢書』の翻刻刊行や『盛岡市史』の刊行などに尽力し、郷土史家としても名望を博した。（近藤 2007; 日本常民文化研究所編 1943）

【著作】

太田孝太郎（等校）『南部叢書（全10冊）』、南部叢書刊行会、1931年。

太田孝太郎『漢魏六朝官印考』吉田孝吉、1966年。

【コレクションとの関係】

岩手県や秋田県で集めた資料を多数コレクションに加えた。集めた年代は不明なものが多いが、判明しているものは1931年。収集地が不明なものを含めれば、資料の数は150点近

くにのぼる。とりわけユニークなのは、東北地方で信仰対象となっているオシラサマ40体。これらを紹介した『おしらさま図録』を参考資料として、1938年12月14日に届いた33体が、1955年に「おしらさまコレクション」として国指定重要有形民俗文化財第1号となった。

----- 執筆者：木村裕樹

● 太田雄治（1913-1981）

おおた・ゆうじ

【事績】

新聞記者、編集者。秋田県仙北郡角館町（現 仙北市）生まれ。1928年頃より武藤鉄城に師事、マタギ研究を始めた。1939年に秋田魁新報社に入社し、秋田のみならず岩手、山形、新潟の各地でマタギ集落を探訪し、精力的な取材活動を続けた。1947年に同社角館支局長。1972年より、年2回のペースでタウン誌『里』（1977年に『しだれざくら』と名称変更）を編集発行した。

【著作】

太田雄治「アイヌのバラシュート」『民俗学』5(12): 27-30、1933年。

太田雄治『秋田たべもの民俗誌』秋田魁新報社、1972年。

太田雄治『マタギ—消えゆく山人の記録』翠楊社、1979年 [八幡書店、1989年]。

【コレクションとの関係】

1933年に北海道で集めたスキー状の履物（パラシュトゥ）をコレクションに加えた。これは石狩アイヌ山下三五郎氏が製作したもので、「氷上に使用する一種のカンヂキ」である。ただし、スキーのように滑走するものではない。

----- 執筆者：木村裕樹

● 太田陸郎（1896-1942）

おおた・ろくろう

【事績】

民俗学者。兵庫県を中心に民俗資料を採集した。兵庫県飾磨郡置塩村（現 姫路市）生まれ。姫路中学校を経て同志社大学法学部を卒業。太田家の婿養子となる。1924年より兵庫

県社会課に主事補として勤務。柳田国男に師事し、同志と兵庫県民俗学研究会を設立する。1936年に関西の民俗学サークルが近畿民俗学会に大同団結した後は、機関誌『近畿民俗』の編集に従事した。同年7月に応召され、中国に駐屯する間も民俗採集を続けた。シンガポールからの帰任中、飛行機が台湾 白雪山に墜落し、死亡した。没後に刊行された『支那習俗』には、柳田国男が序文を寄せている。(沢田 1958; 加茂 1992; 王 2008)

【著作】

太田陸郎『兵庫県民謡集』兵庫県民俗研究会、1932年。

太田陸郎『支那習俗』三国書房、1943年。

【コレクションとの関係】

1934年から1937年にかけて、兵庫県と岡山県で集めた民具約20点をコレクションに加えている。とくに稲藁で作られたものが多い。

----- 執筆者：菊地暁

●大瀧新蔵 (?-?)

おおたき・しんぞう

【事績】

郷土史家。もっぱら新潟県村上地方の郷土史について研究を進めた。1930年代後半には、新潟県民俗学会の雑誌『高志路』で論考を発表している。1936年に洪沢敬三らが村上・三面地方の調査に訪れたさいには、丹田昭一郎や山貝如松らとともに一行を受け入れ、宴席では青年たちに獅子舞を披露させた。なお、戦後になって村上市教育委員会は、大瀧が所蔵していた村上城主歴代譜を翻刻している。

なお、山形県出身の海軍軍人に、同姓同名の大瀧新蔵がいる。1897年に海軍兵学校を卒業して少尉候補生となり、1903年に大尉、1905年に少佐、1912年に中佐にまで昇級した。もし郷土史家の大瀧と同一人物であるとすれば、退役後に村上に移って郷土史に転じたことになるが、詳細は不明。(村上市教育委員会編 1970; 海軍歴史保存会編 1995; 『アチックマンスリー』; 『官報』)

【著作】

大瀧新蔵「村上版史記攻」『高志路』3(2): 23-26、1937年。

大瀧新蔵「村上地方の和算家の研究」『高志路』5(5): 39-44、1939年。

【コレクションとの関係】

1938年に新潟県岩船郡で集めた履物をコレクションに加えた。

----- 執筆者：卯田宗平、飯田卓

● 大宮美年臣（?-?）

おおみや・みねおみ

【事績】

滋賀県栗太郡栗東町（現 栗東市）の大野神社の神官。國學院大學に入学し、渋沢敬三のもとで資料整理をしていた祝宮静に師事した。1935年10月10日発行の『アチックマンズリー』第4号に「内浦史料」の「帳面類の整理が國學院の小林、大宮両氏によって始められつつある」とある。また、1936年2月28日発行の同誌第8号に「二月九日 知里真志保、小林末夫 大宮美年臣の諸氏来訪」とある。（『アチックマンズリー』）

【著作】

大宮美年臣「湖南に残る行事一つ二つ——滋賀県栗太郡金勝村」『旅と伝説』10(5): 53-56、1937年。

【コレクションとの関係】

1935年から1936年にかけて滋賀県栗太郡金勝村や同県甲賀郡雲井村で集めた民具や祭具など約10点をコレクションに加えた。

----- 執筆者：木村裕樹

● 岡茂雄（1894-1989）

おか・しげお

【事績】

軍人、出版人、随筆家。長野県東筑摩郡松本町（現 松本市）生まれ。民族学者の正雄は弟。士官学校を経て職業軍人となるも、本人の希望で休職。予備役編入中に東京帝国大学理学部人類学教室の選科生となり、鳥居龍蔵に師事。人類学、民族学、民俗学、考古学、言語学といった分野の発展を期して「岡書院」を開業、雑誌『民族』（1925-1928年）や『ドルメン』（1932-1939年）を発行するなど、斯学関係書の刊行に尽力した。並行して山岳書出版社「梓書房」を開業、日本野鳥の会の機関誌『野鳥』（1934年-）を創刊。このほ

か、自社出版とはならなかったが、新村出に国語辞典の執筆編集を依頼、のちに『広辞苑』（岩波書店、1955年）に結実する。編集者として、柳田国男、南方熊楠ら当代一流の学者たちと親交を結んだ。随筆『本屋風情』は、大正末から昭和初期の学界事情を伝える好著として有名。（山口 1998）

【著作】

岡茂雄『本屋風情』平凡社、1974年。

岡茂雄『炉辺山話』実業之日本社、1976年。

岡茂雄『閑居漫筆』評論社、1986年。

【コレクションとの関係】

長崎市の独楽2点と中国山東省青島の楽器など5点をコレクションに加えた。年代はいずれも1930年。長崎は中国への玄関口に位置することから、1回の旅行でこれらの資料を同時に集めた可能性がある。

----- 執筆者：菊地暁

● 岡長平（1890-1970）

おか・ちょうへい

【事績】

文筆家、郷土史家。慶應義塾大学を卒業後、新聞記者を経て、偕楽園主事や大日本興行協会岡山県支部理事長を務めた。戦後は岡山市会議員や岡山県文化財保護委員を務めるかわら、著述活動に励んで多数の著作を残した。（日外アソシエーツ編 2004）

【著作】

岡長平『岡山盛衰史』吉田書店、1937年〔研文館吉田書店、1975年〕。

岡長平『岡山経済文化史』松島定一、1939年〔研文館吉田書店、1975年〕。

岡長平『岡長平著作集（全5巻）』岡山日日新聞社、1971年。

【コレクションとの関係】

岡山県の民具2点をコレクションに加えた。「採集期」は不明。

----- 執筆者：飯田卓

● 岡正雄 （1898-1982）

おか・まさお

【事績】

民族学者。日本民族文化形成論に貢献した。長野県東筑摩郡松本町（現 松本市）生まれ。兄 茂雄は岡書院経営者。松本中学校、第二高等学校を経て、東京帝国大学文学部社会学科を卒業。在学中より柳田国男に師事、卒業後は柳田家の書生となり、雑誌『民族』（1925-1928年）を編集。やがて学問的方向性の違いから柳田と決別。二高の二年先輩である渋沢敬三の援助によりウィーン大学に留学、ヴィルヘルム＝シュミットの下で博士論文『古日本の文化層』を執筆。日本の民族文化を5つの種族文化複合として把握する視点は、後の民族文化形成論に多大なる影響を与える。戦時中は国立の民族研究所（1943-45年）の設立運営に尽力。戦後は東京都立大学教授、明治大学教授、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所長等を歴任、後進の育成に努める。文化財保護法（1950年公布）施行後は民俗資料（のちの民俗文化財）保護の専門委員となり、民俗資料の調査・研究・保護や国立民俗博物館の設立運動に尽力した。1950年代の博物館設立運動は、1970年代の国立民族学博物館創設ならびに1980年代の国立歴史民俗博物館創設によってようやく実を結んだ。（クライナー、ヨーゼフ編 2013）

【著作】

岡正雄『異人その他―日本民族＝文化の源流と日本国家の形成』言叢社、1979年。

【コレクションとの関係】

比較的早い時期（1927年）に長野県の資料をコレクションに加えているほか、1937年と翌1938年に、日本民族学会の北方文化調査団の一員として、馬場脩らとともに千鳥と樺太で発掘調査ならびに民族学調査をおこない、多数の資料を収集した。

----- 執筆者：菊地暁

● 岡田松三郎 （?-?）

おかだ・まつさぶろう

【事績】

奥三河の郷土研究者。中設楽出身。早川孝太郎や夏目一平らとともに設楽調査などに参加し、奥三河地域の民俗や歴史を研究した。中設楽がいわゆる「入り交りムラ」の特徴を持つことを早川に教えた。（早川著・宮本常一・宮田・須藤編 2003）

【コレクションとの関係】

1929年に愛知県北設楽郡御殿村中設楽の民具を2点、1935年に同じ場所から履物を2点、コレクションに加えた。渋沢敬三の主宰するアチックミュージアムが足半の研究を進める中での収集であったと考えられる。

----- 執筆者：小林光一郎

● 岡野知十 (1860-1932)

おかの・ちじゅう

【事績】

俳人、文筆家。北海道出身。本名は敬胤、通称 正之助、別号 正味。函館毎日新聞社に入社した後に上京し、「俳諧風聞記」で注目を集める。1901年に『半面』を創刊し、新々派を立ち上げた。俳諧の史的研究のために多くの俳書を収集。その蔵書は、知十文庫として東京大学総合博物館が所蔵している。1932年の計報記事では、当時株式会社角丸商会取締役を務めていたことがわかる。(日外アソシエーツ編 2011; 『読売新聞』1932年8月16日付; 『朝日新聞』1932年8月15日付)

【著作】

岡野知十『晋其角』豪華房、1900年。

岡野知十『俳趣と画趣』自然社、1905年。

岡野知十『俳諧一家言』郊外社、1924年。

【コレクションとの関係】

1928年、龍をモチーフとした玩具を2点寄贈している。三越で購入したものか。

----- 執筆者：永井美穂

● 岡村吉右衛門 (1916-2002)

おかむら・きちえもん

【事績】

染色作家。鳥取県出身。柳宗悦の影響を受けて民芸運動に参加し、後に重要無形文化財保持者(人間国宝)となる芹沢銈介の工房で染色を学んだ。創作活動のかたわら、世界各地で調査を行い、染めや織りを探究した。染織技術に深い関心をよせ、台湾原住民族の製織

と織布の調査を手がけた。

【著作】

岡村吉右衛門『台湾の蕃布（全2巻）』有秀堂、1968年。

【コレクションとの関係】

1959年から1960年にかけて、東北地方や関東地方、中部地方、中国地方など各地で集めた資料数点をコレクションに加えた。

----- 執筆者：野林厚志

● 岡本三郎（1915-?）

おかもと・さぶろう

【事績】

経済評論家。徳島県出身。1939年に早稲田大学文学部哲学科を卒業したのち、1941年に外務省に入省した。第二次世界大戦後は、1946年に中央公論編集局で勤務し、1957年に日中貿易促進会常任理事となった。

【著作】

岡本三郎『日中貿易論』東洋経済新報社、1971年。

岡本三郎『国際経済と現代世界』東西貿易経済研究所、1978年。

【コレクションとの関係】

1936年12月に徳島県徳島市齊田町で集めた履物をコレクションに加えた。

----- 執筆者：飯田卓

● 岡本信三（1903-1958）

おかもと・しんぞう

【事績】

北海道函館市に生まれ、1925年に慶應義塾大学を卒業すると同時に第一銀行に入社した。大学時代に親しんだ登山を入社後にも続け、社内に山岳会を作り、1927年の夏に欧米を歴訪した。1931年には日本山岳会に入会した。1943年に家業のウロコ製作所社長となり、そ

の後、函館製網船具株式会社の社長となった。(佐藤 1961)

【コレクションとの関係】

1928年から1929年にかけて、中国 上海やセイロン島、エジプトなどで集めた人形や玩具など約30点をコレクションに加えた。1927年の欧米外遊の途上で買い集めたものか。

----- 執筆者：飯田卓

● 小川徹 (1914-2001)

おがわ・とおる

【事績】

人文地理学者、集落地理学者、民俗学者。岡山県に生まれ、横須賀に育つ。東京帝国大学理学部地理学科に在学した頃より、渋沢敬三が主宰したアチックミュージアムの活動に関わり、1934年の薩南十島調査では高橋文太郎の助手として民具調査を担当した。学生の身分での参加者には、他に宮本馨太郎がいた。小松勝美や袖山富吉、宮本馨太郎らとともに『アチックマンズリー』の編集を担当し、大学を卒業してからは、1937年に日本民族学会附属民族学研究所が開設したのに伴って研究員となった。アチックミュージアム同人から研究所に関わった者としては、他に高橋文太郎や磯貝勇、宮本馨太郎らがいる。しかし、病気のためにほどなく離脱した。1972年に「沖縄民俗社会の歴史地理的研究」で文学博士(広島大学)。法政大学文学部助教授や教授を歴任し、1973年に駒澤大学教授となったのち、1990年に退職した。(小川 1979; 『アチックマンズリー』)

【著作】

小川徹『ほくらの日本地理』東京堂、1949年。

小川徹『人物日本史物語 陰謀に生きた英雄たち』青春出版社、1961年。

大藤時彦・小川徹(編)『沖縄文化論叢 第2巻 民俗編Ⅰ』平凡社、1971年。

馬淵東一・小川徹(編)『沖縄文化論叢 第3巻 民俗編Ⅱ』平凡社、1971年。

小川徹『近世沖縄の民俗史』弘文堂、1987年。

【コレクションとの関係】

1934年に長野県佐久郡南牧村で集めた履物などや、1935年に静岡県で集めた履物、1938年に埼玉県秩父郡大滝で集めた竹べら型の農具などがコレクションに加えられている。

----- 執筆者：小島摩文

●屋宮為市（?-?）

おくみや・ためいち

【事績】

鹿児島県の教員か。1939年4月15日付で台湾の師範学校を卒業し、卒業証書を授与された記録があり、1939年5月31日付で教員免許状が授与されている。コレクションとの関係から、鹿児島県の小学校教員だった可能性が高く、1956年には住用村立市（いち）小中学校勤務だった可能性がある。

【コレクションとの関係】

1956年に鹿児島県大島郡住用村市で集めた擬餌針をコレクションに加えた。

----- 執筆者：小島摩文

●小田内通敏（1875-1954）

おだうち・みちとし

【事績】

人文地理学者。秋田県秋田市生まれ。小田内家の養子となり、東京高等師範学校地理歴史科を卒業後、早稲田中学校（のちの早稲田高等学校）に職を得た。1900年に地理歴史学会を設立し、『地理と歴史』を創刊。新渡戸稲造を中心とした郷土会の常連メンバーとなり、1918年の内郷村共同調査にも参加した。他にも国内外を精力的に調査し、今和次郎よりスケッチと図版の協力を得た『帝都と近郊』は、日本における社会経済地理学の先駆的業績として名高い。1924年、朝鮮総督府の依頼を受けて『朝鮮部落調査報告』をまとめ、「火田民」の実態を紹介。1926年、人文地理学会を設立し、機関誌『人文地理』を刊行。1930年、刀江書院主尾高豊作らと共に郷土教育連盟を設立し、機関誌『郷土』を刊行、郷土教育の普及発展に努めた。1940年、満洲国総務庁の嘱託として開拓農村を調査し、農村計画の策定に従事した。戦後も、国土復興に関わる調査や計画策定に関与した。交通事故で他界。（岡田 2011）

【著作】

小田内通敏『帝都と近郊』大倉研究所、1918年。

小田内通敏『集落と地理』古今書院、1927年。

小田内通敏『郷土教育運動』刀江書院、1932年。

【コレクションとの関係】

1931年から1932年にかけて、東京都や九州地方、四国地方などで集めた民具約10点をコレクションに加えた。

----- 執筆者：菊地暁

●小田原洋二郎（?-?）

おだわら・ようじろう

【事績】

郷土史家。秋田県平鹿郡（現 横手市）の習俗について報告をしているが、詳細は不明。渋沢敬三が主宰したアチックミュージアムで刊行した『民具問答集』では、秋田県平鹿郡十文字町で集めた雪沓（ジダシベ）について小田原が詳細を報告している。『民具問答集』は、民具1点1点の製作法や用法、現地での名称や由来、伝承などを使用地の人たちに尋ね、得られた情報をまとめたもの。（アチックミュージアム編 1937）

【著作】

小田原洋二郎「天象観測の俗信 — 秋田県平鹿郡十文字町附近」『郷土研究』7(4): 281-282、1933年。

【コレクションとの関係】

秋田県平鹿郡十文字町で集めた民具を2点、コレクションに加えた。採集期や収蔵期は不明。『民具問答集』の雪沓は、国立民族学博物館においてH0016097の標本資料番号が与えられているが、採集者は早川孝太郎となっている。

----- 執筆者：飯田卓

●越智兵一郎（1892-1970）

おち・ひょういちろう

【事績】

銀行員。岡山県出身。1917年、東京帝国大学法科経済学科を卒業し、横浜正金銀行に入行。大連やロンドン、シンガポールでの支店勤務を経たのち、1937年に奉天支店支配人を、1941年に新京支店支配人を務めた。1946年には横浜正金銀行取締役となり、のちに大昭興業株式会社取締役社長、三木産業株式会社相談役等を務めた。渋沢敬三が横浜正金銀行ロンド

ン支店に勤務したときの同僚で、帰国後も親交が続いた。（人事興信所編 1948; 渋沢 1955a; 藤井編 1964; 東京銀行 1984; 『朝日新聞』 1970年3月5日付）

【著作】

越智兵一郎「最終人事に当って」新井真二（編）『続 自由為替の生涯 —ものがたり正金史』 218-223ページ、外国為替貿易研究会、1965年。

【コレクションとの関係】

寄贈品はいずれも陶製もしくは木製の小型像。作業をしている人物や建物を象ったものである。寄贈年は不明であるが、奉天支配人時代に収集したものか。

----- 執筆者：永井美穂

● **小野武夫** （1883-1949）

おの・たけお

【事績】

農業経済学者。大分県出身。東京帝国大学農学部農場見習生を経て、農商務省に勤務しながら英語やフランス語を学び、法政大学専門部政治科を卒業した。新渡戸稲造らが創設した郷土会のメンバー。永小作の研究を起点として、農村や農民を対象とする研究や、農業史関係資料の収集・刊行を行った。1913年に帝国農会嘱託となり、1918年に海外興業株式会社社員、1924年に農商務省地方小作官講習会講師、1925年に東京商科大講師などを務めた。1930年に社会経済史学会の創立に参加し、同会理事を務め、1931年に法政大学教授、1933年に同大学経済学部長となった。自宅別棟に研究室を設け、戸谷敏之や伊豆川浅吉ら若い研究者を育てた。戦後は、疲弊した農村の再建と若い農民の育成を目的として、自宅に日本農村青年研究所を設立。蔵書は鹿児島大学附属図書館が「小野文庫」として所蔵、収集した農村・農民経済資料と原稿や写真等の関連資料は一橋大学経済研究所が「小野武夫文書」として所蔵している。（小野武夫博士還暦記念論文集刊行会編 1948; 一橋大学経済研究所附属社会科学統計情報研究センター編 2010; 秦編 2002）

【著作】

小野武夫『徳川時代の農家経済』巖松堂、1926年。

小野武夫『近世地方経済史料（全10巻）』近世地方経済史料刊行会、1931-1932年。

小野武夫（編）『宇和島藩吉田藩漁村経済史料（アチックミュージアム彙報 第26）』アチックミュージアム、1938年。

【コレクションとの関係】

1928年に、鹿児島県で集めた龍と桃太郎をコレクションに加えた。

----- 執筆者：永井美穂

●小野若木 (1915-?)

おの・わかぎ

【事績】

会社員。山梨県出身。後、小宮山に改姓。小学校修了後に上京するも、一度病を得て帰郷し、再び上京。岡書院に勤務した。1936年3月より渋沢敬三家書生として三田綱町邸に寄寓し、渋沢が主宰するアチックミュージアムに入所した。1938年、中央大学に入学した。後、小宮山姓に改姓。1950年の『綱町通信』には石川島重工業労務課勤務とある。(成田編 1950; 『アチックマンズリー』)

【著作】

わかぎ「山小屋所見」『アチックマンズリー』26: 1-3、1937年。

【コレクションとの関係】

1936年に山梨県北巨摩郡旭村の「稲扱用マンガ」「モズオリ」「草履」を寄贈した。故郷の実家関係者から入手したものか。『アチックマンズリー』第14号(1936年8月30日発行)には、帰省時における採集の苦勞が記されている。

----- 執筆者：永井美穂

●折口信夫 (1887-1953)

おりくち・しのぶ

【事績】

民俗学者、国文学者、歌人、詩人、小説家。独自の「まれびと」概念を手がかりに、日本の宗教や芸能、文学の「発生」を総体的に研究、後学に多大な影響を与えた。大阪府西成郡木津村(現 大阪市)生まれ。1910年、國學院大學国文科を卒業後、帰郷して中学校に勤務。雑誌『郷土研究』(1913-1917)に投稿し、柳田国男との知遇を得た。1914年、再び上京し、柳田に師事しつつ、独自の民俗学を模索。その足取りは全国に及ぶが、とくに沖縄や三信遠地方(三河、信濃、遠江)を集中的に訪れ、民俗芸能を調査した。1922年に國學

院大學教授、1928年に慶應義塾大学教授となり、後進の育成に努めた。1927年、「民俗芸術の会」の発起人となり、雑誌『民俗芸術』（1928-1932）を創刊するなど、芸能研究の組織化、普及にも貢献した。戦後は、文化財保護の専門委員として無形文化財や民俗資料の保護にも関与した。釈道空の筆名で、歌集『古代感愛集』（1947年）や小説『死者の書』（1939年）などを著し、創作面でも活躍した。（池田・加藤・岡野 1968; 西村編 1988）

【著作】

折口信夫『古代研究（全3巻）』岡書院、1929-1930年。

折口信夫『日本芸能史六講』三教書院、1944年。

折口信夫『折口信夫全集（全31巻＋別巻1）』中央公論社、1965-1968年。

折口信夫『折口信夫全集 ノート編』中央公論社、1970-1974年。

【コレクションとの関係】

1927年から1936年にかけて、四国地方・九州地方・沖縄地方などで集めた民具や信仰関係資料をコレクションに加えた。

----- 執筆者：菊地暁

● 柿堺欣一郎（?-?）

かきさかい・きんいちろう

【事績】

歌人。秩父神社の歌碑にその作「幾百年 この世に生きて せめぎ合い なさざるなしも 巨いなる木は」が刻まれている。『アチックマンスリー』13号（1936年7月号）における内浦史料編集部の記事に続く記事のなかに「帳面類の書写は小林、柿堺両君によって案外進行した」という記述があり、小林末夫とともに史料の筆写に携わっていたことがわかる。（『アチックマンスリー』）

【著作】

【コレクションとの関係】

1935年に秩父郡横瀬村宇根で集めた足半草履をコレクションに加えている。

----- 執筆者：加藤幸治

●片岡長治（?-?）

かたおか・ながはる

【事績】

近畿民俗学会の前身である大阪民俗談話会に出席していた人物。ただし、時期は不明。当時は奈良県北葛城郡高田町（現 大和高田市）に在住していた。また、石造美術研究家の川勝政太郎が設立した「史迹美術同攷会」でも活動し、同会の雑誌『史迹と美術』に多数の論考を寄せている。同誌には、1971年から1991年にかけて17回にわたって掲載された近畿地方の十三仏についての連載記事がある。（大阪民俗談話会 1934-1938; 宮坂 2012）

【著作】

片岡長治「近畿地方の十三仏」『日本の石仏』44: 2-10、1987年。

【コレクションとの関係】

1935年に奈良県生駒郡平群村で集めた足半草履をコレクションに加えた。

----- 執筆者：木村裕樹

●桂井和雄（1907-1989）

かつらい・かずお

【事績】

民俗学者、詩人。高知県生まれ。早稲田大学を中退したのち、帰郷して県内各地の小学校教員を歴任。昭和初期、文学的関心から伝承童謡を採訪したことを機に民俗学に関眼し、渋沢敬三や柳田国男の知遇を得て、県下の民俗学をリードした。1944年、キリスト教的自由主義の思想が言論出版集会臨時措置法に違反したとして教壇を追われ、海軍に徴用される。病弱のため佐世保海軍病院に入院。戦後は社会事業に従事し、高知県福祉事業財団会長などを歴任した。1959年、土佐民俗学会を設立、初代会長となる。柳田国男賞を受賞。

【著作】

桂井和雄『土佐風物記』高知市観光協会、1952年。

桂井和雄『俗信の民俗』岩崎美術社、1973年。

桂井和雄『桂井和雄土佐民俗選集』高知新聞社、1977-1983年。

【コレクションとの関係】

1938年から1941年にかけて、高知県土佐郡土佐山村で集めた喫煙具などをコレクションに加えた。

----- 執筆者：菊地暁

● 加藤玄智（1873-1965）

かとう・げんち

【事績】

宗教学者。東京都生まれ。1909年、東京帝国大学大学院の修了と同時に博士学位を取得し、陸軍士官学校で教鞭をとる。1921年、東京帝国大学文学部に新設された神道講座の教授となった。1933年に東京帝国大学を退官したのちも、國學院大學や大正大学で教授をつとめた。宗教と国家の関係に関する考察は、戦前の国体論にも影響を与えた。（島 1995; 前川 2011）

【著作】

加藤玄智『宗教の学術的研究』日本学術普及会、1914年。

加藤玄智『本邦生祠の研究』中文館、1934年。

加藤玄智『神道の宗教学的な新研究（改訂増補版）』国文館、1935年。

加藤玄智『知性と宗教—聖雄信仰の成立』錦正社、1956年。

【コレクションとの関係】

年代や日付は不明だが、各地の神社の護守56点をコレクションに加えた。

----- 執筆者：加藤幸治

● 金子總平（1910-1945?）

かねこ・そうへい

【事績】

民俗学者。東京市牛込（現 東京都新宿区）生まれ。1933年に國學院大學史学科を卒業後、渋谷敬三が主宰していたアチックミュージアムで豆州内浦漁民史料の整理作業に携わった。この作業が本格的に始まったのは1933年8月で、金子は祝宮静の助手として活動した。終戦直前、同じアチックミュージアムの同人だった鹿野忠雄とともに北ボルネオに赴き、同

地で行方不明となった。(桜田・新井 1973)

【著作】

金子總平『南会津北魚沼地方に於ける熊狩雑記（アチックミュージアムノート 第13）』アチックミュージアム、1937年。

【コレクションとの関係】

1935年から1937年にかけて本州各地で集めた履物を、1937年から1938年にかけて同じく本州各地で集めた多様な民具を、それぞれコレクションに加えた。その数は60点を超える。

----- 執筆者：木村裕樹

●金久好 (1911-2010)

かねひさ・よしみ

【事績】

会社員、会社役員。鹿児島県大島郡鎮西村諸鈍（加計呂麻島、現 瀬戸内町）出身。1931年、第七高等学校造士館を卒業後、東京帝国大学経済学部に入學したが、在學中に病気のため帰郷し、地元の史料を採訪するとともに、古老からの聞き書きを重ねた。その成果は、論文「奄美大島に於ける「家人」の研究」として結実し、東京帝国大学経済学部経友会の雑誌『経友』22号に掲載された。その後、復學し、三菱信託銀行勤務を経て日興証券（現日興コーディアル証券）常務取締役などを歴任した。

休學中に家人（ヤンチュ）の調査を行った動機として、大学で教官の土屋喬雄から示唆されたことを金久は書簡で述べている。土屋は柳田国男とも親交があり、民俗学に関心を寄せており、渋沢敬三とも旧制高校、東京帝国大学経済学部で同級の友人で終生公私ともに関係が深かった。

兄 正は柳田国男とも交流があり、民俗学に親しんで『南島』や『旅と伝説』に論稿を発表した。正には、『奄美に生きる日本古代文化』（刀江書院、1963年）という著書もある。（東 2008; 金久 2014）

【著作】

金久好『奄美大島に於ける「家人」の研究（他、大島郡状態書、封建治下に於ける奄美大島の農業、二編）』南方新社、2014年。

【コレクションとの関係】

1936年に「ヤンチューフダ」をコレクションに加えた。ヤンチューフダとは、上記論文の主題である「ヤンチュ（債務労働者）」に交付されていた鑑札で、その採集地は金久の調査地でもあり、出身地でもある「鹿児島県 大島郡 鎮西村 字 諸鈍」となっている。なお、金久は、渋沢敬三が主宰していたアチックミュージアムを1935年9月22日に訪問しており、土屋喬雄の導きによるものと推察される。

----- 執筆者：小島摩文

● 金森

かねもり

【事績】

金森五郎のことか。1960年代当時の資料管理原簿を見ると、1933年2月15日採集の火薬入れ2点は「金森五郎氏より購入」とある。また、1930年代前半に山形県の民具が複数「金森」から購入されている。

【コレクションとの関係】

1930年から1933年にかけて民具数点をコレクションに加えている。年代がわからないものもある。1933年にコレクションに加わった2点は山形県東置賜郡で集められたもの。

----- 執筆者：飯田卓

● 鹿野忠雄（1906-1944?）

かの・ただお

【事績】

生物地理学者、民族学者、考古学者。台湾総督府高等学校に入学するために台湾に渡り、高等学校卒業後は東京帝国大学に入学、理学部地理学科を卒業後、同大学院に進学した。大学院在籍のまま、台湾総督府の嘱託として台湾の動物相や高砂族（現在の原住民族）の調査を行い、大学院修了後も調査を継続した。1944年に金子總平とともに軍部の命令で北ボルネオの調査にはいり、そのまま行方不明となった。

鹿野の研究は多分野にわたる。生物地理学の分野では、火焼島（現 緑島）や紅頭嶼（現 蘭嶼）の動物調査から新ウォーレス線を修正し、次高山（現 雪山）の動物調査から台湾本島の動物相形成のモデル構築を行った。民族学の分野では、蘭嶼に住むヤミ族に関して優

れた写真民族誌を瀬川孝吉と著している。考古学の分野では、台湾の基層文化を東・東南アジアという広範な地域の中で位置づけ、生態学、民族学、考古学に精通し、台湾文化史の先駆的な業績を残した。

【著作】

鹿野忠雄『東南亜細亜先史学民族学研究（全2巻）』矢島書房、1946-1952年。

Tadao Kano and Kokichi Segawa 1956 *An Illustrated Ethnography of Formosan Aborigines*
vol.1: *Yami*, Tokyo: Maruzen Co.Ltd.

【コレクションとの関係】

台湾のタイヤル族、パイワン族に関する資料400点近くをコレクションに加えた。これらの資料の「採集期」は、資料管理原簿で1937年となっている。洪沢敬三の助成を受けて小川徹や宮本馨太郎とともに南部のパイワン族の取材調査を行なった前後のものとして推定される。なお、宮本はこのとき民族誌映画『パイワン』を製作した。また、コレクションには採集者無記名のヤミ族の資料がある。これらの現地名の表記は鹿野が採用していた独特のものであり、鹿野による収集された資料である可能性がうかがえる。

----- 執筆者：野林厚志

●唐木栄一郎（?-?）

からき・えいいちろう

【事績】

財団法人日本民族学協会附属民族学博物館（保谷民博）の職員。主任職員だった宮本馨太郎のもとで、庶務会計を担当した。経歴の詳細は不明。1949年11月に刊行された『民族学博物館概要』の職員紹介欄にすでに名前があることから、戦後の早い時期から職員となっていたことがわかる。退職した時期は不明。（民族学博物館編 1949）

【コレクションとの関係】

1940年代から1950年代にかけて、保谷など主として東京都内で集めた生活用具や信仰用具約30点をコレクションに加えた。

----- 執筆者：木村裕樹

●河合雅雄（1924- ）

かわい・まさお

【事績】

霊長類学者。京都大学卒業後、1962年に京都大学霊長類研究所助教授になったのち、教授、所長を務める。1985年放送大学教授、1987年財団法人日本モンキーセンター所長、1995年兵庫県立人と自然の博物館館長。霊長類の行動と社会の解明に貢献し、ニホンザルやゴリラ、グラダヒビなどの野外研究をとおして動物学界に貢献するとともに、自然界におけるヒトの位置づけに関しても深い省察をおこなった。弟に、心理学者で元文化庁長官の河合隼雄がいる。

【著作】

河合雅雄『ゴリラ探検記—赤道直下アフリカ密林の恐怖』光文社、1961年。

河合雅雄『ニホンザルの生態』河出書房新社、1969年。

河合雅雄『森林がサルを生んだ—原罪の自然誌』平凡社、1979年。

河合雅雄『河合雅雄著作集（全13巻）』小学館、1996年。

【コレクションとの関係】

1959年に、水原洋城と連名でウガンダの鎌をコレクションに加えた。両名は、この年の4月から半年間にわたって、財団法人日本モンキーセンターの第二次ゴリラ探検に参加した。寄贈の仲介をした渋沢敬三は、このとき日本モンキーセンターの会長を務めていた。両名が踏破したのは、現在の国名でいうとケニア、ウガンダ、ルアンダ、コンゴ民主共和国（旧ザイール）、ブルンディ。

----- 執筆者：飯田卓

●河岡武春（1927-1986）

かわおか・たけはる

【事績】

民俗学者、漁業史学者、民具研究者。山口県出身。渋沢敬三が主宰したアチックミュージアムの後身 財団法人日本常民文化研究所所員として、絵巻物の会など、戦後の日本常民文化研究所の諸活動に参加した。日本常民文化研究所が神奈川大学に移転するのに伴い、1982年に神奈川大学経済学部教授となった。『民具マンスリー』の創刊や日本民具学会の設立等に携わるなど、民具研究の振興という点でも功績を残した。（天野 1998; 湯浅 1998）

【著作】

河岡武春『瀬戸内海漁業民俗ノート(1) (日本常民文化研究所ノート 第30)』岡書院、1956年。

河岡武春『海の民—漁村の歴史と民俗』平凡社、1987年。

【コレクションとの関係】

1952年に福岡県で集めた烏口（穀物を入れる袋）をコレクションに加えた。また、長崎県で集めた婚礼用の綿帽子もコレクションに加えられている。

----- 執筆者：小林光一郎

●川上隆三郎（?-?）

かわかみ・りゅうざぶろう

【事績】

財団法人癌研究会の職員。1942年に同会会計主任から事務局長に昇格。1954年に退任。渋沢敬三は、癌研究会の理事を務め、その運営を支えた。（癌研究会七十五年史編纂委員会編1989）

【コレクションとの関係】

1936年に、埼玉県秩父郡野上村の草履を2点、コレクションに加えた。

----- 執筆者：永井美穂

●河田杰（1899-1955）

かわだ・まさる

【事績】

林業技術者、森林生態学者。東京都新宿区信濃町に生まれる。第一高等学校を経て、1914年に東京帝国大学農科大学林学科を卒業。農商務省（現 農林水産省）に入り、1946年の退職時まで山林局や林業試験場、営林局で主として技師として勤務した。その間、青森営林局長も務めた。1919年、砂防造林試験地に指定された村松海岸（茨城県東海村）で造林に着手、22万本の黒松を植栽した。また、1924年から2年間、造林学研究のために欧州へ留学し、とくに英国で森林生態学を学び日本に導入した。1939年に論文「森林に対する生態学研究」で京都帝国大学より農学博士の学位を受け、1942年に『海岸砂丘造林法』で日本

農学会より「日本農学賞」を授与された。退職後の1949年に東京教育大学講師となり、1953年に渋沢敬三の依頼を受けて十和田科学博物館の初代館長を務めた。（高橋 1942; 河田 1991; 上田・西沢・平山・三浦監修 2015）

【著作】

河田杰『森林生態学講義』養賢堂、1932年。

河田杰『海岸砂丘造林法』養賢堂、1940年。

【コレクションとの関係】

宮城県や福島県で集めた履物6点をコレクションに加えた。

----- 執筆者：木村裕樹

● 河部利夫（1914-?）

かわべ・としお

【事績】

歴史学者、東南アジア研究者。東北帝国大学文学部卒業後、同学部助手となったのちタイに留学し、1944年に文部省民族研究所所員となる。1945年には、民族研究所がおこなった満蒙・北支調査にも参加した。1949年より東京外国語大学教授。1957年には日本民族学協会の第1次東南アジア稲作民族文化総合調査（大陸東南アジア）に参加し、1964年の東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所設立にも関わった。出身は歴史学だが、タイ語の教科書も著すなど、大陸部東南アジアについて幅広い研究活動に関わった。東京外国語大学名誉教授。（人事興信所編 1977; 河部 2002; 中生 2016）

【著作】

河部俊夫『東南アジアの視点』評論社、1969年。

河部俊夫『世界の歴史18 東南アジア』河出書房、1969年。

河部俊夫『タイ国理解のキーワード』勁草書房、1989年。

【コレクションとの関係】

日本民族学協会の東南アジア稲作民族文化総合調査のさい、タイやラオス、カンボジアで集めた資料をコレクションに加えた。

----- 執筆者：飯田卓

●河村広平 (???)

かわむら・こうへい

【事績】

詳細は不明だが、アチックミュージアムが刊行した『民具問答集』において、東京府西多摩郡の灯明（シデおよびシデバチ）について解説をしている。『民具問答集』は、民具1点1点の製作法や用法、現地での名称や由来、伝承などを使用地の人たちに尋ね、得られた情報をまとめたもの。（アチックミュージアム編 1937）

【コレクションとの関係】

1932年に東京都西多摩郡小河内村で集めた灯明をコレクションに加えた。当時の資料管理原簿を見ると、『民具問答集』の記事に付されていたものと同じ番号が記されており、同一のものであることがわかる。

----- 執筆者：飯田卓

●姜廷澤 (1907-?)

カン・チョンテク

【事績】

蔚山達里で出生、第一高等学校に留学し、東京帝国大学で農業経済学を学ぶ。東京帝国大学農学部で副手、助手、東亜農業研究所専任研究員嘱託となる。戦後に京城大学の農業経済学担当助教授に就任するが、一学期だけで大学の構造調整デモのため辞任し、その後農林部次官を歴任した。しかし、朝鮮戦争が勃発した直後、ソウルに侵入した北朝鮮人民軍によって平壤まで連行され、その後は生死不明となった。（朝鮮農村社会衛生調査会編 1940; 李 1996; 2008; 小川 1957; 蔚山博物館 2011）

【著作】

姜廷澤『金融組織について』東京大学農学部大学院学位論文、1933年。

姜廷澤「朝鮮農業に於ける生産システムの分化」『農業経済研究』15(3): 74-89、1939年。

姜廷澤「朝鮮に於ける食糧問題の発展過程—内地への米補給と関連して」『農業経済研究』16(2): 20-48、1940年。

姜廷澤「朝鮮農村の人口排出機構—慶尚南道蔚山邑達里に於ける人口排出に関する調査」『日満農政研究報告』9: 1-39、1940年。

姜廷澤『姜廷澤先生誕生100周年記念論文集 植民地朝鮮の農村社会と農業経済』YBM Sisa、

2008年（韓国語）。

【コレクションとの関係】

渋沢敬三に抜擢され、渋沢敬三が日本生活における後見人となった関係で、1937年前後に蔚山コレクションと呼ばれる資料郡の一部を博物館に収めた。蔚山コレクションは、1936年に行われた慶尚南道蔚山邑達里の社会衛生的調査のさいに集められたものである。この調査には、アチックミュージアムから宮本馨太郎、小川徹、村上清文が参加し、渋沢自身も現地を訪れた。その経緯については、朝鮮農村社会衛生調査会編『朝鮮の農村衛生』の「跋」に渋沢自身が書いているほか、調査については小川徹が調査報告を残している。また、蔚山出身の李文雄ソウル大学教授によるこのコレクションの研究が契機となり、日本の国立民族学博物館は、韓国国立民俗博物館と共同で2011年に蔚山博物館において特別展「75年ぶりの帰郷—1936年蔚山達里」を開催した。

----- 執筆者：朝倉敏夫

● 木内良胤（1897-1971）

きうち・よしたね

【事績】

外交官。東京帝国大学を卒業し、1921年に外務省に入省。イタリア、フランス、チェコスロバキア、中国等の在外日本大使館を経て、1940年に儀典課長となった。第二次世界大戦終戦時のイタリア大使館勤務で退官。戦後は日本文化放送の設立に尽力し、同社常務理事となった。中央更生保護審査会委員、戦犯釈放促進のための調査会委員、ローマ日本文化会館館長、パリ大学都市日本館館長等を歴任した。渋沢敬三が東京高等師範附属中学校を落第した後の3年生から同級で親友の一人。官僚・政治家の木内重四郎の長男。妹の登喜子は渋沢の妻で、木内は渋沢にとって義兄にあたる。（『毎日新聞』1957年12月12日付；『読売新聞 夕刊』1967年12月13日付；『毎日新聞』1971年7月10日付；『朝日新聞』1971年7月14日付；秦編 2001）

【コレクションとの関係】

1937年に、ドイツのハンブルクの「薙鋏」「さらえ」等をコレクションに加えた。

----- 執筆者：永井美穂

●菊地伝治郎 (1898-?)

きくち・でんじろう

【事績】

静岡県田方郡内浦村(現 沼津市)三津(みと)の漁師。1926年頃から同地に通いはじめた
渋沢敬三と仲良くなった。とりわけ、1932年1月15日から5月9日まで渋沢が転地療養の
ため長逗留したさいには、「伝ちゃん」「大将」と呼び合って、ともに釣りを楽しむまでに
なった。渋沢がのちに受賞する日本農学会賞の授賞理由は、1932年の逗留中に発見した
『豆州内浦漁民史料』の刊行と研究である。(渋沢 1937; 神野 2002)

【コレクションとの関係】

1934年4月に静岡県田方郡内浦村で集めた籠や行燈、畚(もっこ、蜜柑用)、蓑など数点
をコレクションに加えた。

----- 執筆者：木村裕樹

●喜多村俊夫 (1911-1993)

きたむら・としお

【事績】

人文地理学者。滋賀県滋賀郡堅田町(現 大津市)生まれ。東京文理科大学地学科地理学専
攻に学び、1933年に卒業。滋賀県立小学校訓導、滋賀県師範学校教員をつとめ、1939年に
京都帝国大学人文科学研究所に入り1949年に同助教授となった。灌漑水利慣行史や、日本
農村構造の歴史地理学的研究に関して、多くの業績を残した。のち名古屋大学教授。日本
地理学会名誉会員、名古屋大学名誉教授。(井関 1994)

【著作】

喜多村俊夫『江州堅田漁業史料(アチックミュージアム彙報 第46)』アチックミュージア
ム、1941年。

喜多村俊夫『近江経済史論攷』大雅堂、1946年。

喜多村俊夫『日本灌漑水利慣行の史的研究 総論篇』岩波書店、1950年。

喜多村俊夫『新田村落の史的展開と土地問題』岩波書店、1981年。

喜多村俊夫『日本農村の基礎構造研究—その展開過程』地人書房、1996年。

【コレクションとの関係】

1938年に、滋賀郡堅田町小番城で使われていた漁具や仕事着など数点をコレクションに加えた。

----- 執筆者：加藤幸治

● 金田一京助（1882-1971）

きんだいち・きょうすけ

【事績】

言語学者、国語学者。岩手県盛岡市出身。1904年に東京帝国大学文科大学入学、1906年にアイヌ語調査を目的に北海道に渡った。1907年に卒業、同年に樺太でアイヌ語調査。1908年に三省堂校正係となり、國學院大學講師、同大教授、東京大学助教授を経て、1943年に同大教授を退官した。

1918年にはアイヌ語伝承者の金成マツ宅を訪問し、姪の知里幸恵や甥の知里真志保らと知り合った。1932年に『アイヌ叙事詩ユーカラの研究』で日本学士院恩賜賞受賞。1943年に三省堂『明解国語辞典』を刊行した。1954年に受章した文化勲章をはじめ、多数の叙勲や受賞歴がある。（金田一 1968; 守屋編 2012）

【著作】

金田一京助『アイヌ叙事詩—ユーカラの研究』東洋文庫、1931年 [1967年再版]。

金田一京助・杉山寿栄男『アイヌ芸術』第一青年社、1941-43年 [北海道出版企画センター、1993年]。

【コレクションとの関係】

樺太収集とされる張り子の人形1点は、時代や地域等の詳細情報は不明。1950年3月25日収蔵の漆器5点は、日本民族学協会附属民族学博物館の敷地にチセ（伝統家屋）を建設した時に使用されたもの。当時の資料管理原簿をみると、二谷国松と二谷一太郎が寄附・製作したアイヌの民具が前後にある。5点だけが金田一の採集・寄附となっている理由は不明。

----- 執筆者：齋藤玲子

●草間このえ (1914-?)

くさま・このえ

【事績】

新潟県高田市（現 上越市）に本拠をおく高田瞽女（ごぜ）。瞽女とは、遊行しながら歌や楽曲を聞かせる盲目の女性旅芸人のこと。当時、高田瞽女を統率していた草間ソノの弟子として、高田市北本町にあったソノの瞽女屋敷に居住していた。洪沢敬三とともに民俗学研究をおこなっていた市川信次の指導のもと、同じく瞽女の草間千代とともに、巡業する先々で足半を100点以上収集した。（藤井 2010）

【コレクションとの関係】

1937年に新潟県東頸城郡・中頸城郡・西頸城郡および長野県下高井郡・小県郡・南佐久郡で集めた足半をコレクションに加えた。その数は110点以上にのぼる。すべて草間千代とともに集めたことが記されている。

----- 執筆者：木村裕樹

●草間千代 (1902-?)

くさま・ちよ

【事績】

新潟県高田市（現 上越市）に本拠をおく高田瞽女（ごぜ）。瞽女とは、遊行しながら歌や楽曲を聞かせる盲目の女性旅芸人のこと。当時、高田瞽女を統率していた草間ソノの弟子として、高田市北本町にあったソノの瞽女屋敷に居住していた。洪沢敬三とともに民俗学研究をおこなっていた市川信次の指導のもと、同じく瞽女の草間このえとともに、巡業する先々で足半を100点以上収集した。（藤井 2010）

【コレクションとの関係】

1937年に新潟県東頸城郡・中頸城郡・西頸城郡および長野県下高井郡・小県郡・南佐久郡で集めた足半をコレクションに加えた。その数は110点以上にのぼる。すべて草間このえとともに集めたことが記されている。

----- 執筆者：木村裕樹

● 功刀亀内 （1889-1957）

くぬぎ・きない

【事績】

実業家、郷土史研究家。山梨県中巨摩郡豊村（現 南アルプス市）出身。大正時代に『山梨県志』編纂所に入入りしていたところ、古文書等の史料散逸を防ぐ意識を抱くようになり、甲斐国に関する史料収集に没頭、自らの郷土史料コレクションを「甲州文庫」と命名した。このコレクションは現在、山梨県立図書館に所蔵されている。1922年に上京して布団業を営むようになり、1933年には東京市下谷区上野桜木町（現 東京都台東区）へ転居したが、相変わらず家業を顧みず史料収集を続けた。渋沢敬三が構想した実業史博物館設立のための資料収集にも関与し、東京湾海苔養殖資料等を収集した。（山梨県立図書館編 1964; 1971）

【著作】

功刀亀内『甲州俳人伝』私家版、1932年。

【コレクションとの関係】

東北地方、信越地方、関東地方で集めた資料200点あまりをコレクションに加えている。「功刀亀明」と誤記されたものを含めると、270点あまりになる。漁具や背負い運搬具、履物などが目立つことから、アチックミュージアムの研究活動を熟知したうえで、同人たちの研究に役立つ資料を集めていた可能性が高い。ただし、資料の寄贈は1938年から1940年にかけての頃に多く、アチックミュージアムのコレクションが保谷民博に移されてからである。アチックミュージアムの同人の一部は保谷に移って研究を続けていたことから、アチックミュージアムの研究機能の一部が三田綱町から保谷村に移って展開していたことがうかがえる。

----- 執筆者：加藤幸治

● 久保昌二 （1911-1994）

くぼ・まさじ

【事績】

資料収集に関わった人物かどうかはわからないが、日本の物理化学者にも久保昌二という人物がいる。東京帝国大学を卒業したのち、京城帝国大学および第一高等学校の教授を経て、1948年に名古屋大学教授となった。（上田・西沢・平山・三浦監修 2015）

【著作】

久保昌二「或る科学者の反省」『アララギ』41(5): 5-11、1948年。

久保昌二『量子化学概説』朝倉書店、1950年。

【コレクションとの関係】

1942年頃に満洲で集めた団扇をコレクションに加えた。

----- 執筆者：飯田卓

● 窪田五郎 (？-？)

くぼた・ごろう

【事績】

愛知県北設楽郡田口村（現 設楽町）の教育家、郷土史家。同郡下津具村長の村長を務めた夏目一平の義兄とする記述もある。両者は、1922年に津具郷土資料保存会を設立し、のちに「民具」と呼ばれるようになるさまざまな生活資料の収集や保存をおこなう体制を整えた。また窪田は、同じ頃、夏目とともに北三河各地で発掘調査をおこなっており、1925年には『考古学雑誌』に夏目と共著論文を発表している。

哲学者の井上円了が北三河を訪れた1914年当時、この地域（段嶺村か）の小学校で窪田五郎が校長を務めていたことがうかがえる。おそらくその後の時期に本郷小学校の校長も務めた。窪田はまた、折口信夫や早川孝太郎といった民俗学者が花祭りの調査をおこなうさい、しばしば案内役を務めた。（北設楽郡木地屋研究会編 1957; 洪沢 1993a; 井上 1915; 村松 2015）

【著作】

夏目一平・窪田五郎「三河国北設楽郡本郷町字桜平石器時代遺跡に就いて」『考古学雑誌』15(8): 22-26、1925年。

【コレクションとの関係】

1935年1月3日に愛知県北設楽郡豊根村阪宇場で集めた民具数点をコレクションに加えた。この時期はちょうど花祭りがおこなわれている時期であり、窪田が東京を訪れて資料を寄贈したとは考えにくい。この日に洪沢敬三は三河を旅行中なので、むしろ、洪沢や周辺の人たちが窪田のもとを訪れて資料を譲り受けたと考えるべきか。

----- 執筆者：飯田卓

●久保寺逸彦（1902-1971）

くぼでら・いつひこ

【事績】

言語学者、アイヌ文化研究者。北海道出身。國學院大學在学中に金田一京助の指導でアイヌ語研究を始める。卒業後は、東京府立第七中学校と東京第二師範学校（現 東京学芸大学）の教員を歴任、アイヌ語およびアイヌ文化の調査研究を進める。1960年、『アイヌ叙事詩—神謡・聖伝の研究』により博士号を取得。アイヌ口承文芸や宗教儀礼の膨大な調査記録を残すとともに、その翻訳などの基礎的作業によって、後の研究に貢献した。遺稿ノートの一部やアイヌ語辞典稿は、没後に『久保寺逸彦ノート』『久保寺逸彦 アイヌ語日本語辞典稿』として北海道教育委員会から翻刻刊行された。（佐々木 2001; 2004）

【著作】

久保寺逸彦『アイヌ叙事詩—神謡・聖伝の研究』岩波書店、1977年

【コレクションとの関係】

1931年に日高地方で収集したイナウ（木幣）と、1935年に東京で製作したイナウ4点と同年月収蔵のイナウ1点をコレクションに加えた。

----- 執筆者：齋藤玲子

●熊谷辰治郎（1892-1982）

くまがい・たつじろう

【事績】

昭和期の青年運動指導者。岩手県師範学校を卒業後、1914年に上有住小学校訓導となったのち、広田小学校主席訓導や浦浜小学校長を務めた。1922年に東京社会教育研究所に入所すると同時に、滝野川第一小学校訓導となり、同じ年に財団法人日本青年館嘱託となった。日本青年館は、この前年に設立認可を得ている。以後、熊谷は日本青年館や、関連団体である大日本連合青年団（のちに大日本青年団および大日本青少年団）で活動を展開した。1928年には小田内通敏や小出満二、渡辺庸一郎らとともに村落社会学会を結成。大政翼賛会などにも関わったため、1948年から1952年までは公職追放となった。追放を解除されてからは日本ユネスコ国内委員会事務局顧問、文部省社会教育審議会委員、財団法人世界友の会理事、日本青年団体国際委員会理事、財団法人日本青年館中央評議員などを歴任した。（日本青年館編 1981）

【著作】

熊谷辰治郎「回顧二十年」熊谷辰二郎（編）『大日本青年団史』1-65ページ、日本青年館、1943年。

熊谷辰治郎全集刊行委員会（編）『熊谷辰治郎全集』勁草書房、1984年。

【コレクションとの関係】

1931年6月に台湾で集めた釣道具入れをコレクションに加えた。

----- 執筆者：飯田卓

● 栗山一夫（1909-2000）

くりやま・かずお

【事績】

民俗学者、考古学者、社会運動家。赤松啓介の筆名で知られる。性や被差別をめぐる民俗の研究で先駆的な業績を残した。兵庫県加西郡下里村（現 加西市）生まれ。生家の経済的破綻により夜逃げし、丁稚、工員、郵便局員など諸職を転々としつつ、歴史学や考古学などの独学を続けた。組合運動に関係したことにより逮捕され、帰郷。行商をしながら、民俗学的調査やプロレタリア文化運動に従事した。玉岡松一郎らとハリマ・フォークロア・ソサイエティを設立。この団体は、のちに兵庫県郷土研究会となる。唯物論研究会の弾圧に連座して投獄され、戦争末期に満期釈放された。戦後は民主主義科学者協会神戸支部の事務局員、神戸市史編集委員、五色塚古墳復元工事現場監督、神戸市埋蔵文化財調査嘱託などを務めた。1990年代以降、長らく絶版だった著書が再刊され、再評価された。（大月1990）

【著作】

赤松啓介『民俗学』三笠書房、1938年。

赤松啓介・上野千鶴子・大月隆寛『猥談—近代日本の下半身』現代書館、1995年。

赤松啓介『赤松啓介民俗学選集（全6巻＋別巻1）』明石書店、1997-2004年。

【コレクションとの関係】

1936年に兵庫県加西郡下里村で集めた虫送り用の藁馬をコレクションに加えた。

----- 執筆者：菊地暁

● 胡桃沢勘内（1885-1940）

くるみざわ・かんない

【事績】

歌人、民俗学者。長野県東筑摩郡島内村下平瀬（現 松本市）生まれ。尋常高等小学校卒業後、信濃日報勤務を経て松本銀行勤務、1937年に常務取締役となった。職務のかたわら、俳句や和歌に勤しみ、初期『アララギ』の同人となる。雑誌『郷土研究』に熱心に投稿し、柳田国男や折口信夫との知遇を得た。県下を精力的に採訪するとともに、民俗資料の収集保存にも尽力。コレクションの一部は、松本市立博物館にも寄贈された。（池上 1959; 松本市立博物館・日本民俗資料館編 2003; 胡桃沢 2016）

【著作】

胡桃沢勘内『松本と安曇』鶴林堂書店、1915年。

胡桃沢勘内『胡桃沢勘内集』胡桃沢勘内集刊行会、1948年。

胡桃沢勘内『福間三九郎の話』筑摩書房、1956年。

【コレクションとの関係】

1931年に松本市で集めた油デンコ（油入れ容器）などをコレクションに加えている。

----- 執筆者：菊地暁

● 桑田芳蔵（1882-1967）

くわた・よしぞう

【事績】

民族心理学者、社会心理学者。1905年、東京帝国大学文科大学哲学科心理学専修を第一回生として卒業したのちドイツに留学し、ライプツィヒ大学のW・ヴントのもとで学ぶ。1913年に東京帝国大学文科大学講師、17年に助教授、26年に教授となった。また、1941年に創設された東京帝国大学東洋文化研究所の初代所長となった。戦後は大阪大学法文学部長、日本心理学会会長も務めた。法学者で中央大学教授の桑田熊蔵は兄、東洋史学者で台北帝国大学・大阪大学教授の桑田六郎は弟。（佐藤・溝口 1997; 大泉編 2003）

【著作】

桑田芳蔵『ヴントの民族心理学』文明書院、1918年。

桑田芳蔵『心理学』文信社、1927年。

【コレクションとの関係】

1957年2月17日に中国で集めた玩具や信仰関係の資料など約100点をコレクションに加えた。採集地は「中華民国」とあるが、台湾ではなく、共産党政権が成立する前に大陸中国で集めたものか。資料管理原簿の備考欄には「東京大学考古学研究室と交換」などとある。

----- 執筆者：坂野徹

● 桑野孚美 (1937-2011)

くわの・ふみ

【事績】

文化人類学者。のちに中村たかを（俊亀智）と結婚し、中村と改姓した。東京都立大学大学院社会科学研究所社会人類学専攻博士課程を単位取得満期退学したのち、1982年に慶應義塾大学文学部史学科助教授、1986年に同教授となった。1992年に退職。研究領域は法人類学、モンゴル研究、都市人類学、祭り研究におよぶ。秋田県仙北市でおこなった調査によって同市の角館祭り（国指定重要無形民俗文化財「角館祭りのやま行事」）が広く知られることになったため、中村夫妻の蔵書は同市立図書館に寄贈された。（坪郷 2014）

【著作】

中村孚美（編）『現代のエスプリ別冊 現代の人類学 2 都市人類学』至文堂、1984年。

エドワード・アダムソン・ホーベル（著）千葉正士・中村孚美（訳）『法人類学の基礎理論 — 未開人の法』成文堂、1984年。

中村孚美『都市の祭り — 中村孚美遺稿論文集』中村孚美遺稿論文集出版委員会、2013年。

【コレクションとの関係】

1959年から1960年にかけて集めた民具をコレクションに加えた。内容は、履物や曲物の容器など。採集地は長野県上伊那郡高遠町と秋田県仙北郡角館町、岩手県和賀郡湯本村。

----- 執筆者：木村裕樹

● 小畔震三 (?-?)

こあぜ・しんぞう

【事績】

第一銀行麻布支店支店長（1957年1月時点）。同年に堤康次郎へ宛てて年賀状を出している。

【著作】

【コレクションとの関係】

1931年1月26日に三井寺（滋賀県大津市）で集めた鶏絵馬をコレクションに加えた。

----- 執筆者：井上潤

● 小井川潤次郎（1888-1974）

こいかわ・じゅんじろう

【事績】

民俗研究者。八戸市生まれ。小学校に勤務する傍ら、郷土史研究に取り組みつつ、柳田国男の民俗学に共鳴して、1915年に八戸郷土研究会を創設した。謄写版刷りの『いたどり』で研究成果を発表。八戸の種差海岸や根城跡、是川遺跡などの文化財が国の文化財指定を受けるうえでも尽力した。青森県文化財保護審議会専門委員、八戸市史編纂委員、根城史跡保存会長などを歴任し、東北旅行中の渋沢敬三を何度か案内した。渋沢敬三の「東北の塩」（『犬歩当棒録』所集）という記事に、小井川の案内で三陸地方の沿岸各地を訪問したという記事がある。日本民俗学会名誉会員。（渋沢 1961）

【著作】

小井川潤次郎『大館村誌』大館村誌編集委員会、1959年。

小井川潤次郎『八戸の四季』北方春秋社、1961年。

小井川潤次郎『南部のうた―複製三戸郡誌「歌謡篇」』八戸印刷荷札出版部、1973年。

小井川潤次郎『小井川潤次郎著作集』伊吉書院、1977年。

【コレクションとの関係】

1933年から1934年にかけて、青森県の各種民具をコレクションに加えた。

----- 執筆者：加藤幸治

● 耕三寺弘三（1928-2014）

こうさんじ・こうぞう

【事績】

広島県にある浄土真宗本願寺派の寺院 耕三寺の二代目住職、および耕三寺博物館の初代館

長。最初、金本姓を名乗った。耕三寺は大阪の実業家 金本福松（改名後の名は耕三寺耕三）の建立によるもので、1935年より造営が始まり、数年をかけて伽藍が完成した。弘三は福松の甥（弟の子）にあたる。関西大学商学部を卒業した後、1952年に耕三寺博物館が国の博物館登録を受けるのと同時に館長に就任。日本博物館協会理事、全国美術館会議理事、近畿大学校友会相談役などを務めた。

【コレクションとの関係】

1957年に、耕三寺博物館が所在する広島県瀬戸田町で得られた背負いかごをコレクションに加えた。採集時期が不明な製塩用具一式の採集地も「広島県」となっており、瀬戸田町である可能性が高い。そうだとすれば、製塩用具は、初代 耕三寺耕三が戦前に経営していた塩田で使われていた可能性が高い。

----- 執筆者：飯田卓

● 甲野勇 (1901-1967)

こうの・いさむ

【事績】

先史考古学者。東京帝国大学理学部人類学選科を修了したのち1925年に人類学教室の副手となり、さらに翌年に大山史前学研究所の研究員となる。1936年、大山史前学研究所を辞任して自ら出版社を立ち上げ、人類学・考古学の月刊雑誌『ミネルヴァ』の編集に携わった。1939年に東京帝大人類学教室嘱託、1944年に厚生省人口問題研究所人口民族部嘱託となった。戦後は国立音楽大学教授などをつとめた。選科修了後、選科の同窓だった山内清男や八幡一郎とともに縄文土器の編年に関する研究を進め、「編年学派」とも呼ばれた。縄文土器を中心に研究し、幅広い視野をもった考古学者として知られる。晩年は多摩考古学研究会を立ち上げ、地元の遺跡発掘や保存などに力を注いだ。（斎藤 2006; 坂野 2010; 大村 2014）

【著作】

甲野勇『図解 先史考古学入門』山岡書店、1947年。

甲野勇『縄文土器の話』世界社、1953年。

【コレクションとの関係】

台湾少数民族やアイヌのものもとで集めた楽器や民具などをコレクションに加えた。年代は不明なものが多いが、1944年の日付のあるものがあることから推定して、ほとんどが戦前

に集められたと推測される。

----- 執筆者：坂野徹

● 幸野辰夫（1915-?）

こうの・たつお

【事績】

鹿児島県揖宿郡指宿村（現 指宿市）生まれ。國學院大學を中途退学し、1936年には大阪府北河内郡住道村（現 大東市）鐘紡住道工場に事務職として勤務した。1943年の略歴では「書道教授をなす。雅号自蛾」とある。詩人としても作品を発表し、『鰭』『極光』『高原』『歌と評論』『詩人時代』などの同人となった。（幸野 1936; 1943）

【著作】

幸野辰夫「小鳥の訪る日」河西新太郎（編）『現代詩人随筆選集』146-147ページ、詩壇新聞社、1936年。

幸野辰夫「螢草」斉藤英俊（編）『日本放浪詩集』74-76ページ、詩壇タイムス社、1936年。

幸野辰夫「出征」河西新太郎（編）『戦時日本詩集』177-178ページ、国民詩人協会、1942年。

幸野辰夫「雀」河西新太郎（編）『詩と随筆選集』133-134ページ、桜書房、1943年。

幸野辰夫「颯風の歌」上田冷人（編纂）『昭和青年詩集 昭和18年版』108-109ページ、新詩潮社、1943年。

幸野辰夫「無花果」河西新太郎（編）『日本詩集 昭和18年版』181-182ページ、日本歌謡詩報国会、1943年。

【コレクションとの関係】

指宿郡指宿町東方で集めた農具や足半など18点を1933年にコレクションに加えた。このとき、幸野は満18歳だったが、当時の学制ではまだ國學院大學には進学していないか。

----- 執筆者：小島摩文

- 後藤謙三 (1888-?)
ごとう・けんぞう

【事績】

第一銀行行員。1911年に神戸高等商業学校を卒業後、第一銀行に入行して大阪支店に勤務した。1928年に小樽支店長となったことが、インターネットで公開されている佐藤棟造の日記からわかる。

【著作】

【コレクションとの関係】

1934年から1935年にかけて兵庫県加古郡高砂町農人町で集めた履物をコレクションに加えた。

----- 執筆者：飯田卓

- 後藤貞夫 (1914-1997)
ごとう・さだお

【事績】

教員、郷土史家、国文学者。大分県臼杵町（現 臼杵市）生まれ。1935年に広島高等師範学校を卒業し、同年に大阪府立富田林高等女学校の教諭となった。この年に東京市の日本青年館で開かれた日本民俗学講習会に参加し、渋沢敬三が主宰したアチックミュージアムを訪問している。その後、広島文理科大学文学科に再入学し、1942年に卒業。広島高等師範学校、大分県立日田中学校、大分県立臼杵高等女学校、兵庫県立星稜高等学校などで教鞭をとった。1953年以降は兵庫県教育委員会事務局指導主事、同事務局指導部学校指導課長、兵庫県立芦屋高等学校長、県立兵庫高等学校長、兵庫県立高等学校長協会会長などの役職を歴任した。戦後は、『源氏物語』をはじめとする国文学や、国語教育などについての論文を発表した。

【著作】

後藤貞夫「大分県大野郡長谷川村聞書」『近畿民俗』9: 34-36、1952年。

阿部通良・後藤貞夫・鈴木清美（編）『全国昔話資料集成17 大分昔話集』岩崎美術社、1991年。

後藤貞夫（著）濱崎賢太郎（編）『会長後藤貞夫先生を偲ぶ』関西国文談話会、2000年。

【コレクションとの関係】

1935年8月4日に大分県北海部郡白杵町で集めた民具数点をコレクションに加えた。

----- 執筆者：飯田卓

●古仁所豊（1885-?）

こにしよ・ゆたか

【事績】

日本銀行を経て、1920年～1921年頃より南満洲鉄道株式会社社会計課長、後に調査課長、経理部長、北京出張所長などを務めた。1934年頃から日本飛行機株式会社常務取締役を務めた。（人事興信所編 1937a; 『竜門雑誌』）

【著作】

古仁所豊『最近独逸産業の発達』大倉書店、1915年。

バートン（著）古仁所豊（訳）『恐慌論』大日本文明協会、1910年。

【コレクションとの関係】

1927年6月に、中国の上海の「綿打ち」「裁縫屋」等、労働や生活の一場面を示す木製の模型をコレクションに加えた。

----- 執筆者：永井美穂

●小林末夫（?-?）

こばやし・すえお

【事績】

兵庫県高砂在住の人物。『アチックマンズリー』8号（1936年2月号）によると、岡山経由で訪問した祝宮静を迎え、高砂や明石、東二見などを案内、高砂の恵比寿講にも招待した。

『アチックマンズリー』13号（1936年7月号）における内浦史料編集部の記事に続く記述のなかに「帳面類の書写は小林、柿塚両君によって案外進行した」という記述があり、柿塚欣一郎とともに史料の筆写に携わっていたことがわかる。同じ号の別のコラムには「八月から郷里を中心に探訪を続け、出来たら家島へも行きたい」とあり、家島での収集経験がある小林英夫と同一人物の可能性も推定される。（『アチックマンズリー』）

【コレクションとの関係】

1935年9月に兵庫県印南郡で集めた民具をコレクションに加えた。

----- 執筆者：加藤幸治

●小林知生 (1910-1989)

こばやし・ともお

【事績】

中国と東南アジアを専門とした考古学者。1933年に東京帝国大学文学部東洋史学科を卒業後、東亜考古学会の留学生として中国や仏領インドシナ（現 ベトナム・ラオス・カンボジア）に留学し、1935年に東京帝大文学部大学院に進学した。同学部の副手をつとめた後、再び中国に渡って現地の教育機関（元蒙疆学院、北京輔仁大学文学院）で教鞭をとり、各地の遺跡で発掘調査に従事。敗戦とともに帰国し、戦後は帝国女子専門学校（現 相模女子大学）や山梨大学を経て、1955年に南山大学文学部教授となった。同大学の人類学研究所所長や東南アジア考古学会会長も務めた。戦後は日本各地およびニューギニアで発掘調査をおこなった。（南山大学小林知生教授退職記念会編 1978; 斎藤 2006）

【著作】

有光教一・小林知生・篠遠喜彦『半島と大洋の遺跡——朝鮮半島・東南アジア・南太平洋』新潮社、1970年。

駒井和愛（編）『考古学概説』講談社、1972年。

【コレクションとの関係】

1939年に蒙疆で集めた農具や玩具などの民具をコレクションに加えた。

----- 執筆者：坂野徹

●小林英夫 (?-?)

こばやし・ひでお

【事績】

詳細は不明。『アチックマンスリー』第13号において、「小林氏」の1936年8月の活動予定として「八月から郷里を中心に採訪を続け、出来たら家島へも行きたいと思っておます」と記されている。もしこれが小林英夫のことならば、渋沢敬三が主宰したアチックミュー

ゼアムで活発に活動していた者ということになる。ただし、ここでいう小林氏は、祝宮静を高砂などへ案内した小林末夫である可能性もある。（『アチックマンズリー』）

【コレクションとの関係】

1936年8月に兵庫県飾磨郡家島町真浦で集めた履物をコレクションに加えた。

----- 執筆者：飯田卓

● 小林胖生（?-?）

こばやし・やすお

【事績】

地質技師。考古学や民族学を愛好し、1934年に設立された日本民族学会の発起人の一人となった。1907年に満鉄に入社し、満鉄地質研究所での在任中、鞍山鉄鉱床の発見などに功績を挙げた。1914年に日中の合弁会社 大新公司の日本側代表となり、1926年に設立された東亜考古学会の幹事となった。日本に帰国したのは1932年か。（財団法人民族学振興会編 1984; 吉開 2006）

【著作】

小林胖生『鞍山鉄鉱床発見思ひ出の記』満洲文化協会、1933年。

小林胖生（講演）笠森繁（編）『丙午迷信の科学的考察（財団法人啓明会講演集第62回）』

財団法人啓明会、1935年。

【コレクションとの関係】

1959年に岡山で収集した乳形祈願物をコレクションに加えた。

----- 執筆者：木村裕樹、菊地暁

● 小松勝美（1911-?）

こまつ・かつみ

【事績】

東京市（現 東京都）生まれ。東洋史専攻。渋沢敬三が主宰するアチックミュージアムで活動し、小川徹、袖山富吉、宮本馨太郎とともに、初期の『アチックマンズリー』編集を担当した。（『アチックマンズリー』）

【コレクションとの関係】

1935年から1936年にかけて山形県東村山郡高玉村、新潟県南魚沼郡湯沢村、東京府三宅島坪田村で集めた草履や山袴などのほか、台湾で集めた紙製祭具や大笠など60点近くの資料をコレクションに加えた。

----- 執筆者：木村裕樹

●小森瑤子（?-?）

こもり・ようこ

【事績】

本名は井之口由里子。財団法人民俗学研究所の所員を務めた民俗学者 井之口章次の妻。國學院大學を卒業する。國學院大學民俗学研究会会員となった。（井之口 2000; 2005）

【著作】

小森瑤子「誕生と犬」『日本民俗学』3(3): 82-87、1956年。

小森瑤子「泥打ち」『女性と経験』4: 21-24、1956年。

小森瑤子「秋田県南部の田植前後」『西郊民俗』2: 12-13、1957年。

小森瑤子「秋田県南部の年中行事」『日本民俗学』5(2): 66-71、1957年。

小森瑤子「女性史の一節 — 嫁の里帰り」『國學院雑誌』58(7): 26-30、1957年。

【コレクションとの関係】

1954年から1956年にかけて、藁で製作した資料を2点コレクションに加えている。うち1点は吉田典代と共同採集。

----- 執筆者：菊地暁

●近伊左衛門（?-1959）

こん・いざえもん

【事績】

郷土史家。秋田県横手市十文字町植田生まれ。大地主である生家の9代目を襲名、父が共同出資して設立した植田銀行の経営に関わるも、昭和初年の金融恐慌にともなって、同行が吸収合併されたため辞任。上京して近世経済思想史の大家 滝本誠一に学び、郷土出身の幕末の思想家 佐藤信淵について研究を進めた。戦時中に帰郷した後も学究生活を続け、没

後、遺言により遺産で保育所が設立された。（『秋田魁新報』1994年6月3日付）

【著作】

近伊左衛門『神道経済観と佐藤信淵（半農会第一回研鑽報告集）』近伊左衛門、1936年。

【コレクションとの関係】

1935年に秋田県平鹿郡植田村で集めた資料数点をコレクションに加えたほか、1936年に鹿児島県大島郡龍郷村で得た履物をコレクションに加えた。

----- 執筆者：菊地暁

● **今和次郎**（1888-1973）

こん・わじろう

【事績】

青森県弘前市に生まれる。東京美術学校図案科に入学、卒業後は早稲田大学建築学科の助手をふりだしに講師、助教授、教授を歴任する。柳田国男門下で民家研究の先鞭をつけ、朝鮮の農村を含む日本全土の調査を行う。関東大震災後のバラックを民家研究に連続してスケッチして歩いたのを契機に、研究の対象が都市生活へと向かい、その方法として「考現学」を確立し、服装史にも業績をあげ、「流行研究会」の設立、「生活学」を提唱した。（今 1987; 川添 2004; 今 2011; 近藤 2013b）

【著作】

今和次郎『日本の民家』鈴木書店、1922年。

今和次郎・吉田謙吉『モデルノロゼオ（考現学）』春陽堂、1930年。

今和次郎『今和次郎集（全9巻）』ドメス出版、1971年。

【コレクションとの関係】

1937年に渋沢敬三が保谷の地に野外博物館を建設するにあたって、今は完成予想図を描いている。今が渋沢と共同して調査した記録はないが、今は渋沢が主宰するアチックミュージアムに、調査した先で入手した民具を寄贈しており、そこで催された研究会にも出席するなど、アチックミュージアムの活動に参画していたことがうかがえる。

----- 執筆者：朝倉敏夫

● **コンクリン、ハロルド** (1926-2016)

Conklin, Harold C.

【事績】

アメリカの文化人類学者。1955年よりコロンビア大学で、1962年よりイエール大学で教鞭をとる。フィリピンのハヌノオ・マンヤンの植物認識に関する実証的な論文は、認識人類学やエスノサイエンスといった新領域を開拓するとともに、クロード・レヴィ=ストロースの『野生の思考』といった理論的著作をも支えた。(福井 1984; 1988; 松井 1991)

【著作】

Harold C. Conklin 1955 *The relation of Hanunóo Culture to the Plant World*, PhD Thesis, Yale University.

【コレクションとの関係】

イエール大学大学院在学中にフィリピン調査をおこなったおり、日本にもたち寄り、若干の資料を寄贈している。

----- 執筆者：飯田卓

● **近藤勘治郎** (1882-1949)

こんどう・かんじろう

【事績】

越後の実業家、考古学者。新潟県三島郡関原村（現 長岡市）生まれ。小学4年を卒業後、漢学塾に学んで関原銀行の専務となり、六十九銀行の支配人および専務を経て、長岡六十九銀行常務取締役となった。三島郡教育会長や新潟県教育会長なども務めた。また、父 勘太郎の影響で考古学に興味を持ち、長男 篤三郎とともに県下各地の先史時代遺跡を広くめぐり、数多くの遺物資料を収集した。自宅に「近藤考古館」を開設し、『三島郡誌』（三島郡教育会、1937年）の編纂にも関わった。中央の研究者のなかでは、とりわけ八幡一郎から強い支持を得た。なお、勘治郎、篤三郎父子のコレクションのうち、「火焰土器」をはじめとする約6万点もの土器石器は、1951年に開館した長岡市立科学博物館に寄贈された。(松岡 1958; 新潟日報事業社編 1977; 社団法人日本博物館協会編 1978; 小熊 1998)

【著作】

近藤勘治郎・近藤篤三郎「越後馬高遺跡と滑車型耳飾」『考古学』7(10): 478-483、1936年。

近藤勘治郎「三島郡馬高遺跡に於ける石器時代、附、滑車型土製耳飾りに就いて」『高志路』3(6): 1-5、1937年。

【コレクションとの関係】

新潟県長岡市や三島郡、北魚沼郡などで集めた履物などの民具約20点をコレクションに加えた。年代はほとんどが1929年だが、不明のものもある。

----- 執筆者：木村裕樹

● 斎藤善助（1886-1959）

さいとう・ぜんすけ

【事績】

岩手県二戸郡石神村（現 花巻市）の斎藤家の17代目当主。岩手県立福岡中学校を中退後、家業の農業や漆器業を経営した。1935年、渋沢敬三らアチックミュージアム同人が調査に訪れた際にこれを受け入れ、有賀喜左衛門が詳細調査を実施するのに協力した。その成果は、日本農村社会学の古典的名著『大家族制度と名子制度—南部二戸郡石神村に於ける』（アチックミュージアム彙報、1939年）にまとめられた。非親族を含みうる経営体としてのイエという有賀同族団理論は、斎藤家の事例研究によって形成されたものである。斎藤は、調査時のみならず調査後も、有賀の書簡をとおした膨大な問い合わせに丁寧に返信回答し、モノグラフの作成を支えた。（三須田・林・庄司・高橋 2015）

【コレクションとの関係】

1935年9月15日に岩手県二戸郡荒沢村石神の民具20点あまりをコレクションに加えている。このほか、早川孝太郎や村上清文が同地で集めた資料数点にも、斎藤の名が寄附者として記されている。

----- 執筆者：菊地暁

● 酒井仁（?-1933）

さかい・ひとし／じん

【事績】

慶應義塾大学卒業後、第一銀行行員となる。1930年に、銀行取締役の渋沢敬三が率いていた研究グループであるアチックミュージアムの例会に参加した。銀行員ながら民俗学に興

味を持ち、渋沢敬三とともに、1931年の飛鳥調査や1933年の男鹿・藤琴・石神・八戸調査にも参加した。逝去に際し、渋沢は「皆と旅を共にシアティックの為にもあんなに協力して下さった同氏の長逝はあきらめ切れぬ感が今更深い」と述べている。(渋沢 1933b; 渋沢敬三伝記編纂刊行会編 1979)

【コレクションとの関係】

1927年から1930年にかけて、大分県大分市の絵馬や長野県別所村の鳩笛などをコレクションに加えている。

----- 執筆者：小林光一郎

● 阪谷希一 (1889-1957)

さかたに・きいち

【事績】

満洲国官吏。東京出身。1914年に東京帝国大学法科大学を卒業。日本銀行に勤務したのち、1924年に関東庁財務課長、1929年に拓務省大臣官房文書課長、1931年に同殖産局長心得、1932年に満洲国政府國務院総務次長、1935年に満洲中央銀行常任監事、1936年に南満洲鉄道株式会社理事、1938年に中国聯合準備銀行顧問、1943年に貴族院議員を歴任した。公職追放解除の後、株式会社科学研究所社長、科研薬科工業株式会社取締役。大蔵大臣などを歴任した阪谷芳郎の長男。渋沢敬三の従兄にあたる。(『読売新聞』1957年11月7日付; 阪谷 1979; 秦編 2002)

【コレクションとの関係】

1927年に、押絵人形と経筒を、1928年に、劇面4点をコレクションに加えた。年代からみて、関東庁勤務時代に収集したものと思われる。

----- 執筆者：永井美穂

● 桜田勝徳 (1903-1977)

さくらだ・かつのり

【事績】

水産史と漁民文化の研究に貢献した民俗学者。宮城県に生まれ、判事の父の赴任に従い大阪へ移る。慶應義塾大在学中に柳田国男の「民間伝承論」を聴講し、民俗学研究を開始。

後に柳田を中心に進められた民俗調査では、海村・山村・離島の生活調査員として中心的な役割をはたして活躍した。大学卒業後、渋沢敬三に招かれ、当時新設された水産史研究室に入る。1950年に財団法人日本常民文化研究所初代理事長となり、その後水産庁水産資料館長となる。1965年に退任し、白梅学園短期大学教授となった。

【著作】

桜田勝徳『桜田勝徳著作集（全7巻）』名著出版、1980-81年。

【コレクションとの関係】

1933年から1938年にかけて、岐阜県や四国、九州など、主として西日本で集めた資料約80点をコレクションに加えた。品目をみると、桜田個人の研究に関わる漁具が多いが、アチックミュージアムが関心を持ってきた履物や藁細工や竹かごなども少なくない。

----- 執筆者：加藤幸治

● 佐々木嘉一（?-?）

ささき・かいち

【事績】

愛知県北設楽郡本郷町（現 東栄町）中在家の人物。渋沢敬三が奥三河地方で花祭を見学した際に親交を深めた。1930年4月に東京の宮本勢助・馨太郎邸と渋沢敬三邸で花祭りを上演したときには、いずれも榊鬼を演じている。「その内とうとう私も早川さんに伴われ花祭見物のファンとなり、（中略）原田清・佐々木嘉一・夏目一平・窪田五郎・夏目義吉等同地方の人々と親しい交わりを結ぶに至った。」と渋沢は書いている。（渋沢 1933b; 1961; 宮本・佐野・北村・原田・岡田・高城編 2016）

【コレクションとの関係】

1929年から1930年にかけて、翁面や鬼面など芸能に用いる小道具や絵馬、民具などをコレクションに加えた。

----- 執筆者：小林光一郎

● 佐々木喜善 (1886-1933)

ささき・きぜん

【事績】

民俗学者、小説家。岩手県上閉伊郡土淵村（現 遠野市）生まれ。岩手医学校を中退して作家を志し、上京。作家 水野葉舟の紹介をとおして柳田国男の知遇を得た。郷里の口碑伝説を語ったものが柳田によって『遠野物語』（聚精堂、1910年）としてまとめられたことは、あまりに有名。のち体調を崩して帰郷し、農会長や村長など村の公職を務め、郷土の改革改善に取り組んだ。また、大本教の信仰にも傾倒した。この間も研究と執筆を続け、晩年は仙台に移り住み、NHK 放送番組「東北土俗講座」を担当するなど、東北における民俗学の普及に尽力した。「日本のグリム」とも称される。（菊地 1969; 山田 1974; 遠野物語研究所編 2002）

【著作】

佐々木喜善『奥州のザシキワラシの話』炬辺叢書、1920年。

佐々木喜善『老嫗夜譚』郷土研究社、1927年。

佐々木喜善『聴耳草紙』三元社、1931年。

佐々木喜善『佐々木喜善著作集（全4巻）』遠野市立博物館、1986年。

【コレクションとの関係】

1931年に、郷里の岩手県上閉井郡土淵村で集めた狩猟関連の資料や山形県酒田市で集めた仏事関連の資料をコレクションに加えている。

----- 執筆者：菊地暁

● 佐々木由次郎 (?-?)

ささき・よしじろう

【事績】

愛知県北設楽郡本郷町（現 東栄町）中在家の人。屋号は池島。花祭研究で奥三河を訪れた早川孝太郎を介して、本郷町長の原田清、同じく中在家の佐々木嘉一とともに、渋沢敬三と親交を深める。1930年に渋沢が東京三田綱町の自邸で渋沢が花祭公演を企画した際には、計画時から早川、嘉一とともに原田を支え、公演の成功に貢献した。（渋沢史料館編 2013）

【コレクションとの関係】

1929年に愛知県北設楽郡本郷町の「火打袋」をコレクションに加えた。

----- 執筆者：永井美穂

● 笹村草家人（1908-1975）

ささむら・そうかじん

【事績】

彫刻家。東京芝出身。本名は良紀。東京美術学校彫刻科を卒業後、石井鶴三に師事し、1944年に東京美術学校助教授となった。戦後は、「荻原礫山の人と芸術」の研究と顕彰運動に携わる。1953年、礫山研究委員会の指導者となって事業を推進し、礫山美術館を開館させた。同館の開館にあたっては、渋沢敬三の協力も得ている。1958年に同館理事となった後、1961年に琉球大学から招聘を受けて沖縄に渡る。1963年に渋沢の首像「最後の渋沢先生」を制作した。渋沢が主宰した絵引きの会のメンバー。（東京芸術大学石井教授研究室編 1954；東京国立文化財研究所美術部編 1978；河岡 1981；笹村 1981）

【著作】

笹村草家人『笹村草家人彫刻作品集』私家版、1958年。

【コレクションとの関係】

1961年に、沖縄石垣島の水汲み、同宮古島の箒、同竹富島の芋掘具をコレクションに加えた。笠、線香、アダンの葉、クバの葉については採集地の記録が無いが、同様に沖縄で採集したものであると考えられる。

----- 執筆者：永井美穂

● 佐治祐吉（1894-1970）

さじ・ゆうきち

【事績】

福島県会津若松出身。東京帝国大学大学院を修了。1916年に同人誌『新思潮』に参加。1912年に『紋平が幼き心』、1921年に『恐ろしい告白』を出版。第一銀行勤務を経て、1930年頃に渋沢事務所に入所。アチックミュージアムが刊行した『民具問答集』では、いずれも福島県内で採集された「ユキフミ」「ユキフミ」「フカグツ」「ハバキ」「ゲンベー」につい

での質問に回答している。1932年頃より「青淵先生伝記資料編纂所」にて『渋沢栄一伝記資料』刊行のための作業に従事した。1939年に鉄鋼聯盟で勤務、1942年に鉄鋼統制会で秘書を務めた記録がある。大伯父は、官僚で第一銀行取締役などを歴任した日下義雄。(佐治 1944; 明石 1950; 日外アソシエーツ編 2004; 『竜門雑誌』)

【著作】

佐治祐吉『紋平が幼きころ』私家版、1912年。

佐治祐吉『恐ろしい告白』宝文社、1921年。

高田利吉(草案) 諸橋徹次(編纂) 佐治祐吉(編)『青淵論語文庫目録』渋沢事務所、1943年。

【コレクションとの関係】

1927年から1931年にかけて福島県若松市の「首振ベーコ」「紙雛」、東京の「御會式万燈」「おかめ面」、千葉県安房郡船形町の「背負籠」、石川県金沢市の「紙人形」、長崎の「鯨の汐吹き」、朝鮮の「天下大將軍 地下女將軍」など、約70点をコレクションに加えた。

----- 執筆者：永井美穂

● 佐藤金治郎 (1874-1955)

さとう・きんじろう

【事績】

南部神楽伝承者。岩手県一関市東山町田河津生まれ。天性の美声の持ち主で、幼年時から竹沢の芸能一家千葉幸蔵宅に出入りし、神楽の本場である西磐井の神楽組を訪れて教を請う。のち、各所の神楽の長所を取り入れて舞い方、演義(せりふ)、節回しなど改良し、一派を創り上げた。1900年、26歳の若さで大東町曾慶に金治郎流神楽を伝え、その後、千厩熊田倉や大東町天狗田などにも伝授。東磐井郡における神楽復興の功労者となった。また、彫刻にも優れ、多数の面を作品として残した。

【コレクションとの関係】

1933年に秋田県から集めた資料をコレクションに加えている。

----- 執筆者：菊地暁

● 佐藤三次郎（?-?）

さとう・さんじろう

【事績】

北海道幌別郡幌別村（現 登別市）生まれ。アイヌ語学者 知里真志保と同郷で、またいところにあたり、少年時代より交流を持った。その縁で、1934年に上京したさい、知里の学費を援助した渋沢敬三を中心とするアチックミュージアムを訪れ、故郷である漁村のようすを記録して出版する約束をした。これが『北海道幌別漁村生活誌』であるが、その「自序」を読むかぎりでは、著者本人よりも東京の人たちのほうが刊行を楽しみにしていたらしい。執筆は幌別でおこなわれ、地元の知人たちがそれを助けたと記されている。なお、佐藤は、知里の父 高吉の養女となったミサオと結婚しており、知里の「義弟」といわれることもある。（藤本 1982; 宮本常一 2012）

【著作】

佐藤三次郎『北海道幌別漁村生活誌（アチックミュージアム彙報 第19）』アチックミュージアム、1938年。

【コレクションとの関係】

北海道幌別郡幌別村で集めた仕事着や網針などの資料十数点をコレクションに加えた。登録の時期がはっきりしているものは、1936年となっている。これは、佐藤がアチックミュージアムを訪問してから著書を刊行するまでのあいだの時期にあたる。

----- 執筆者：飯田卓

● 佐藤富治（?-?）

さとう・とみじ

【事績】

渋沢敬三が主宰したアチックミュージアム（アチック・ミュージアム・ソサエティ）初期の同人。『A・M・S日誌』によると、渋沢がイギリス駐在を終えて帰国した直後の復興第1回例会（1925年12月4日開催）を機に共同で取り組んだ「チームワークとしての玩具研究」において、蛇の玩具を担当した。当時の資料台帳である『おもちゃ箱原簿 第壱』の中扉に連記された同人名に、佐藤富治の名がみえる。（近藤編 2001; 『アチックマンズリー』）

【コレクションとの関係】

1921年から1933年にかけて、岩手県、神奈川県、熊本県で集めた資料40点あまりをコレクションに加えた。郷土玩具のほか、岩手県西盤井郡萩荘村の生活用具が多数含まれている。なお、蛇の玩具は、神奈川県の江ノ島で採集した1点のみである。

----- 執筆者：木村裕樹

●佐藤弘 (1897-1962)

さとう・ひろし

【事績】

経済地理学者。大分県出身。1922年に東京帝国大学理学部地理学科を卒業し、東京商科大学（現一橋大学）に職を得た。渋沢敬三が主宰するアチックミュージアムの同人となり、渋沢がイギリス駐在を終えて帰国した直後の復興第1回例会（1925年12月4日開催）にも出席した。この時期のアチックミュージアムがとり組んだ「チームワークとしての玩具研究」では、宮本璋とともに馬の玩具を担当した。1926年にドイツへ留学し、1937年に教授となった。1951年から1953年までは東京大学教授も兼任し、1961年に定年退官するまで一橋大学で教鞭をとった。退職後は大東文化大教授となり、日本商品学会会長や経済地理学会会長、日本工業立地センター理事長、工業立地調査審議会会長なども務めた。（上田・西沢・平山・三浦監修 2015）

【著作】

佐藤弘『世界経済地理』千倉書房、1930年。

佐藤弘『政治地理学概論』柘谷書院、1939年。

佐藤弘『商業地理』春秋社、1958年。

【コレクションとの関係】

1921年に中国北京市で集めた人形など十数点をコレクションに加えた。

----- 執筆者：飯田卓

●佐藤正夫（?-?）

さとう・まさお

【事績】

秋田県北秋田郡荒瀬村（現 北秋田市）のマタギ集落 根子の旧家 屋号七之丞の家人（戸主か）。荒瀬小学校訓導。1936年3月に高橋文太郎と武藤鉄城が民俗調査をおこなった際に協力した。高橋と武藤は、7日から9日まで同家に滞在した。高橋が『秋田マタギ資料』を出版する際は、同家に伝わる古文書やオコゼなどを提供した。また、佐藤が1932年4月に書いた「根子部落之概要」も同書に収録された。（高橋 1937）

【コレクションとの関係】

秋田県北秋田郡荒瀬村で集めたオコゼ（山の神に供える品、木箱入り）をコレクションに加えた。木箱には高橋文太郎宛ての宛名書きがある。

----- 執筆者：木村裕樹

●更科公護（1906-?）

さらしな・きみもり

【事績】

前半生の詳細は不明。1950年代頃に茨城県東茨城郡茨木町に転居し、考古学調査と民俗調査に携わった。表面採集で得た縄文時代の遺物は、茨城町立川根中学校（現 桜丘中学校）へ寄附したという。1956年より茨城町社会教育委員および公民館運営審議会委員、茨城県古墳調査員、1962年より茨城県古代遺跡調査員、1967年より茨城町文化財審議委員などを歴任。1980年に娘を頼ってブラジルへ移住した。（茨城町郷土史研究会編 1980）

【著作】

更科公護『旧川根村（茨城県東茨城郡茨城町）における狐火の研究』天恩ビルディング、1958年。

更科公護『筑波山周辺の動植物の方言』筑波書林、1981年。

更科公護『水戸市の動植物方言』筑波書林、1985年。

更科公護『茨城・蛇の民俗と民話』筑波書林、1986年。

【コレクションとの関係】

茨城県東茨城郡茨城町下土師で集めた内絃鍋をコレクションに加えた。採集期などは不明。

----- 執筆者：飯田卓

● 志道吉次 (?-?)

しどう・きちじ

【事績】

水産庁職員。1924年当時には農商務省水産講習所（現 東京海洋大学）に在籍していたらしく、東京海洋大学附属図書館が公開している漁業学科の「漁業調査報告」（当時の学生がおこなった調査のリスト）に参加者として名がみえる。1949年の第6国会衆議院地方行政委員会および1950年の第7国会衆議院水産委員会における行政側答弁が国会会議録に記録されている。（『第6国会衆議院地方行政委員会議事録』）

【著作】

志道吉次「外地引揚業者の更生」『水産会』753: 3-6、1946年。

志道吉次「旋網漁業の現況と将来」『漁村』15(2): 30-32、1949年。

【コレクションとの関係】

1939年頃に海南島で集めた団扇をコレクションに加えた。

----- 執筆者：飯田卓

● 篠遠喜彦 (1924-2017)

しのお・よしひこ

【事績】

人類学者、ポリネシア考古学者。日本考古学研究所で姥山貝塚の発掘調査報告書をまとめたのち、1954年、アメリカ本土へ留学する途中でハワイ島にたち寄ったところ、ピショップ博物館の発掘調査に参加したことが縁で、アメリカ本土への留学を中止して同地での研究に従事することになった。ポリネシア先史時代の編年を確立したことで知られる。ピショップ博物館人類学部上席特別研究員、のちに人類学部長。父は遺伝学者の篠遠喜人。（グロート・篠遠 1952; 篠遠・梅棹 1980）

【著作】

篠遠喜彦・荒俣宏『楽園考古学』平凡社、1994年。

篠遠喜彦・佐藤秀明『秘境マルケサス諸島』平凡社、1996年。

篠遠喜彦「ファヒネ島に半生をかける」『季刊民族学』93: 5-49、2000年。

篠遠喜彦・荒俣宏『南海文明ランドクルーズ—南太平洋は古代史の謎を秘める』平凡社、2003年。

【コレクションとの関係】

ソシエテ諸島で集めた植物繊維製の容器（籠）をコレクションに加えた。

----- 執筆者：飯田卓

● 芝崎確次郎（1844-1930）

しばざき・かくじろう

【事績】

渋沢栄一の秘書役、渋沢家の会計担当者、銀行員。武蔵国秩父郡大野村（現 埼玉県比企郡ときがわ町）生まれ。誕生年は1847年とする説もある。幕末に渋沢栄一の従兄弟 尾高惇忠や渋沢喜作らとともに彰義隊（のちに振武軍）に加わったとされるが、明治の初めころに渋沢家と関わりを持つまでの足跡は明らかでない。渋沢家と関わりを持つようになったのち、1873年に創業した第一国立銀行の草創期に入行している。1886年に出納方仕掛掛監督、翌1887年に六等勤仕会計課長となり、1897年まで在勤。その後、東京貯蓄銀行の両国支店長となって、1917年に辞任するまで銀行員としての半生を送った。（渋沢青淵記念財団竜門社編 1967; 五十嵐 1990）

【コレクションとの関係】

「採集者 芝崎（または柴崎）」と記録された資料を集めた可能性が高い。採集期がわかっている資料は、1921年から1925年のあいだに登録されている。採集場所は東京都や大阪府、京都府、群馬県、静岡県など、数は十数点、内容は縁起物や人形など。

----- 執筆者：井上潤

● 渋沢

しぶさわ

【事績】

日本民族学協会附属民族学博物館（保谷民博）にさまざまな資料をもたらした人びとの名は、1960年代まで継続的に編集された『民具標本収蔵原簿』（原本は神奈川大学に所蔵）に記されている。しかし姓だけが記されており素性が不分明なものもある。「渋沢」はそのうちのひとつ。

採集者名が「渋沢」とだけ書かれた資料のほとんどは、渋沢敬三によって集められたと考えてよい。とはいえ、資料を集めた「採集者」のなかには敬三のほか、叔父（父の弟）にあたる渋沢秀雄、叔母（父の弟の配偶者）にあたる渋沢美枝子、母の渋沢敦子、妻の渋沢登喜子、弟の渋沢信雄と渋沢智雄、さらには敬三の祖父 栄一の従兄弟の孫である渋沢長康にいたるまで、多くの名がある。敬三の家族や親族が「渋沢」と略記されている可能性も、考えておかなければならない。（飯田・朝倉編 2017）

【コレクションとの関係】

渋沢姓をもつ採集者によって集められた資料は700点近くあり、そのうち渋沢敬三が集めた資料は300点あまり。いっぽう「渋沢」とだけ書かれていて名まえがないのは200点あまり。

----- 執筆者：飯田卓

● 渋沢敦子（1880-1943）

しぶさわ・あつこ

【事績】

橋本実梁の娘で、渋沢敬三、信雄、智雄の母。山田塾出身。1895年、渋沢栄一の長男 篤二と結婚し、深川福住町邸に居住。1909年に三田綱町邸に移転。1913年に夫 篤二が廃嫡となると、自らの意志で3人の子どもたちを連れて綱町邸を出て、子どもやその従兄たちと学寮生活をともにした。夫不在の家庭において、渋沢栄一の嫡孫である敬三を懸命に育てた。また、敬三もその思いに応じて、母を労わり支えた。晩年は渋谷大山町に移り住んだ。（中山編 1956; 渋沢青淵記念財団竜門社編 1960a）

【コレクションとの関係】

1929年に、鎌倉の「貝屏風」をコレクションに加えている。

----- 執筆者：永井美穂

● 渋沢敬三（1896-1963）

しぶさわ・けいぞう

【事績】

東京市深川区（現 東京都江東区）出身。号は祭魚洞。1915年に渋沢同族株式会社社長となり、1918年に東京帝国大学法科大学経済学科入学。1921年頃、東京市芝区三田綱町（現 東京都港区三田）の自邸内倉庫2階を拠点に、友人たちとアチックミュージアムソサエティを結成。同年に東京帝国大学経済学部を卒業し、横浜正金銀行に入行した。1922年に同行ロンドン支店勤務。1925年に帰国し、アチック復興第1回例会で会の名称をアチックミュージアムとした。1926年に第一銀行、東京貯蓄銀行取締役。以降、多くの会社、団体の役員を務めた。

1931年に子爵襲爵。糖尿病の療養中に「内浦文書」と出会い、アチックミュージアムに漁業史研究室を増設。1934年に日本民族学会設立理事。1937年より財団法人竜門社の日本実業史博物館構想が立ち上がり、同準備室で日本近代経済史関係資料を収集。1940年に「豆州内浦漁民資料」で農学賞受賞。1941年に第一銀行副頭取、1942年に日本銀行副総裁、諸会社役員退任。1944年に日本銀行総裁。1945年に大蔵大臣。1946年に公職追放。

1951年に公職追放を解除されたのち、多くの会社や団体の役員を務め、日本の産業界や経済界を支えた。1953年に国際電信電話会社社長、1954年に国際商業会議所日本国内委員会議長、1956年に財団法人日本モンキーセンター会長、1957年に外務省顧問として中南米諸国を歴訪、1963年に漁業史、民族学、民俗学への貢献により、朝日賞を受賞した。

父 篤二が廃嫡になったことで、実業家 渋沢栄一の嫡孫としての重責を負って育つ。動物学者を志すも、祖父 栄一の願いで実業界に身を置き、祖父亡き後は渋沢宗家当主として、第一銀行を拠点に多くの会社や団体の役員を務めた。自邸でアチックミュージアムを主宰し、民俗学、民族学、歴史学の学者たちと調査旅行や資料収集を行い、共同研究を推進。戦後は、水産庁の漁業制度資料調査や文化財保護、六学会連合（後の八学会連合、九学会連合）に始まる学際的な調査研究を支援するとともに、魚類学や霊長類学など自然科学分野に関する研究も支援した。

アチックミュージアムは1942年に日本常民文化研究所と改称、1950年財団法人に改組し、1982年より神奈川大学に移管。現在、アチック収集民具資料は国立民族学博物館で、日本実業史博物館準備室旧蔵資料は国文学研究資料館で、蔵書は中央水産研究所図書資料館、流通経済大学図書館、国文学研究資料館、渋沢史料館で所蔵している。（中山編 1956; 渋沢 1961; 渋沢 1993b; 近藤編 2001; 横浜市歴史博物館・神奈川大学日本常民文化研究所編 2002; 渋沢史料館編 2013）

【著作】

渋沢敬三『祭魚洞雑録』郷土研究社、1933年。
渋沢敬三『日本魚名の研究』角川書店、1959年。
渋沢敬三『犬歩当棒録』角川書店、1961年。
渋沢敬三『渋沢敬三著作集（全5巻）』平凡社、1992-1993年。

【コレクションとの関係】

1920年から1960年頃までに、多くの資料をコレクションに加えた。

----- 執筆者：永井美穂

● 渋沢登喜子（1902-1994）

しぶさわ・ときこ

【事績】

官僚・政治家の木内重四郎の二女。石川寅治より油絵を習う。東京女子大学校英文科を中退。1922年に渋沢敬三と結婚。綱町邸を取り仕切って当主の敬三を支えた。英語が堪能。兄 木内良胤は、敬三の東京高等師範学校附属中学校の同級生で親友。（渋沢青淵記念財団竜門社 1994）

【著作】

渋沢登喜子『剣岳』創栄出版、1988年。
渋沢登喜子『勿忘草』創栄出版、1990年。
渋沢登喜子（著）渋沢雅英（編）『遺稿 遙かな国、遠い昔』創栄出版、1994年。

【コレクションとの関係】

1927年にジャワの「皮製団扇」を、1929年には伊勢辰の千代紙、長野県南安曇郡有明村の「カモシカ」、奈良市の「奈良人形」、採集地不明の「ギニョール」をコレクションに加えた。

----- 執筆者：永井美穂

● 渋沢智雄（1901-1947）

しぶさわ・ともお

【事績】

会社役員。東京市深川区（現 東京都江東区）出身。北海道帝国大学農学部を卒業。1929年に渋沢宗家から分家し、中村節子と結婚した。1935年に澁澤倉庫株式会社取締役、1940年に同常務取締役、1937年に日本ワットソン統計会計機械株式会社社長、1943年に日本統計機取締役等を歴任した。渋沢篤二の三男で、敬三の弟。（渋沢青淵記念財団竜門社編 1964b; 澁澤倉庫株式会社社史編纂委員会編 1977; 日本経営史研究所編 1988）

【コレクションとの関係】

三重県宇治山田市の「神陵园の面」をコレクションに加えた。

----- 執筆者：永井美穂

● 渋沢長康（?-?）

しぶさわ・ながやす

【事績】

埼玉県大里郡八基村（現 深谷市）出身。渋沢家の書生として、深川福住町、三田綱町の渋沢邸に寄寓した。早稲田大学商科を卒業後、1910年に東京毛織物株式会社に入社。のちに帰郷した。渋沢敬三の祖父 渋沢栄一の従兄弟の孫。（『竜門雑誌』）

【コレクションとの関係】

1922年に中国、フランス、アメリカ、オーストラリアなど各国の玩具をコレクションに加えた。

----- 執筆者：永井美穂

● 渋沢信雄（1898-1967）

しぶさわ・のぶお

【事績】

会社役員。東京市深川区出身。京都帝国大学哲学科を卒業後、1928年ドイツ印刷業視察のため渡欧。1931年に渋沢宗家から分家して斎藤敦子と結婚した。1935年に東京製綱株式会

社取締役、1936年に同監査役、1937年に秩父鉄道株式会社取締役、1941年に東京製綱株式会社取締役。1957年に澁澤倉庫株式会社監査役。この他に中外商工株式会社取締役社長などを務めた。渋沢篤二の二男で、敬三にとって弟にあたる。(秩父鉄道株式会社 井上啓蔵編 1950; 中山正則編 1956; 大西信良編 1957; 渋沢青淵記念財団竜門社編 1964b; 藤井麟太郎編 1964; 渋沢編 1968; 澁澤倉庫株式会社社史編纂委員会編 1977; 『朝日新聞』1967年2月14日付)

【コレクションとの関係】

1922年寄贈の伏見人形（布袋8点、土蔵1点、牛1点）は京都帝国大学在学時に入手したもの。1926年寄贈の鳩笛は弘前で入手、1929年寄贈の木鉈、熊と人、熊の体操、みづく、兵士行列、鶏と人、銀魚、縫くるみ兎はシベリアで入手したものである。

----- 執筆者：永井美穂

● 渋沢秀雄 (1892-1984)

しぶさわ・ひでお

【事績】

実業家、随筆家。東京市日本橋区（現 東京都中央区）出身。1917年に東京帝国大学法科大学を卒業後、日本興業銀行を経て田園都市株式会社に入社し、後に取締役となった。1938年に株式会社東京宝塚劇場取締役会長、1943年に東宝株式会社取締役会長などを歴任。公職追放解除後は、日本民間放送連盟民間放送番組審議会委員や日本放送联合会放送番組向上委員などを務め、放送業界で多くの仕事をした。1974年に明治村理事長。1936年から久保田万太郎の「いとう句会」の同人となり、渋亭の俳号で作句したほか、随筆や評論などの文筆活動でも知られている。渋沢栄一の四男で、渋沢敬三にとっては叔父にあたる。(渋沢青淵記念財団竜門社編 1967; 渋沢敬三伝記編纂刊行会編 1979; 渋沢青淵記念財団竜門社 1984; 渋沢 1985; 『朝日新聞』1984年2月16日付)

【著作】

渋沢秀雄『攘夷論者の渡欧―父渋沢栄一』双雅房、1941年。

渋沢秀雄『明治を耕した話』青蛙房、1977年。

渋沢秀雄『筆のすさび』電波新聞社、1979年。

【コレクションとの関係】

1921年に、山形県南置賜郡南原村の「鶏」を寄贈した。

----- 執筆者：永井美穂

● 渋沢美枝子（?-?）

しぶさわ・みえこ

【事績】

実業家 福原有信の四女。1914年11月に渋沢栄一の二男 渋沢武之助と結婚した。渋沢敬三にとっては叔母にあたる。（渋沢青淵記念財団竜門社編 1964b）

【コレクションとの関係】

1929年に京都の「首人形」3点をコレクションに加えた。

----- 執筆者：永井美穂

● 島口雅光（1922-1972）

しまぐち・まさみつ

【事績】

石川県金沢市にある日蓮宗寺院 経王寺の第38代住職。東京生まれ。早稲田大学および立正大学を卒業後、高尾山で修行に励み、インドネシアでの兵役の後は福井県の曹洞宗寺院 永平寺で出家した。1956年にタイへ留学し、1961年に経王寺住職となった。1962年には、日蓮宗管長特使として、日本人の慰霊をおこなうため台湾へ渡航した。アジア各地で、仏法に従う活動を展開したといえる。

【著作】

島口雅光「中華民国の現状を見る ― 日本人慰霊塔落慶供養に参列して」『全仏通信』78: 6、1962年。

島口雅光（著）島口雅光遺稿集編集委員会（編）『メナム河のほとり ― 島口雅光遺稿集』北国書林、1973年。

【コレクションとの関係】

1957年にタイ国バンコクで集めた仏具5点をコレクションに加えた。留学時に集めたもの

と推測される。

----- 執筆者：飯田卓

● 島崎直幹 (1885-?)

しまざき・なおみき?

【事績】

株式会社浪華倉庫支配人。浪華倉庫は、1917年に鈴木商店が本格的な倉庫事業を開始するにあたり設立され、1933年に澁澤倉庫株式会社に吸収合併されるまで存続した会社。島崎は、大阪海陸協会第104回例会(1928年7月10日開催)にて幹事より新出席者として紹介された。(人事興信所編 1941; 伊藤 2010)

【コレクションとの関係】

1935年12月26日に高知県香美郡および安芸郡で集めた履物をコレクションに加えた。

----- 執筆者：井上潤

● 清水潤三 (1916-1988)

しみず・じゅんぞう

【事績】

考古学者。1939年に慶應義塾大学文学部国史学科を卒業し、1942年に同大学の助手に就任。戦時中の軍務をはさんで、1952年に助教授、1961年に教授となった。日中戦争中の1938年に、慶應義塾大学文学部史学科が中国大陸に派遣した「支那学術調査団」に加わる。戦後、1957年から58年にかけて日本民族学協会が組織した第1次東南アジア稲作民族文化総合調査団にも考古・歴史班として参加。蝦夷研究で業績を残し、古代の独木舟の研究でも知られる。(無署名 1982; 斎藤 2006)

【著作】

清水潤三・倉田芳郎『弥生文化』日本評論新社、1957年。

清水潤三『是川遺跡』中央公論美術出版、1966年。

【コレクションとの関係】

1958年2月にカンボジアで集めた資料をコレクションに加えている。明らかに、第1次東

南アジア稲作民族文化総合調査の際に収集した民具類である。

----- 執筆者：坂野徹

● 清水亮昇（1903-1987）

しみず・りょうしょう

【事績】

僧侶、仏教学者。名古屋市生まれ。13歳で知多半島の妙楽寺に入寺。16歳で得度。1929年、大正大学仏教学科を卒業、神林隆浄教授や河口慧海から真言やチベット学を学ぶ。翌年より6年あまり、『望月佛教大辞典』編纂所の所員となる。1932年、恩師神林が住職を勤めた埼玉県入間村（現 狭山市）の金剛院に入寺、後に住職となる。1939年、東京帝国大学史料編纂所研究員となる。1943年、蒙古連合自治政府興蒙委員会の教育処でラマ教の宗教行政に携わる。1945年、入間村の村長となる。1年あまりで辞職した後は金剛院の復興整備に尽力し、幼稚園も経営した。（無署名 1989; らくだ会本部編 1973）

【著作】

橋本光宝・清水亮昇（訳編）『蒙蔵梵漢和合璧金剛般若波羅蜜経』蒙蔵典籍刊行会、1941年。

橋本光実・清水亮昇（訳編）『金剛般若波羅蜜経』蒙蔵典籍刊行会、1941年。

【コレクションとの関係】

1944年に中国の内モンゴで集めた蠟燭をコレクションに加えた。

----- 執筆者：菊地暁

● 東海林貞吉（1903-?）

しょうじ・ていきち

【事績】

教育家。秋田県湯沢小学校在学時に残した図画作品が、秀作として残されている。それによると、1912年度は尋常小学校4年生に、1916年度は高等小学校1年生に在籍していた。1932年に小学校本科正教員の試験に合格し、1935年に秋田県師範学校を卒業したのち、21年の教員生活と12年の校長生活を送った。（アチックミュージアム編 1937; 長瀬 2003）

【著作】

東海林貞吉『現代っ子を育てる ― “しつける” から “しむける” への育て方』明治図書、1973年。

東海林貞吉『明日の学校を考える』明治図書出版、1975年。

【コレクションとの関係】

1932年に秋田県雄勝郡湯沢町の松脂ろうそくとその燭台をコレクションに加えた。『民具問答集』に書かれているのは、これらの資料についてのことだと思われるが、同書に記されている「収・3109」という番号は1950年代の管理原簿の番号と異なり、未詳。

----- 執筆者：加藤幸治、飯田卓

●白井一二 (1907-?)

しらい・いちじ

【事績】

教員、白井麦生の筆名で活動した詩人。愛知県豊橋市生まれ。東洋大学を卒業したのち、私立豊橋商業学校や豊橋松葉尋常小学校、藤ノ花女子高等学校などで教鞭をとった。『民俗学』の論文は、民俗学者 南方熊楠の疑問に答えて書いたもので、民俗学サークルでの活動も活発だったと推測される。1944年に教壇を去り、大日本兵器第三製作所に勤務するが、1949年に退職した。戦後は古書店 白文堂を経営し、1993年に引退した。郷土の浮世絵も集めた。

【著作】

白井一二『一九二八年の一部 ― 白山詩人同人詩集』白山詩人社、1928年。

白井一二「東三河の狐の嫁入」『民俗学』2(4): 51-54、1930年。

白井一二「菅江真澄の生地」柳田国男（監修）服部聖多朗（編）『菅江真澄翁著書生地伝記研究』16-17ページ、典籍研究会、1941年。

白井一二『麦生雑纂 ― 白井麦生の生涯』白文堂書店、1998年。

【コレクションとの関係】

1930年に愛知県豊橋市の鬼面を、1931年に同じく豊橋市のろうそく入れをコレクションに加えた。

----- 執筆者：飯田卓

● 白井武（?-?）

しらい・たけし

【事績】

事績の詳細は不明だが、1917年11月に渋沢敬三が満洲・朝鮮へ旅行する際に随伴した。（渋沢 1993b）

【著作】

【コレクションとの関係】

1929年から1930年にかけて福岡県や熊本県、岩手県で集めた人形や玩具など約10点をコレクションに加えた。

----- 執筆者：井上潤

● 白石喜太郎（1888-1945）

しらいし・きたろう

【事績】

日本資本主義の父と呼ばれる渋沢栄一の秘書。高知県生まれ。1910年に東京高等商業学校を卒業して同年に第一銀行に入行し、1914年に渋沢事務所に勤務するようになった。渋沢事務所との縁は、学生時代に白石の保証人を引き受けていた八十島親徳が渋沢事務所を主宰していたことによる。渋沢事務所の増員は、渋沢同族会社の設立を図ってのことであり、1915年に渋沢敬三を社長として渋沢同族会社ができてからは、白石も同社の書記を兼任した。

【著作】

白石喜太郎『渋沢栄一翁』刀江書院、1933年。

白石喜太郎『渋沢翁の面影』四条書房、1934年。

白石喜太郎『渋沢翁と青淵百話』日本放送出版協会、1940年。

【コレクションとの関係】

1926年に高知県で集めた船の模型や達磨をコレクションに加えた。

----- 執筆者：飯田卓

●進藤松司 (1907-1993)

しんどう・まつじ

【事績】

アチックミュージアム同人で、広島県賀茂郡三津町（現 東広島市）の漁業者。1935年、岩倉市郎と桜田勝徳、山口和雄の3人が隠岐島前で糸満漁民等の調査を終えた帰途に進藤家を訪問している。1937年に渋沢敬三が広島を訪問したさいにも、磯貝勇の案内で進藤家を訪問した。漁民が自らの漁撈生活を事細かに記録する形式をとった著書『安芸三津漁民手記』は、生活者の視点で記述した稀有な漁業誌として高く評価されている。

【著作】

進藤松司『安芸三津漁民手記（アチックミュージアム彙報 第13）』アチックミュージアム、1937年。

進藤松司『瀬戸内海西部の漁と暮らし—安芸三津漁民稿（神奈川大学日本常民文化叢書 3）』平凡社、1994年。

【コレクションとの関係】

1937年11月23日に、広島県賀茂郡三津町の漁具や農具をコレクションに加えている。この年は、三田綱町にあったアチックミュージアムの資料がすべて保谷村の日本民族学会附属民族学博物館に寄贈された年である。進藤の資料は、師走が迫ってから登録されていることから、三田綱町に残っていたものを急いで登録したものである可能性が高い。なお、この年に登録された資料とは別に、進藤が三津町で集めた資料が2点、1938年9月13日に追加で登録されている。

----- 執筆者：加藤幸治

●杉浦健一 (1905-1954)

すぎうら・けんいち

【事績】

人類学者。東京大学教授。ミクロネシア研究に貢献した。愛知県岡崎市生まれ。東京帝国大学文学部宗教学宗教史学科で宇野円空に学ぶ。文化圏説、機能主義、文化とパーソナリティ論、生態人類学などさまざまな理論を渉猟する。柳田国男にも師事して1934年度から1936年度にかけておこなわれた山村調査に参加。1937年、日本民族学会附属民族学研究所研究員となる。それ以降、ミクロネシアで土地制度を中心とした調査に従事。1938年、東

京帝国大学理学部副手として人類学教室に勤務し、同年より1941年まで南洋庁地方課の嘱託としてミクロネシア全域で調査した。1943年に文部省民族研究所研究員、1950年に東京外国語大学教授となる。1951年に日本民族学協会がアイヌ民族総合調査を実施した際は親族組織を担当した。1953年、東京大学教養学部にて初代の文化人類学教授として就任したが、翌年に夭折した。（祖父江 1976, 1988; 堀江 2011）

【著作】

杉浦健一『未開人の政治と法律』彰考書院、1947年。

杉浦健一『原始経済の研究』彰考書院、1948年。

杉浦健一『人類学』同文館、1951年。

【コレクションとの関係】

1938年にミクロネシアのヤップ島で集めた資料をコレクションに加えている。なお、国立民族学博物館には現在、保谷民博の資料とは別に、東京帝国大学理学部に収められていた杉浦関係資料もある。後者は、東京大学から寄託されたものである。

----- 執筆者：菊地暁

● 杉浦瓢（?-?）

すぎうら・ふくべ?

【事績】

近畿民俗学会の前身である大阪民俗談話会の会員。1934年11月11日に大阪府泉北郡浜寺公園（現 堺市）海の家で開催された第1回談話会より出席した。当時は大阪府堺市に在住していた。（大阪民俗談話会 1934-1938）

【コレクションとの関係】

1941年に、大阪府堺市で集めた、年神を祀る年徳棚をコレクションに加えた。

----- 執筆者：木村裕樹

● 杉山みつゑ (1905-1998)

すぎやま・みつゑ

【事績】

若林つやの筆名で活動した小説家。故郷の静岡県から1931年に上京し、プロレタリア文学や日本浪漫派の運動に関わり、『女人芸術』『輝ク』『婦人文芸』『日本浪漫派』『女人像』『浪漫派』『花影』などに寄稿。評伝『白き薔薇よ』では、プロレタリア文学者 小林多喜二などとの関係も述べられている。こうした執筆活動のいっぽうで、財団法人日本民族学協会および財団法人民族学振興会の事務員としても活躍した。杉山が日本民族学協会に就職した1944年当時、事務所は民族学研究所近くの東京市赤坂区霊南坂（現 東京都港区）にあり、杉山はここで『民族学研究』の編集などにたずさわった。また、事務所を彦根工業専門学校へ疎開させるのにも尽力した。戦後になり、1946年に事務所が保谷（現 西東京市）に移ってからもひき続き仕事を続け、日本民族学協会が改組（1964年）されたのちも後身の民族学振興会で働いた。1987年に81歳で退職した。（堀江 2003）

【著作】

若林つや『野薔薇幻相』ドメス出版、1995年。

【コレクションとの関係】

杉山が収集したことになっている資料5点は、手続きの便宜上、協会職員として受け入れたものと思われる。資料の収集地である佐渡島との関係も不明。

----- 執筆者：飯田卓

● 鈴木旭 (?-?)

すずき・あさひ／あきら

【事績】

書生として兜町の渋沢栄一邸に寄寓し、京華商業学校を卒業して第一銀行に入行した。1913年頃に東洋生命保険株式会社に入社し、西ヶ原にあった栄一の二男 武之助邸に寄寓。1918年頃より日新護謨株式会社でシンガポールに赴任。1927年頃よりスマトラ護謨拓殖株式会社。1937年頃より日本電気化学工業株式会社常務取締役。（『竜門雑誌』）

【コレクションとの関係】

1921年に「ワンヤン」を、1922年に「漁船模型」をコレクションに加えた。いずれもシン

ガボールのもので、日新護謄でシンガポールに赴任した際に入手したものであろう。

----- 執筆者：永井美穂

● 鈴木行三（1879-1962）

すずき・こうぞう

【事績】

戯作研究者。群馬県出身。東京専門学校文科から外国語学校仏語専修科へ進学。東京専門学校時代から『支那人名辞書』の編纂を手がけた。渋沢邸が深川にあった時代から書生を務め後に、渋沢家執事となった同郷の田島昌次を介して、渋沢敬三を知る。戦時中、『戯作者伝記集成』一卷を上梓した後、残りの原稿を戦災で焼失。アチックミュージアムでは大西伍一の後を継いで『日本漁民事蹟略』などを担当した。渋沢は、『日本漁民事蹟略』を評して「鈴木君の異常な労作の結果」と述べている。戦後は「宿直」として保谷民博に勤務した。（江戸文学類従刊行会編 1929; 民族学博物館編 1949; 渋沢 1961; 『アチックマンズリー』）

【著作】

鈴木行三『戯曲小説近世作家大観 第1巻』中文館書店、1933年。

鈴木行三『日本漁民事蹟略（常民文化研究 第73）』日本常民文化研究所、1955年。

【コレクションとの関係】

コレクションに加えた資料は数点を数えるのみだが、日付は戦前のものも戦後のものもある。戦後、アチックミュージアムは民具収集をおこなわなかったが、アチックミュージアムに関わった個人のなかには、アチックミュージアムの資料をひき継いだ保谷民博に資料を寄贈していた者がいたことがわかる。

----- 執筆者：小林光一郎

● 鈴木醇（1896-1970）

すずき・じゅん

【事績】

地質学者。栃木県宇都宮市生まれ。渋沢敬三が主宰したアチックミュージアム（アチック・ミュージアム・ソサエティ）の活動初期の同人。東京帝国大学理科大学地質学科を卒業後、

1921年に同大学理学部助手、1924年に第一高等学校教授となった。「A・M・S」誌によると、本郷「鉢の木」で開かれたアチックミュージアム第1回集会（1921年2月2日開催）に出席。渋沢がイギリス駐在を終えて帰国した直後の復興第1回例会（1925年12月4日開催）を機に、アチックミュージアムがとり組んだ「チームワークとしての玩具研究」では、猿の玩具を渋沢と一緒に担当した。1928年にチューリッヒ大学で変成岩の研究をおこない、1930年に北海道帝国大学教授。1960年に同大学を定年退職した後は、早稲田大学教授や日本地質学会会長、日本学士院会員、日本鉱山地質学会会長などを歴任した。1949年に日本学士院賞を受賞。渋沢敬三とは第二高等学校以来の親友であり、1953年に十和田科学博物館が開設した折には夫妻で落成式に出席。1960年に北海道大学を退職したのを機に、渋沢との縁で同館館長に就任した。（北海道大学理学部地質学鉱物学教室 1970; 渋沢 1992b; 近藤編 2001; 横浜市歴史博物館・神奈川大学日本常民文化研究所編 2002; 鈴木醇先生記念出版会編 1973）

【コレクションとの関係】

1922年に岡山県で集めた吉備津犬人形などを、1928年に栃木県宇都宮市で集めた資料をコレクションに加えた。その総数は11点。ただし、1926年から1927年にかけて集めた「鈴木」（名なし）収集の資料6点も鈴木醇が集めた可能性が高い。

----- 執筆者：木村裕樹

● 鈴木二郎（1916-2008）

すずき・じろう

【事績】

社会人類学者。先住民や被差別部落、在日朝鮮人などのマイノリティ研究に貢献した。東京都生まれ。早稲田大学文学部を卒業後、1943年に文部省民族研究所の研究員となり、オーストラリア原住民研究を担当した。調査先の満洲で敗戦を迎え、八路軍で対日本人工作に従事したのち帰国する。早稲田大学や明治大学などの講師を経て東京都立大学教授となった。退職後は、東京造形大学学長や創価大学教授などを務めた。（無署名 1980; 1997; 有馬 1982）

【著作】

鈴木二郎『未開人の社会組織』世界書院、1950年。

鈴木二郎『人種と偏見』紀伊国屋書店、1969年。

マンハイム（著）鈴木二郎（訳）『イデオロギーとユートピア』未来社、1968年。

【コレクションとの関係】

1959年にマレーシア国パハン州で集めた資料15点をコレクションに加えた。

----- 執筆者：菊地暁

● 須田昭義（1900-1990）

すだ・あきよし

【事績】

自然人類学者。旧姓は大島。東京帝国大学理学部動物学科を卒業後、1927年に大学院に進学し、松村瞭の指導のもと人類学を専攻、翌年に助手となった。1932年に結婚して夫人の苗字に改姓した。1936年に講師、44年に助教授、57年に教授となり、1960年に定年退職するまで、一貫して東京大学理学部人類学教室で教鞭をとった。また、日本人類学会会長も務めた。戦前、日本帝国版図内に居住する諸民族の指紋や生体の計測に取り組み、戦後はスポーツ選手の体格測定や、エリザベス・サンダース・ホームなどの「混血児」の生体計測などもおこなった。（山口 1990; 山口編 2005）

【著作】

松村瞭・大島昭義『人類及び人種』岩波書店、1931年。

須田昭義（編）『人類学読本』みすず書房、1963年。

【コレクションとの関係】

1943年10月1日に集めたアイヌの祭具や、1952年から1960年にかけて北海道や岐阜県などで集めた民具をコレクションに加えた。その総数は30点近い。

----- 執筆者：坂野徹

● 関敬吾（1899-1990）

せき・けいご

【事績】

民俗学者。昔話研究、民俗学方法論の分野で活躍。長崎県南高来郡小浜村富津（現 雲仙市）の網元の生まれ。家業を継ぐべく長崎水産講習所に学ぶも学問への熱意を抑えられず上京し、東洋大学を卒業。柳田国男に師事し、『島原半島民話集』（建設社、1935年）を編集。フィンランドの民俗学者クローンの『民俗学方法論』（岩波文庫、1940年）を翻訳し、

柳田と共著で『日本民俗学入門』（改造社、1942年）を執筆するなど、民俗学の方法論的發展に貢献した。また、昔話資料の体系的整理に尽力し、独力で編纂した『日本昔話集成（全6巻）』（1950-1958年）、『日本昔話大成（全12巻）』（1970-1980年）は日本昔話研究に必須のコーパスとなる。占領中にCIE(民間情報教育局)に勤務し、人類学者とともに日本の農村社会研究に従事。九学会連合奄美大島共同調査（1955-1959年）で調査団長を、1966年～1967年に日本民族学会長を務めるなど、民族学・人類学との共同作業においても活躍した。長兄 衛は画家で芸術教育研究者、次兄 寛之は児童心理研究者。（高木 1987）

【著作】

関敬吾『関敬吾著作集（全9巻）』同朋舎、1980-1982年。

【コレクションとの関係】

1951年から1955年にかけて奄美群島各地で集めた資料のほか、兵庫県、長崎県、青森県で集めたものもコレクションに加えている。資料点数は、合わせて20点ならず。

----- 執筆者：菊地暁

● 染木煦（1900-1988）

そめき・あつし

【事績】

洋画家、民具研究家。1927年に東京美術学校（現 東京藝術大学）西洋画科を卒業後、満洲国にわたり南満洲鉄道の嘱託となった。1934年にミクロネシアを長期旅行し、サタワル島で土方久功と出会う。その際に集めた民具や現地風俗は『ミクロネシアの風土と民具』にまとめられている。また、1939年に満洲から北支にかけて旅行し、『北支民具探訪日記』を著した。1942年には、資源科学諸学会連盟が組織した山西学術調査研究団に絵画班として参加し、学士院蒙疆調査団にも参加した。戦後は画家としての活動に重点を置き、中南米やシルクロードでの取材にもとづく作品も残している。（染木 2008; 角南 2008）

【著作】

染木煦『北支民具探訪日記』座右宝刊行会、1941年。

染木煦『ミクロネシアの風土と民具』彰考書院、1945年。

【コレクションとの関係】

1929年から1934年にかけてミクロネシア各地や蘭領ニューギニア（現 インドネシア共和

国イリアンジャヤ）で集めた資料をコレクションに加えた。その数は約450点にのぼる。

----- 執筆者：坂野徹

● 高木一夫（1903-1979）

たかぎ・かずお

【事績】

編集者、歌人。雑誌記者の経験を市川信次と五十沢二郎に評価されたことが縁で、1935年1月より、渋沢敬三が主宰したアチックミュージアムの出版活動に従事した。また、『渋沢栄一伝記資料』ならびに『渋沢敬三』の伝記編纂にも大きな役割を果たした。一方、歌人として1929年に自身の歌集『栗生短歌集』を刊行し、1937年4月には自身が編集兼発行人となって短歌雑誌『博物』を創刊した。（横浜市歴史博物館・神奈川大学日本常民文化研究所編 2002; 高木 1972; 羽毛田 2015b）

【著作】

高木一夫『栗生短歌集』独立人の会、1929年。

【コレクションとの関係】

茨城県水戸市や神奈川県三浦郡南下浦郡菊名、長野県南安曇郡烏川村、静岡県榛原村上川根村および志太郡静原村、朝鮮半島で集めた足半や草履など8点をコレクションに加えた。

----- 執筆者：木村裕樹

● 高野進芳（1904-?）

たかの・のぶよし

【事績】

日本民族学会員。1960年代から70年代にかけての研究大会で、さかんに農耕儀礼についての研究発表をおこなった。生年から考えて、この時期には仕事の一線を退いて研究生活に入っていたと考えられるが、壮年時の活動については不明。仏教民俗学会誌『佛教と民俗』には、1950年代から寄稿がある。日本民族学会誌『民族学研究』に掲載された1970年5月の発表要旨によると、所属は「民俗資料研究所」。郷土研究や民俗研究のみならず、考古資料の収集もおこなっており、居住していた東京都練馬区の教育委員会に自身のコレクションを寄贈した。（練馬区教育委員会生涯学習課文化財係 1997）

【著作】

高野進芳（編）『武蔵国多摩郡江古田村名主文書—土地年貢関係』堀野家、1968年。

高野進芳「豊穰儀礼と女性」『民族学研究』35(3): 224-225、1970年。

高野進芳・宮本延人『東大和市生活文化財調査概要報告書』東大和市教育委員会、1971年。

【コレクションとの関係】

1955年に、居住していたと思われる練馬区で集めた藁のウマをコレクションに加えている。

----- 執筆者：飯田卓

● 高橋哲雄（1906-?）

たかはし・てつお

【事績】

実業家、広島民俗学同好会会員、スポーツ選手。広島高等師範学校附属中学校を卒業後、神戸高等商業学校へと進み、1928年に同校を卒業した。広島農工銀行に就職し、設立されたばかりの大日本排球協会（現日本バレーボール協会）に働きかけ、中国支部広島県協会を発足させた。広島を訪れた渋沢敬三を麻の産地まで案内したのは、この頃と推測される。1947年に関西茶業を設立して社長に就任した。1960年にリオデジャネイロで開かれたバレーボール世界選手権では、日本選手団の団長として参加した。（人事興信所 1993; 『アチックマンズリー』）

【コレクションとの関係】

1934年から1936年にかけて、広島県や山口県で集めた民具など約30点をコレクションに加えた。資料管理原簿を見ると、1936年に受け入れた分の登録日は9月9日となっており（1点だけ遅れて届いたものがあるが、登録日の記述はない）、これらが東京に届いたことは10月1日発行の『アチックマンズリー』で報告されている（遅れて届いた分も次の号で報告されている）。到着日の記載は見あたらないが、少なくともこの時期は、資料登録がなされるとただちに『アチックマンズリー』で報告されていたことがわかる。

----- 執筆者：飯田卓

● 高橋文太郎（1903-1948）

たかはし・ぶんたろう

【事績】

民俗学者。東京府北多摩郡保谷村（現 西東京市）の大地主の家に生まれる。1927年に明治大学政治経済学部を卒業後、立教大学哲学科に進学するも家庭の事情で退学。父 源太郎が取締役を務めていた武蔵野鉄道株式会社の重役に就任した。1934年に同社を退職するまで、その事業の中枢をになった。明治大学在学時より山岳部で活躍し、卒業後もOBとして後進の育成につとめ、日本山岳会にも関与した。このような高橋の研究関心は、もっぱら山の民俗に向けられた。他方、高橋が提示した運搬具の採集視点や分類案は、民具研究における方法論の先駆とみなせる。

渋沢敬三が主宰したアチックミュージアムに高橋が関わるようになるのは、「アチック来訪者芳名簿」によると1929年からである。以来、アチックの中心的メンバーとして活動した。1933年に最初の単行本となる『山と民俗』を刊行し、序文を寄せた渋沢敬三は、高橋の人物像を「武蔵野に萌える櫛」にたとえ、「極めて謙虚に、素直に、あせらず、偏狭でなく、妙な競争心なく、而も事象については驚くべき正確さを以って認識する」と評している。

1936年に国立の民族学博物館を保谷に設立しようと尽力し、敷地を提供したがうまくゆかず、1937年、同地に開設された日本民族学会附属民族学研究所の所員となった。しかし1940年に家庭の事情を理由に敷地寄付を撤回、所員を辞して研究から遠ざかっていった。

2007年に保谷の住民有志を中心に高橋文太郎の軌跡を学ぶ会が発足し、業績の再評価が進められつつある。寄付の撤回についても、すべての土地を高橋が引き上げたわけではないことが証明された。また近年では、「民具」という語の初出が高橋の「奄美十島及大島に於る民具」（1934年の『旅と伝説』に掲載）である可能性が指摘されている。（高橋 1934；磯貝 1959；宮本馨太郎 1963；伊藤 1987；木下 1989；中村 1992；横浜市歴史博物館・神奈川大学日本常民文化研究所編 2002；西東京市・高橋文太郎の軌跡を学ぶ会編 2008；2010；小島 2015；『アチックマンスリー』）

【著作】

高橋文太郎『山と民俗』山と溪谷社、1933年。

高橋文太郎『武蔵保谷村郷土資料（アチックミュージアム彙報 第5）』アチックミュージアム、1935年。

高橋文太郎『秋田マタギ資料（アチックミュージアムノート 第12）』アチックミュージアム、1937年。

高橋文太郎『山の人達』龍星閣、1938年。

高橋文太郎『輪櫛（わかんじき）（日本常民文化研究所ノート 第24）』日本常民文化研究

所、1942年。

高橋文太郎『山と人と生活』金星堂、1943年。

【コレクションとの関係】

1929年から1939年にかけて東京、群馬、鹿児島、岐阜、秋田、新潟、福島の各地で90点近くの民具を収集した。保谷を中心とする北多摩の信仰用具、岐阜県高山町の生活用具、秋田県のマタギ用具、福島県と新潟県の木地屋用具などが比較的まとまっている。全般的に体系的な収集がなされており、コレクションと著作との対応関係が明確である。

----- 執筆者：木村裕樹

● 高橋孫右衛門 (?-?)

たかはし・まごえもん

【事績】

東京府北多摩郡保谷村下保谷字新田（現 西東京市）の住民。1935年に高橋文太郎が『武蔵保谷村郷土資料』の調査をおこなった折に話者として協力した。同書には、高橋家の間取図や、節分に挿す柵や囲炉裏の写真が掲載されている。なお、日本民族学会に博物館建設のための土地を提供した高橋文太郎の家（屋号ゲンゾウ）は、高橋孫右衛門家（屋号マゴエモン）の分家。（高橋 1935; 西東京市・高橋文太郎の軌跡を学ぶ会編 2008）

【コレクションとの関係】

下保谷で収集した富岡稲荷大明神の初午幟や麦打ちに使用する唐竿、牛の草鞋など、資料4点をコレクションに加えた。採集年は1955年と1960年。

----- 執筆者：木村裕樹

● 高畑新之助 (?-?)

たかはた・しんのすけ

【事績】

詳細は不明だが、アチックミュージアムが刊行した『民具問答集』において、群馬県の履物（アシナカ）について解説をしている。『民具問答集』は、民具1点1点の製作法や用法、現地での名称や由来、伝承などを使用地の人たちに尋ね、得られた情報をまとめたもの。（アチックミュージアム編 1937）

【コレクションとの関係】

1934年2月に群馬県邑楽郡館林町や静岡県駿東郡で集めた履物数点をコレクションに加えた。ただし、『民具問答集』に掲載されているものとは異なる。『民具問答集』の記事に付されていた番号を手がかりにすると、『民具問答集』の資料の採集者は黒田清良である。

----- 執筆者：飯田卓

● 高嶺道隆（?-?）

たかみね・みちたか／どうりゅう

【事績】

新潟県中頸城郡桑取谷（現 上越市）の洞泉寺住職。桑取谷には、渋沢敬三や早川孝太郎らアチックミュージアムの同人がくり返し調査をおこなっており、継続的な連絡があったものと思われる。（浜谷 1971）

【コレクションとの関係】

1933年2月から3月にかけて、新潟県中頸城郡桑取村（桑取谷）の民具数点をコレクションに加えた。

----- 執筆者：小林光一郎

● 滝川太郎（1903-1970）

たきがわ・たろう

【事績】

絵画鑑定家、画家。長野県松本市生まれ。洋画家 石井柏亭に師事すると同時に太平洋画会研究所でも絵画を学んだ。1930年にフランスへ渡って画商を営むようになったが、一水会会員としても作品を発表しつづけた。1960年に脳溢血を起こしてから右手が不自由となったが、左手で絵筆をとり、没年まで創作を続けた。（東京国立文化財研究所編 1973）

【コレクションとの関係】

1930年に長野県松本市で集めた押絵雛人形約10点と砥石入れをコレクションに加えた。

----- 執筆者：飯田卓

● 瀧波善雅 (1904-?)

たきなみ・よしまさ

【事績】

福井師範学校に学んだ後、神学の伝道者となることを期すも、北大路魯山人の招きで1933年に上京。1936年まで星岡茶寮に就職して雑誌『星岡』の編集に従事した。1937年3月、渋沢敬三が主宰したアチックミュージアムに入所し、編集業務に携わった。(興津 2002; 『アチックマンズリー』)

【著作】

瀧波善雅「魯山人と渡辺一伸の作陶」『陶説』168: 32-35、1967年。

【コレクションとの関係】

1937年に福井県丹生郡荻野村で集めた民具をコレクションに加えた。

----- 執筆者：永井美穂

● 武井武雄 (1914-1983)

たけい・たけお

【事績】

童画画家、郷土玩具研究家。長野県出身。東京美術学校西洋画科卒業。今日の郷土玩具辞典の原形といえる『日本郷土玩具』を刊行し、全国的な視野に立った郷土玩具の総覧を作成したことで知られる。また、大正期の代表的な子ども向け雑誌『コドモノクニ』などに童画を発表して普及をはかり、戦後も多くの絵本を出版した。(加藤 2011)

【著作】

武井武雄『童話集 お凧の卵』目白書房、1923年。

武井武雄『武井武雄画凧 (1~3)』丸善、1927年。

武井武雄『日本郷土玩具 (東の部・西の部)』地平社書房、1930年。

武井武雄『本とその周辺』中央公論社、1960年。

武井武雄『武井武雄童画集』盛光社、1967年。

武井武雄『武井武雄作品集 (I~III)』筑摩書房、1974年。

【コレクションとの関係】

1928年1月から2月にかけて、主として中部地方で集めた玩具24点をコレクションに加えた。保谷民博コレクションの前身であるアチックミュージアムコレクションが、まずは玩具を核として形成されてきたようすがわかる。

----- 執筆者：加藤幸治

● 竹内孝一（?-?）

たけうち・こういち

【事績】

実業家。第一銀行名古屋支店に勤務した。徳富蘇峰記念館が公開している書簡データベースによると、蘇峰宛てに書簡を一通差し出している。内容は未確認だが、渋沢敬三は1926年に第一銀行取締役となったため竹内と面識があった可能性が高く、名古屋支店員である竹内に資料を集めてもらったと考えて辻褄が合う。

【著作】

【コレクションとの関係】

1929年に愛知県名古屋市で集めた人形や玩具3点をコレクションに加えた。

----- 執筆者：飯田卓

● 竹内利美（1909-2001）

たけうち・としみ

【事績】

村落社会研究者、民俗学者。長野市出身。1930年に伊那富小学校に赴任し、1932年に郷土研究の雑誌『落原』を出す。小学校教員の立場を活かし、生徒を対象としたムラ生活の調査を重ね、村落生活の全容の解明にむけた研究をおこなった。1933年に川島村の小学校に転勤。同年8月、伊那富出身の社会学者 有賀喜左衛門の口添えで上京し、自筆のガリ版刷り原稿を渋沢敬三へ届けたところ、この原稿が『小学生の調べたる上伊那川島村郷土誌』として出版されることになった。出版の打合せにおいて渋沢は、『川島村郷土誌』の長所を「民俗学にはじめて数字と物の形がはいったね」と表現して、竹内に伝えている。1940年4月から本格的にアチックミュージアムの活動に参加。1941年に國學院大學国史科を卒業

した後、中央水産業会勤務、連合軍総司令部（GHQ）民間情報教育局（CIE）世論及社会調査部顧問を経て、東北大学教授となった。（柏竈社 1940; 渋沢敬三伝記編纂刊行会編 1979; 青木陸編 2008）

【著作】

竹内利美『小学生の調べたる上伊那川島村郷土誌（アチックミュージアム彙報 第2）』アチックミュージアム、1934年。

竹内利美（編）『家族慣行と家制度』恒星社厚生閣、1969年。

竹内利美『日本の民俗4 宮城』第一法規出版、1974年。

【コレクションとの関係】

1930年代初めから半ばにかけて、主として長野県で収集した民具をコレクションに加えた。長野県は竹内の故郷であると同時に調査地でもあったため、『川島村郷土誌』を刊行したアチックミュージアムのために資料を寄贈したと考えられる。

----- 執筆者：小林光一郎

● 太刀川総司郎（?-1944）

たちかわ・そうじろう

【事績】

郷土史家。神奈川県豊島小学校で音楽専科教員および本科正教員を務めた。遺稿集を編んだ赤星直忠は、同じく豊島小学校の教員。郷土史にまつわる情報を2人で交換しあい、民俗関係は太刀川、考古関係は赤星が発表するという分担をおこなった。ただし、太刀川が生前に発表した論文はそれほど多くない。1940年代に太刀川が『神奈川文化』へ寄せた報告は、亡くなった息子 太刀川健一の名で書かれている

【著作】

太刀川総司郎「三浦三崎の「でつと」その他」『民俗学』5(10): 55-62、1933年。

太刀川総司郎『郷土教育的に視たる三浦半島史』横須賀書籍共立社、1940年。

太刀川総司郎（著）赤星直忠（編）『三浦耳袋—太刀川総司郎氏遺稿集（全2冊）』神奈川県教育委員会、1972-1973年。

【コレクションとの関係】

1933年と1934年に神奈川県三浦郡葉山町山口で集めた資料をコレクションに加えた。

----- 執筆者：飯田卓

● 田中阿歌麿（1869-1944）

たなか・あかまる

【事績】

湖沼学者。東京出身。文部大輔や司法卿などを務めた田中不二麿の長男で、地理学者 田中薫の父。ベルギーのブリュッセル自由大学で地理学を学んで帰国した後、日本各地で湖沼の湖盆形態と水温の調査を実施した。また、専修大学や中央大学、早稲田大学、京都大学などで教鞭をとった。1931年に日本陸水学会を設立し、初代会長となった。（上田・西沢・平山・三浦監修 2015）

【著作】

田中阿歌麿『湖沼の研究』新潮社、1911年。

田中阿歌麿『日本北アルプス湖沼の研究』信濃教育会北安曇野部会、1930年。

【コレクションとの関係】

日本各地のほかインドネシアやニューギニア、ヨーロッパ、中国、台湾などで集めた資料150点近くをコレクションに加えた。年代は不明のものが多いが、1945年に収められたものの多くはインドネシアやニューギニアで集められている。この年は田中阿歌麿の没年の翌年なので、他の資料も含めて、阿歌麿の遺品を息子の薫が保谷民博に寄贈した可能性が高い。そのためであろう、大部分の資料の「採集地」「採集期」が不明であるいっぽう、共通して「採集者 田中阿歌麿」「寄附者 田中馨」となっている。

----- 執筆者：木村裕樹

● 田中梅治（1868-1940）

たなか・うめじ

【事績】

島根県の農業者。その農業体験は『粒々辛苦・流汗一滴』の一書として刊行された。民俗学者 宮本常一の『忘れられた日本人』に、その元原稿とおぼしき手記のことが次のように

紹介されている。「田中翁の名を知ったのは昭和14年の春であるとおぼえている。栗山一夫君から、「こういう記録があるのだが」といって示されたのが、毛筆で、しかもきわめて達筆で罫紙にかかれた『粒々辛苦』と題した島根県邑智郡地方の稲作の語彙である。(中略)そして栗山君にどういう人かきいてみたのであるが、島根山中の老農だとだけわかった。その頃フォクロアでも稲作習俗一つについて、これほど綿密な調査をしたものはなかった」。なお、同書には、森脇太一が郷土誌を執筆するうえで田中が協力したことも書かれている。(森脇編 1937; 宮本常一 1971)

【著作】

田中梅治『粒々辛苦・流汗一滴―島根県邑智郡田所村農作覚書（アチックミュージアム彙報 第48）』アチックミュージアム、1941年。

【コレクションとの関係】

1940年5月17日に、島根県邑智郡田所村で集めた40点近い資料をコレクションに加えた。

----- 執筆者：飯田卓

●田中薫（1898-1982）

たなか・かおる

【事績】

地理学者。東京市小石川区（現 東京都文京区）生まれ。渋沢敬三が主宰したアチックミュージアム（アチック・ミュージアム・ソサエティ）の活動初期の同人。「A・M・S」日誌によると、本郷「鉢の木」で開かれた第1回集会（1921年2月2日開催）に出席。渋沢がイギリス駐在を終えて帰国した直後の復興第1回例会（1925年12月4日開催）を機にアチックミュージアムがとり組んだ「チームワークとしての玩具研究」では、履物を担当した。東京帝国大学理学部を卒業後、同大学法学部でも学んだのち、1926年に東京商科大学予科講師となった。神戸高等商業学校や神戸商業大学、神戸経済大学、神戸大学、成城大学、田中千代学園短期大学などでも教鞭をとった。夫人は服飾デザイナーの田中千代。千代の民族衣服コレクションは、国立民族学博物館に保管されている。（石光 1983; 渋沢 1992b; 横浜市歴史博物館・神奈川大学日本常民文化研究所編 2002; 『アチックマンスリー』）

【著作】

田中薫『工業地理』岩波書店、1934年。

田中薫『台湾の山と蕃人』古今書院、1937年。

田中薫『氷河の山旅』朋文堂、1943年。

【コレクションとの関係】

1927年に神奈川県横浜市と静岡県田方郡熱海町で集めた人形を、1929年にイギリスで集めたイースターエッグを加えた。採集年がわからないものを含め、資料数は5点。アチックミュージアムの初期から渋沢敬三と交流していたわりには、資料点数が少ないように思える。これは、田中薫が集めた資料に「田中」とだけ記されており、他の田中と区別できないためであろう。ちなみに、「田中」とだけ書かれた資料は1点を除き採集年が判明しており、1905年が2点、1925年が3点、1926年が26点、1927年が3点である。

----- 執筆者：木村裕樹

● 田中喜多美（1900-1990）

たなか・きたみ

【事績】

民俗学者、郷土史家。岩手県岩手郡雫石村下久保（現 雫石町）に田中家の三男として生まれる。家の事情で雫石小学校高等科を1年で退学、農業手伝いのかたわら独学で民俗学を学んだ。1926年頃より『岩手日報』や『旅と伝説』などに投稿を開始。1933年に柳田国男が序文を寄せた『山村民俗誌』で雫石地方を紹介、民俗学者として一躍世に知られるようになる。また同じ年、雫石をたずねた渋沢敬三は、田中が蕁香製作をおこなう様子を16ミリフィルムに撮影している。1935年に岩手県教育会に就職。1940年に岩手県庁に転じて『岩手県史』の編纂に従事する。岩手県文化財審議会委員や雫石町文化財調査委員などの委嘱を受け、文化財保護に寄与する一方、奥羽史談会会長として後進の指導にもつとめた。没後、田中の蔵書や民俗資料等は雫石町に寄贈され、田中喜多美文庫として活用されている。（アチックミュージアム編 1937；雫石町立図書館 1992；宮本・佐野・北村・原田・岡田・高城編 2016）

【著作】

田中喜多美『山の民俗』日本民俗研究会、1930年。

田中喜多美『山村民俗誌—山の生活篇』一誠社、1933年。

田中喜多美『岩手の農業の歴史』岩手県農業普及会、1949年。

田中喜多美『田中喜多美著作集』角川書店、1987年。

【コレクションとの関係】

1933年から1934年にかけて岩手県雫石で集めた100点近くの資料をコレクションに加えた。また、アチックミュージアムから刊行された『民具問答集』においても、ワラシナゴキ、ネウチツツ、ハウチ、田ノ神、コシビリ、タスキなど雫石の民具6点について回答している。回答期は1933年と1934年。『民具問答集』は、民具1点1点の製作法や用法、現地での名称や由来、伝承などを使用地の人たちに尋ね、得られた情報をまとめたもの。

----- 執筆者：木村裕樹

●田中銀蔵（?-?）

たなか・ぎんぞう

【事績】

1882年時点で、第九十三銀行出張所の役職者。（渋沢青淵記念財団竜門社編 1959）

【コレクションとの関係】

1934年に青森三戸郡階上村で集めた履物をコレクションに加えた。

----- 執筆者：加藤幸治

●田中豊（1888-1964）

たなか・ゆたか

【事績】

1960年に鹿児島県宇検村田検の渡武彦が高倉を保谷民博に寄贈した際、移築に関わった大工の棟梁。高倉の寄贈は、1955年に九学会連合が行った奄美群島学術調査が縁となって実現した。田中が採集した斧に結びつけられていた付札の備考欄には、「製作地、鹿児島県大島郡宇検村田検。木工あるいは薪割りに使用。大正10年頃製作（鍛冶屋故西山氏作）後、現在まで使用。高倉移築の際（昭和35.2.2より）「はしご」その他に使用した」とある。「田中」「西山」いずれの姓も田検集落にあるため、田中も田検出身かと思われる。（八幡編 1960; 高元 2016）

【コレクションとの関係】

採集者としては鹿児島県の斧をコレクションに加えたただけだが、寄附者としては多数の貨幣および紙幣、鹿児島県で使用された鍵を寄贈している（本データベースでは、採集者と

なっている資料のみを表示)。貨幣などは1961年に採集されているが、同姓同名の別人が寄贈した可能性もある。斧と鍵はいずれも奄美大島の高倉に関わるもの。斧については、資料管理原簿の備考欄に「使用年代、大正10年頃から昭三五・四月まで大工あるいは薪割りに使う。このナタウンは昭三五・二・二からの奄美大島の高倉移築の折使用したもの。」という記述がある。現役で用いられていた斧を譲り受け、1960年に保谷民博の敷地に奄美大島の高倉を移築するさい、奄美大島で用いられていたときと同じように使用されたものだとわかる。

----- 執筆者：小島摩文

●田辺主計（1895-1989）

たなべ・かずえ

【事績】

日本山岳会会員。1918年に同志社大学英文科卒業後、三井銀行に勤務し、本務のかたわら登山関係の洋書を多数翻訳した。父は、琵琶湖疏水を開削したことで有名な土木技術者、田辺朔郎。養父は、朔郎の弟で岩倉遣欧使節団に随行した外交官、田辺太一。（南川 2015）

【著作】

ケニス・メイスン（著）田辺主計・望月達夫（訳）『ヒマラヤ―その探検と登山の歴史』白水社、1975年。

ジョン・ハント（著）田辺主計・望月達夫（訳）『エベレスト登頂（世界探検全集15）』河出書房新社、1977年。

【コレクションとの関係】

1959年にインドのダージリンで集めたチベット帽をコレクションに加えた。ヒマラヤ登山に行ったときのものか。この年、チベット動乱は最高潮に達しており、予想外の収穫として博物館に寄贈した可能性が考えられる。

----- 執筆者：飯田卓

●田原久 (1912-?)

たはら・ひさし

【事績】

文部官僚。徳島県生まれ。早稲田大学文学部国文科を卒業後、文化財保護委員会（のちの文化庁）に勤めた。文化財保護法の施行（1950年）とともに始まった民俗資料保護の実務を、宮本馨太郎や祝宮静らとともに担ったことが特筆される。（田原 1985）

【著作】

田原久（編）『日本の美術58 民具』至文堂、1971年。

田原久「かまどといろり」宮本馨太郎（編）『講座 日本の民俗4 衣・食・住』172-192ページ、有精堂出版、1979年。

【コレクションとの関係】

1954年11月に徳島県や岐阜県で集めた資料をコレクションに加えた。

----- 執筆者：菊地暁

●玉岡松一郎 (1913-1995)

たまおか・まついちろう

【事績】

郷土史家、歌人。兵庫県加古川市寺家町の呉服卸商家の生まれ。姫路高校を卒業後、京都帝国大学経済学部に進み、京都帝国大学民俗学会に参加。学生時代から方言、民俗の採訪を始め、卒業後は太田陸郎らの兵庫県民俗研究会に参加、のち、関西民俗学団体の大同団結により設立された近畿民俗学会にも参加した。終生、郷土史研究に尽力。俳句、短歌、詩にも親しみ、姫路文学会の創設に参加、長きにわたって同会をリードした。（岩坂編 1983；玉岡松一郎先生古稀記念論集刊行会編 1984）

【著作】

玉岡松一郎『淡路方言資料』兵庫県民俗研究会、1933年。

玉岡松一郎（編）『播磨の伝説』第一法規出版、1975年。

玉岡松一郎（編）『写真集明治大正昭和加古川—ふるさとの思い出135』国書刊行会、1980年。

【コレクションとの関係】

1936年に兵庫県作用郡石井村で集めた魚型の自在鉤をコレクションに加えている。

----- 執筆者：菊地暁

●田村浩（?-?）

たむら・ひろし

【事績】

大正から昭和に活躍した沖縄研究者。渋沢敬三らが沖縄を訪問した時に沖縄県殖産課長をつとめていた。（渋沢敬三先生景仰録編集委員会編 1965）

【著作】

田村浩『琉球共産村落之研究』岡書院、1927年。

田村浩『農村経済の正視』日本青年館、1933年。

田村浩『米問題と郷倉』日本青年館、1935年。

【コレクションとの関係】

1927年11月に秋田鹿角郡大湯村や岩手県盛岡市で集めた玩具をコレクションに加えた。

----- 執筆者：加藤幸治

●田村正徳（?-?）

たむら・まさのり

【事績】

周防大島の郷土史家。民間説話の採集に努め、そのいくつかは宮本常一の『周防大島昔話集』で紹介されている。同書によると、田村は宮本の「隣家」と記されており、近所で親しくしたらしい。宮本の『周防大島民俗誌』では、周防大島の昔の食事のことを島の人たちが座談会形式で語っているが、そこに参加している「田村刀自」は田村正徳の妻である可能性がある。（宮本常一 1985; 1997）

【コレクションとの関係】

1937年4月26日に山口県大島郡家室西方村西方で集めた民具約80点をコレクションに加えた。

----- 執筆者：飯田卓

● 丹田昭一郎 (???)

たんだ・しょういちろう

【事績】

新潟県岩船郡三面村（現 朝日村）布部の人。1936年11月に渋沢敬三らが村上・三面地方の調査に訪れたさいには、大瀧新蔵や山貝如松らとともに一行を受け入れ、自宅に招いて民具に関する情報提供をおこなった。ただし、丹田が東京の人たちと交流したのはこれが初めてではなく、渋沢が主宰したアチックミュージアムを丹田は同年10月に訪れている。三面調査の段取りをしていたのかもしれない。（『アチックマンスリー』）

【コレクションとの関係】

1935年6月29日に新潟県岩船郡三面村布部の民具を若干数コレクションに加えた。

----- 執筆者：卯田宗平、飯田卓

● 丹田二郎 (1914-1954)

たんだ・じろう

【事績】

医師。1935年に高志路会に参加し、アチックミュージアムを主宰していた渋沢敬三と知り合う。その後、出身地の三面村をアチックミュージアムが調査した縁もあって、1938年に『越後三面村布部郷土誌』をアチックミュージアムから刊行。1939年に東京帝国大学臨時附属医学専門部に入学し医学を専攻、渋沢の学友としてアチックミュージアムに参加した宮本璋と知り合う。1943年より東京市立駒込病院に勤務し、同病院へはアチックミュージアムより通った。1946年、三面村大字新屋に医院を開業した。1954年に早世した丹田のため、渋沢は追悼録『音容猶在』の編者を務め、巻末に「あとがき」として一文を寄せている（「昭和三十五年九月一日」付）。（池田 2013）

【著作】

丹田二郎『越後三面村布部郷土誌（アチックミュージアム彙報 第22）』アチックミュージアム、1938年。

【コレクションとの関係】

三面村で集めた履物などをコレクションに加えている。

----- 執筆者：小林光一郎

● 崔應錫（1910? -1998）

チェ・ウンソク

【事績】

平壤出身。第一高等学校において姜廷澤の3年後輩で、姜廷澤とともに、渋沢敬三の財政支援で一高と東京帝国大学医学部を卒業。終戦後にはソウルに戻り、京城大学医学部助教授としてしばらく在職したが、朝鮮戦争が始まるや平壤に帰り、金日成総合大学副学長、初代付属病院長を歴任。1998年4月に死亡。北朝鮮政権で医療系の最高位指導者であり、教授、博士、人民医師の栄誉をえた。（朝鮮農村社会衛生調査会編 1940）

【コレクションとの関係】

1936年夏の蔚山達里農村衛生調査を主導した。達里は、第一高等学校の先輩である姜廷澤の故郷のムラであり、当時姜廷澤は達里に滞在しながら農村経済調査をしていた。崔應錫は、医学部卒業のため求められる現場調査のため、このムラを選んだようである。農村衛生調査の最中に、渋沢敬三が派遣したアチックの調査員3名を通して、蔚山コレクションが収集された。

----- 執筆者：朝倉敏夫

● 張甲特（?-?）

チャン・カプトック

【事績】

熊本第五高等学校卒業（1931年度卒業生）、東京帝国大学農学部卒業（1934年度卒業生）。朝鮮からの留学生として、自彊会から支援を受けていた。自彊会は、渋沢栄一や阪谷芳郎、建設業界などの賛助の下、朝鮮の天道教組織が基盤となり、朝鮮人留学生を「支援」した

団体であり、寄宿舎運営、学費支援、苦学生の仕事と卒業後の就職先斡旋をおこなった。
(自彊会 1935; 宮本馨太郎 1953; 裴 2010)

【コレクションとの関係】

日本に留学中の1931年から1932年にかけて、慶尚北道 漆谷郡 石積面 中洞で集めた資料を多数収めている。また、日本民族学協会附属博物館の彙報として刊行された宮本馨太郎『本邦在来鎌の調査研究』に「99 標6350 鎌 朝鮮京城社稷洞 張甲特」「100 標6351 鎌
〃〃〃 〃」「101 標2994 Nat 〃慶尚北道漆谷郡石積面 張甲特」として名前が出ている。Natは韓国語で鎌の意味。

----- 執筆者：朝倉敏夫

●長重九 (1908-?)

ちょう・じゅうきゅう

【事績】

稲作専門技師。1932年に京都帝国大学農学部を卒業。1957年から1958年にかけて、日本民族学協会が派遣した東南アジア稲作民族文化総合調査団(第1次)に農学班員として参加した。このときの所属は農林省農林技術研究所。1959年には稲作技術協力のためキューバに渡航した。1962年の著書の著者紹介には、農業技術研究所のほか、フィリピン マニラの国際稲研究所に所属していると記されている。(浅井ほか 1959; 東南アジア稲作民族文化総合調査団編 1959)

【著作】

長重九「タイ国稲作概観」『民族学研究』23 (1-2): 44-53、1959年。

長重九『キューバの日本技師』朝日新聞社、1962年。

Jukyu Cho and Hideo Kuriyama 1965 Cultivated Rice Plants in the Basin of Mekong River.

In Nobuhiro Matsumoto (ed.) *Indo-Chinese Studies: Synthetic Research of the Culture of Rice-Cultivating Races in Southeast Asian Countries (I)*, pp.587-638, Yokohama: Yurindo Publishing Company.

【コレクションとの関係】

1957年10月7日にタイ国で集めた弩(いしゆみ)をコレクションに加えた。共同採集者は岩田慶治で、日本民族学協会が第1次稲作民族文化総合調査団を派遣したさいに集めたもの。

----- 執筆者：飯田卓

● 長曾我部木人（?-?）

ちょうそかべ・ほくじん

【事績】

早稲田大学早稲田高等学院の教員、書誌学者。1935年11月9日、渋沢敬三が主宰していたアチックミュージアムを訪問したと『アチックマンズリー』に記されている。同行者は、同じく同校の教員だった近藤潤治郎と学生13名。そうした者たちを受け入れた理由として、近藤潤治郎が近藤勘治郎の弟だった可能性が考えられる。勘治郎（1882-1949）は銀行家で考古学者、新潟の民具をコレクションに加えた。潤治郎（1885-1955）は中国文学を専攻し、戦後は早稲田大学の教員となった。ともに新潟県三島郡関原村（現 長岡市）の出身。長曾我部木人の詳しい事績は不明だが、書誌学の分野で研究業績がある。また、1971年より天満堂書店が刊行した雑誌『篆刻』の責任監修を務めた。（日外アソシエーツ編 2004; 『アチックマンズリー』）

【著作】

長曾我部木人「杜澂の印譜」『書物展望』9(1): 35-41、1939年。

長曾我部木人「初期蔵書印」『全国古書籍商組合連合会機関誌』5(8): 4-6、1951年。

【コレクションとの関係】

1929年と1930年に朝鮮で採集した2点の資料を1935年にコレクション登録した。1935年のアチックミュージアム訪問は、資料を持参して寄贈することが目的だった可能性がある。

----- 執筆者：飯田卓

● 知里真志保（1909-1961）

ちり・ましほ

【事績】

北海道幌別郡登別村（現 登別市）出身の言語学者。才能を見込んだ金田一京助に招かれて上京し、旧制第一高等学校から1933年に東京帝国大学文学部に入学、1937年に卒業した。1938年に三省堂勤務、1940年に樺太庁立豊原高等女学校の教師となり、樺太庁博物館の調査研究にも携わった。1943年に北海道大学北方文化研究室嘱託、1949年に同大専任講師、1954年に博士号取得、1958年に同大文学部教授となる。アイヌ語やアイヌ文化の研究成果を多く残したが、心臓病により在任中に他界。姉には、『アイヌ神謡集』の著作で知られる幸恵がいる。（藤本 1994; 国立民族学博物館編 2013）

【著作】

知里真志保『知里真志保著作集（全4巻＋別巻2）』平凡社、1973-1975年。

【コレクションとの関係】

知里が集めたアイヌの民具30点あまりは1934年から1936年までのあいだに収蔵されており、学生時代に帰省した際に収集したと推定される。登別の祖母 金成モナシノウクや叔母 金成マツが製作したものをはじめ、胆振地域のもものが大部分だが、十勝の芽室で収集したものも3点含まれる。上京以来、没後の出版に至るまで、渋沢敬三に物心両面の支援を受けており、アチックミュージアムのために収集したものと思われる。

----- 執筆者：齋藤玲子

● 月川武男 （1895-?）

つきかわ・たけお

【事績】

五社神社宮司。長崎県福江市出身。五島中学校、國學院大學高等師範部を卒業。1922年から1946年まで五島中学校教諭を務める。その後、1949年から1955年まで県立五島高等学校の講師を務める。

【著作】

月川武男（編）『訂正増補 公譜別録 五島郷土史叢書』五島史跡保全会出版、1956年。

【コレクションとの関係】

教鞭をとっていた長崎県福江町の蓑や容器を集め、1935年にコレクションに加えている。

----- 執筆者：卯田宗平

● 筑紫武門 （?-?）

つくし・たけかど／ちくし・たけゆき

【事績】

狩猟家、登山家。登山家で民俗学者の高須茂が編集した本に記事を寄せているほか、詳細はわからない。

【著作】

筑紫武門「釜無川よりの富士」『山と溪谷』33: 28-29、1935年。

筑紫武門「はつ夏画譜—八ヶ岳と浅夜峰の一角」『山小屋』41: 208-209、朋文堂、1935年。

筑紫武門「山猟片々」高須茂（編）『樗火—山小屋随筆集』54-59ページ、朋文堂、1943年。

【コレクションとの関係】

1935年に、山梨県北巨摩郡で集めた民具をコレクションに加えた。この当時、同じく山を愛した高橋文太郎がコレクション形成に深く関わっていたが、筑紫とのあいだに交流があったかどうかは判然としない。当時、近代アルピニズムが普及していくなかで、山麓の民俗がさまざまな登山家から注目を受けるようになっていたということかもしれない。

----- 執筆者：飯田卓

● 筒井英雄（1886-1935）

つつい・ひでお

【事績】

写真家。1914年ワンダス写真館を開業し、「早撮り写真のワンダス」として全国的に知られた。大正末期に、関西の趣味の会である「娯美会」や阪神地方のこけし会である「婢子会」のメンバーとなり、外国玩具やこけしを収集。大阪日本橋南詰に郷土玩具専門店である筒井郷玩店も経営した。（菅野監修 1983）

【コレクションとの関係】

1927年から1928年にかけて愛知や和歌山、姫路、宮崎、奈良、松本、京都市伏見区の郷土玩具28点をコレクションに加えた。

----- 執筆者：木村裕樹

● 常松卓三（?-?）

つねまつ・たくぞう

【事績】

徳島県在住の考古学者、民俗学者。國學院大學を卒業したのち九州帝国大学法文学部に入学するが中退。戦時中は陸軍中尉としてビルマ戦線に従軍。戦後は徳島県で脇町中学校や

富岡中学校、富岡西高校の教諭を務めた。阿南市の若杉山遺跡が辰砂（しんしゃ、水銀朱）の採掘遺跡であることを初めて指摘し、これは市毛勲『朱の考古学』（雄山閣、1975年）などで紹介された。また、前方後円墳である阿南市の国高山古墳を発見し、発掘をおこなった。

【著作】

常松卓三「物貴について」『旅と伝説』10(2): 47-49、1937年。

常松卓三『富岡西高校百年史序説』富岡西高校百年史序説刊行委員会、1996年。

常松卓三『阿南の古代遺跡と文化』私家版、1999年。

【コレクションとの関係】

1935年に徳島県那賀郡桑野村内原で集めた足半や神事飾りなどをコレクションに加えた。

----- 執筆者：坂野徹

●照屋林顕（1867-1944）

てるや・りんけん

【事績】

沖縄県漁業組合連合会会長、沖縄県水産会会長。1867年、那覇市久米町に生れ、1886年に沖縄県師範学校を卒業したのち、教員となる。1905年、教職から実業界に転じ、パナマ帽製造のため沖縄帽子製造株式会社を設立した。しかし1909年には製帽業に見切りをつけ、水産業に進出して沖縄県最初の発動機漁船 照島丸を建造するなど、水産業の近代化に尽力した。1910年に沖縄県漁業組合連合会の設立に関与し、1917年に沖縄県議会議員となった。帝国水産会議員、沖縄県水産会会長、那覇市水産会長などの要職を歴任し、水産功労者として1930年観桜御会に招待され、その後も、大日本水産会総裁、帝国水難救済会総裁より表彰されるなど活躍した。（上田 1983）

【コレクションとの関係】

1926年に沖縄県で製作された琉球張り子4点を寄贈している。水産会関係などで渋沢敬三と知り合ったか。

----- 執筆者：小島摩文

●土肥実雄（1891-1966）

どい・さねお

【事績】

郷土史家。熊本県球磨郡上村（現 あさぎり町）出身。戸籍名は土肥實男（「雄」でなく「男」）。熊本中学校を卒業。熊本県旧球磨郡人吉町（現 人吉市）で発行されていた『郷土雑誌球磨（旧 郷土研究）』などで活躍、後には実質的な編集発行人であった。柳田国男とも交流があり、ジョン・F・エンブリーが須恵村滞在中は度々土肥を訪問していたという。1939年10月にシカゴ大学出版局から『Suye mura』が出版されると1943年1月から『郷土雑誌 球磨』紙上に翻訳を連載したが、当局からの圧力のため4回で中断した。旅行好きで全国をあるいたがとくに沖縄、八丈島を好んだという。熊本県、とくに球磨地方における郷土研究の草分けであり、文化財保護にも大きな足跡を残した。

洪沢敬三がおこなった塩俗調査にも協力しており、球磨郡上村西別府における塩について報告した。

表に名前が出ることをきらい、新聞雑誌にはさまざまな変名で執筆を続けた。大正時代に球磨叢書として復刻発行した『球磨郡神社記』では、「土肥賢一郎」を編者名に使ったが、これは生まれたばかりの長男（後に宮崎大学農学部教授）の名前であった。（アチックミュージアム編 1939a; 『熊本日日新聞』 1967年12月2日付）

【著作】

土肥賢一郎（編）『球磨郡神社記（球磨叢書 第1巻）』球磨叢書刊行会、1919年。

土肥実雄「球磨史料の研究(1)」球磨郷土研究会（編）『郷土雑誌 球磨』7: 3-5、1930年
[最終の第46回は14(12): 1-2、1941年]。

土肥実雄「注意すべき郡内の地名(1)」、『郷土雑誌 球磨』5(5): 7-8、1932年 [最終の第4回は5(9): 6-7、1932年]。

土肥実雄「郷土館に就いて」『郷土雑誌 球磨』8(1): 6-7、1935年。

【コレクションとの関係】

熊本県球磨郡上村で製作された牛の草鞋と織機（部品）を寄贈している。

----- 執筆者：小島摩文

●富永清策 (?-?)

とみなが・せいさく

【事績】

新潟県北魚沼郡湯之谷村上折立（現 魚沼市）の在住者。熊狩りの名手。『アチック来訪者芳名簿』によると、1936年9月19日、「富永君歓迎」として、13人の出席者の記名がある。また、同年10月発行の『アチックマンズリー』第16号に「(九月)十九日富永清策・須佐啓次郎両氏来館、富永氏宿泊、歓迎晩餐会あり洪沢先生以下十三氏列席」とある。金子總平の『南会津北魚沼地方に於ける熊狩雑記』には、このときアチックミュージアムを訪れた富永清策から桜田勝徳がおこなった聞き取りも含まれている。なお、同書の自序に「湯之谷随一の熊狩人で話上手の富永清策さん」とある。(金子 1937; 伊藤 1987; 窪田 2003; 『アチックマンズリー』)

【コレクションとの関係】

1936年に新潟県北魚沼郡湯之谷村で集めた資料60点あまりをコレクションに加えた。なお、『アチックマンズリー』第16号に「越後湯之谷村富永清策氏より五十数点(民具到着)」とあるのは、アチックミュージアム訪問を機に、富永が送り届けたものであろう。

----- 執筆者：木村裕樹

●鳥居きみ子 (1871-1959)

とりい・きみこ

【事績】

旧姓は市原。モンゴル研究者、鳥居龍蔵の妻。徳島市出身。徳島県師範学校女子部を卒業後、尋常小学校の訓導を勤めた後、東京上野音楽学校に入学する。在学中に龍蔵と知り合い、1901年に結婚。1906年に内モンゴルの喀喇沁（カラチン）王府女学堂の教師に招聘され、龍蔵とともにモンゴルに渡って学術調査を行った。調査は夫婦で（後には家族ぐるみで行われ、きみ子は龍蔵の調査を物心両面で支えるだけでなく、自らも著作を刊行するとともに、後進たちのよき相談相手となっていた。(中園 1995; 鳥居龍蔵を語る会 2011)

【著作】

鳥居きみ子『蒙古行』読売新聞社、1906年。

鳥居きみ子『土俗学上より見たる蒙古』大鏡閣、1927年。

【コレクションとの関係】

1953年3月20日に、中国の山東省濰県で集めた銅器と遼寧省鞍山県隆昌州で集めた石像をコレクションに加えた。ただし、採集した国はそれぞれ「中華民国」「満洲国」となっており、戦前に集めたものが戦後になってコレクションに加わったことがうかがえる。採集者はいずれも「鳥居竜（龍蔵か）鳥居君子 鳥居竜次郎」となっている。鳥居龍蔵は1953年初めに逝去したので、遺品整理の一環としてきみ子と龍次郎が資料を寄贈した可能性が高い。

----- 執筆者：野林厚志

● 鳥居龍次郎（1916-1998）

とりい・りゅうじろう

【事績】

鳥居龍蔵の次男。15歳前後から龍蔵の調査に同行し、写真の撮影係等を務める。満洲や朝鮮半島といった東アジアだけでなく、1937年の南米調査にも同行し、龍蔵の後半生の調査を支えた。1964年に鳴門市に開館した徳島県立鳥居記念博物館（2010年に閉館）の運営に長らく携わった。（中園 1995; 鳥居龍蔵を語る会 2011）

【コレクションとの関係】

中国の山東省濰県で集めた銅器と遼寧省鞍山県隆昌州で集めた石像をコレクションに加えた。ただし、採集した国はそれぞれ「中華民国」「満洲国」となっており、龍蔵たちの調査、収集の時期をあわせて考えると、第二世界大戦終了以前に集めたものと考えてよいだろう。採集者はいずれも「鳥居竜（龍蔵か）鳥居君子 鳥居竜次郎」となっている。龍蔵は1953年1月に死去、資料のコレクション登録は同年3月20日である。

----- 執筆者：野林厚志

● 鳥居龍蔵（1870-1953）

とりい・りゅうぞう

【事績】

人類学者。徳島市出身。幼少期から錦絵や石器の収集に親しむ。18歳の時に人類学者 坪井正五郎と出会い、それをきっかけに東京で本格的に人類学の研究に携わることを志す。20歳の時に上京し、坪井のもとで東京帝国大学の人類学教室の標本整理係となる。その後、

東京帝国大学を助教授で退職した後は、國學院大學、上智大学等で教育と研究に携わった。第二次世界大戦中は、北京の燕京大学に客員教授として招聘され、終戦後も6年間留まり研究を続けた。

1895年に東京人類学会派遣のかたちで遼東半島の調査を行う。以後、台湾、千島、西南中国、沖縄、モンゴル、シベリア、ペルー、北東中国等の諸地域で調査を行った。鳥居は現地調査に際して、考古学資料、民族資料の収集を行うと同時に、写真による現地の様子の記録、蠟管録音機による音声の記録を行ったことでよく知られている。(鳥居博士顕彰会1965; 中園1995)

【著作】

鳥居龍蔵『鳥居龍蔵全集(全12巻+別巻1)』朝日新聞社、1975-1977年。

【コレクションとの関係】

中国の山東省濰県で集めた銅器と遼寧省鞍山県隆昌州で集めた石像をコレクションに加えた。ただし、採集した国はそれぞれ「中華民国」「満洲国」となっており、龍蔵たちの調査、収集の時期をあわせ考えると、第二次世界大戦終了以前に集めたものと考えてよいだろう。採集者はいずれも「鳥居竜(龍蔵か) 鳥居君子 鳥居竜次郎」となっている。龍蔵は1953年1月に死去、資料のコレクション登録は同年3月20日である。

----- 執筆者：野林厚志

● 永井龍一 (1882-1964)

ながい・りゅういち

【事績】

教育者。鹿児島県奄美大島名瀬の生まれ。父は教育者、漢学者として知られた永井長昌喜、兄は博物学者の亀彦。鹿児島県師範学校を1904年に卒業し、奄美大島赤木名高等小学校、名瀬尋常高等小学校などに訓導として勤務。1911年には東京の牛込高等小学校に転身、その後、1916年再び奄美大島に戻り、古仁屋高等小学校校長、名瀬高等小学校校長を務めた。1920年には大島島庁に入り、1922年から郡視学となり、大島郡の教育行政に携わる。十島村での公立小学校設置や奄美大島への大島高等女学校の誘致など、離島の教育格差の解消に尽力した。1931年には鹿児島市内の鶴嶺高等女学校に勤務し、1937年に教頭で退職した。その後は北京、京都、大阪、名張などを転々としながら教育に携わった。この間、一貫して奄美群島・トカラ列島の文化や歴史資料の継承に心を砕き、名越左源太『南島雑話』(白塔社、1933年)、田代安定『薩南諸島の風俗余事に就て』(白塔社、1890年)、白野夏雲『七

島問答』（出版社不明、1932年）、白野夏雲『十島図譜』（単美社、1933年）、赤堀廉蔵『島嶼見聞録』（出版社不明、1932年）、などを自費で出版し頒布した。（坂井 1977; 東 2008）

【著作】

永井龍一「白野夏雲翁と十島村」白野夏雲『十島図譜』59-60ページ、単美社、1933年。

【コレクションとの関係】

1934年にアチックミュージアムが当時の十島村（じつとうそん）でおこなった「薩南十島調査」を招聘し、参加者による民具収集に協力した。また、自身も鹿児島県内（奄美大島、十島村ほか）をはじめ、福井、島根など、さらには朝鮮半島の資料も寄贈している。朝鮮半島資料は、北京時代に朝鮮半島調査をした時の収集と思われる。

----- 執筆者：小島摩文

● 中尾佐助（1909-1993）

なかお・さすけ

【事績】

栽培植物学者、育種学者。京都大学卒業後、1949年に浪速大学（のちの大阪府立大学）農学部講師となったのち、助教授、教授を務める。1953年のマナスル登山に関連して、1952年には予備踏査隊として、1953年には登山隊科学班としてネパールに渡航した。1958年には、日本人としてはじめてブータンを訪れ、単独踏査をおこなった。また、作物学や植物地理学をふまえたユニークな文化圏説を提唱し、照葉樹林文化の考えかたを示したことで知られる。1980年に鹿児島大学教授。（中尾 2004）

【著作】

中尾佐助『秘境ブータン』毎日新聞社、1959年。

中尾佐助『栽培植物と農耕の起源』岩波書店、1966年。

中尾佐助『現代文明ふたつの源流—照葉樹林文化・硬葉樹林文化』朝日新聞社出版局、1978年。

中尾佐助『中尾佐助著作集（全6巻）』北海道大学図書刊行会、2004-06年。

【コレクションとの関係】

中部ネパールのツムジェ村で集めた資料を1957年にコレクションに加えた。これは、1953年のネパール渡航のさいに得たものと思われる。また、1958年のブータン渡航のさいに集

めた資料も多数コレクションに含まれている。

----- 執筆者：飯田卓

●長岡博男 (1907-1970)

ながおか・ひろお

【事績】

1929年に東京医学専門学校（現 東京医科大学）を卒業後、1931年から柳田国男に師事し、1936年から金沢で眼科医を営みつつ、石川県の民俗に関する研究を幅広くおこなった。1937年に金沢民俗談話会を結成・主宰し、『金沢民俗談話会報』を刊行。軍医として応召されるが、敗戦後シベリアに抑留され、1948年に引き揚げた。1949年より柳田が主宰する民俗学研究所の同人となり、1949年に加能民俗の会を結成、雑誌『加能民俗』を発刊し、死去するまで民俗学的研究を続けた。眼鏡のコレクターとしても知られる。（石川県立郷土資料館編 1975; 菊地 2001）

【著作】

長岡博男『日本の眼鏡』東峰書房、1967年。

長岡博男『加賀能登の生活と民俗』慶友社、1975年。

【コレクションとの関係】

1937年に石川県金沢市で集めた足半草履をコレクションに加えた。

----- 執筆者：坂野徹

●仲川勝蔵 (1911-?)

なががわ・かつぞう／しょうぞう

【事績】

名の読みは不確定。樺太泊岸村新聞出身のアイヌ。1925年に新聞教育所を卒業し、札幌で北海道帝国大学講師ジョン・バチラーの書生を経て、1929年に上京、1933年に巣鴨高等商業学校（後の千葉商科大学）に入学、1937年に卒業（推定）した。東京で就職し、余生も都内で送ったらしい（私信）。（小川・山田編 1998）

【著作】

仲川勝蔵「我等の前途」『ウタリ之友』1933年5月号（掲載ページ不明）、1933年〔小川正人・山田伸一（編）『アイヌ民族近代の記録』201-202ページ、草風館、1998年〕。

【コレクションとの関係】

1935年にスキー1点を収集し（寄附者は知里真志保）、1936年に食器3点を収集した。いずれもアイヌ語研究者である知里の仲介によるものか。

----- 執筆者：齋藤玲子

● 中川行秀（?-?）

なかがわ・ゆきひで

【事績】

金石文研究家。1929年前後、研究活動に対して渋沢敬三の支援を受けていた。（中山編 1956）

【著作】

中川行秀（編）『日本金石大年表』発行者不明、1925年。

中川行秀『武蔵国金石年表』島田一郎、1933年。

中川行秀『日本国宝神仏像便覧』アチツクミウゼアム、1934年。

【コレクションとの関係】

1929年から1930年にかけて、東京、埼玉県、千葉県、兵庫県、徳島県、福岡県など各地の恵比寿像、大黒像、稲荷像と、絵馬等寺社に奉納された95点をコレクションに加えた。

----- 執筆者：永井美穂

● 中島吉応（1887-?）

なかじま・よしまさ

【事績】

鹿児島県徳之島の天城村（現 天城町）西阿木名生まれ。1910年、鹿児島県師範学校本科第一部を卒業して小学校教師になり、揖宿郡柳田や指宿、肝属郡垂水などで勤務した。1915年より山小学校（現 徳之島町）の校長となったのを皮切りに、岡前（現 天城町）、和泊（現 沖永良部島和泊町）、母間（現 徳之島町）、面縄（現 伊仙町）、田検（宇検村）など、

大島郡内の小学校長を歴任した。(坂井編 1977)

【著作】

中島吉応『真日本道の横波的発展—真我の覚醒展進と修身教育法』一誠社、1938年。

【コレクションとの関係】

1935年11月5日に鹿児島県大島郡宇検村や大和村、天城村などで使われた履物や衣類を寄贈した。1937年刊の『奄美人国記 第2巻』において肩書きが「田検尋常高等小学校校長」となっているため、上記資料も宇検村田検で勤務していた期間中に集めたものと考えられる。

----- 執筆者：小島摩文

●中野卓 (1920-2014)

なかの・たかし

【事績】

社会学者。親族研究、村落研究、生活史研究などの分野に貢献した。京都市の商家の出身。東京帝国大学文学部社会学科を卒業後、東京教育大学や千葉大学、中京大学などで教鞭をとった。漁村や商家の事例研究をもとに、有賀喜左衛門が農村をモデルとして構築した同族団理論を発展させ、家と同族の一般理論を提唱した。1953年から1954年にかけておこなわれた九学会連合能登調査に参加した。『有賀喜左衛門著作集(全11巻)』(未来社、1966-1971年)の編集にも参加した。また、個人記録や聞き書きをもとにした個人生活史の研究を開拓し、自らの生活史を事例にしたモノグラフも発表している。(中野・桜井編 1995)

【著作】

中野卓『商家同族団の研究—暖簾をめぐる家と家連合の研究』未来社、1964年。

中野卓『口述の生活史—或る女の愛と呪いの日本近代』御茶の水書房、1977年。

中野卓(編)『明治四十三年京都—ある商家の若妻の日記』新曜社、1981年。

【コレクションとの関係】

1952年6月6日に履物を2足コレクションに加えた。

----- 執筆者：菊地暁

● 仲浜靖一（?-1999）

なかはま・せいいち

【事績】

三線（琉球三味線）奏者。沖縄県出身で、琉球古典舞踊の大御所 玉城盛重に師事。中学入学後、鹿児島に疎開し、学徒動員で長崎の魚雷工場で働いた。同じく鹿児島に疎開していた岳父の琉球音楽家 川田松夫や、その娘たちとともに、琉球舞踊団を結成して九州各地を回る。1953年に上京し、琉球料理店を経営する傍ら、三線（琉球三味線）演奏家として活動し、東京藝術大学非常勤講師も務めた。1964年に芸術祭賞受賞。（日外アソシエーツ編集部編 2010）

【コレクションとの関係】

1953年に沖縄県那覇市壺屋で製作されたカラカラ（泡盛用の酒器）をコレクションにくわえた。資料に線刻されている「みやらび」は仲浜の岳父川田松夫が経営していた店の名前。仲浜が上京した年に一致するので、琉球料理店「みやらび」で使っていたものを来店した渋谷敬三が譲り受けた可能性もある。

----- 執筆者：小島摩文

● 中村たかを（1931-2012）

なかむら・たかを

【事績】

民具研究者。本名は俊亀智。中村孚美（旧姓 桑野）は夫人。武蔵高等学校在学時より日本民族学会附属民族学博物館（保谷民博）で資料整理のアルバイトに従事した。1957年に東京都立大学大学院社会科学研究科経済政策専攻修士課程を修了し、同年4月より保谷民博で研究員を務めた。1962年7月に所蔵資料が国に移管されるのに伴い、文部省大学学術局学術課史料館の文部事務官（研究職）となった。1972年に国文学研究資料館史料館助手、1973年に国立民族学博物館創設準備室助手を併任したのち、1974年に国立民族学博物館助教授となり、1976年に教授となった。国立民族学博物館では民族資料やオセアニア地域、民族技術を担当し、1988年に退職、明海大学経済学部教授となった。国立民族学博物館名誉教授、明海大学名誉教授。（近藤 2013a; 坪郷 2014）

【著作】

中村たかを『日本の民具』弘文堂、1981年。

中村たかを『日本の労働着』源流社、1988年。

【コレクションとの関係】

1959年から1960年にかけて長野県や秋田県で集めた民具をコレクションに加えた。ヒノキ材で作った曲物が多く、とくに関心を寄せていたことがうかがえる。

----- 執筆者：木村裕樹

●中村忠生 (1934-?)

なかむら・ただお

【事績】

山形県天童町（現 天童市）生まれ。税務署勤務の父の転勤に伴い、青森県野辺地町や山形県酒田市、福島県郡山市、岩手県一関市に移転をくり返す。1959年、岩手県信用保証協会に入協。盛岡本所・一関・大船渡・釜石・水沢・二戸の各支所に勤務し、1995年定年退職。

ただし、中村がコレクションに加えた資料の備考欄には次のように記されている。「中村氏（東京都杉並区馬橋、運輸省観光局勤務）が羽黒山参拝の折、社務所から授けられ帰途許しをえてゆずりうけたもの。製作地、採集地と同じ。材料、和紙。使用地、山形県東田川郡羽黒山。」

【著作】

中村忠生『山形済生館病院初代院長 長谷川元良のこと』風雲舎、2010年。

【コレクションとの関係】

1956年5月29日に山形県東田川郡羽黒町手向で集めた木綿シメをコレクションに加えた。

----- 執筆者：加藤幸治

●中村千代子 (1906-1969)

なかむら・ちよこ

【事績】

中村チヨまたは千代と表記することもある。樺太敷香出身のニブフのシャマン。戦後は網走市に居住し、網走市立郷土博物館館長 米村喜男衛の仲介などで、民族学や言語学研究に協力した。（北海道教育庁振興部文化課編 1974）

【著作】

中村チヨ（口述）ロバート・アウステリッツ（採録・著）村崎恭子（編）『ギリヤークの昔話』北海道出版企画センター、1992年。

【コレクションとの関係】

1958年にイナウ（木幣）2点とエゾマツの枝をコレクションに加えた。

----- 執筆者：齋藤玲子

● 中村寅一（1902-1978）

なかむら・とらいち

【事績】

郷土史家、民俗学者、小学校・中学校教員。長野県上伊那郡朝日村平出（現 辰野町）生まれ。1919年に松本商業学校を卒業し、織維会社、上伊那銀行勤務を経て、1928年から伊那富尋常高等小学校（上伊那郡伊那富村）の代用教員として採用された。1937年、正教員の資格を取得し、以後1958年まで教員として過ごす。

社会学者の有賀喜左衛門とは家も近く、有賀が6歳年上だが幼馴染で、終生交流があり影響を受けた。また、歴史学者で、東北大学教授、國學院大學教授を歴任した中村吉治は弟。

1926年、『民族』に掲載された「狐の話・むじなの話」を皮切りに、民俗学に本格的に取り組むようになった。伊那富尋常高等小学校では、矢島麟太郎が中心となった『郷土』や、その後継雑誌の『落原』を発表媒体として、竹内利美などとともに民俗調査研究に活躍した。

1933年には渋沢敬三の招きで、竹内利美ら『落原』同人4人とともにアチックミュージアムに1週間滞在し、民俗学や民具研究の研修を受けた。中村寅一の民俗学の特徴は、商業学校で学んだり銀行で勤務したりした経験を活かして、社会経済史の視点で村の生活を記述したところにあり、その実証的な調査研究は高く評価されている。後年は、『朝日村史』や『長野県上伊那誌 第5巻 民俗篇』など郷土史の編纂にも力を注いだ。（中村 1981）

【著作】

中村寅一『村の生活の記録 上』刀水書房、1981年。

中村寅一『村の生活の記録 下』刀水書房、1981年。

【コレクションとの関係】

1933年、アチックミュージアムに招かれた際に「落原同人」の名で資料を寄贈した他、長野県内で集めた資料14点を個人名で寄贈している。「採集者 有賀喜左衛門、寄附者 中村寅一」となっている資料や、「採集者 中村寅一、寄附者 竹内利美」となっているものなどがあり、それぞれがどのように関わったかいささか不明な点もある。なお、本データベースでは寄附者の情報を非公開としているため、中村以外の者が採集者となり中村が寄附者となった資料は、検索しても表示されない。その数は6点である。

----- 執筆者：小島摩文

●中村半二郎（?-?）

なかむら・はんじろう

【事績】

陸奥国閉伊郡岩泉村（現 岩手県閉伊郡岩泉町）の旧家の当主。1935年に渋沢敬三と磯貝勇ら一行が、名子の質物証文や鉱山関係古文書等を調査したと『アチックマンズリー』にある。（神奈川大学日本常民文化研究所編 2011;『アチックマンズリー』）

【著作】

【コレクションとの関係】

1935年8月25日に岩手県下閉井郡岩泉町で集めた麻布やすりこ木をコレクションに加えた。

----- 執筆者：加藤幸治

●中谷治宇二郎（1902—1936）

なかや・じうじろう

【事績】

先史考古学者。石川県生まれ。雪の研究者として科学エッセイを発表しつづけた中谷宇吉郎（北海道帝大教授、物理学者）の弟。1920年に上京して新劇活動に参加した後、故郷に戻って小学校の準訓導心得や新聞記者などを務め、再び上京して東洋大学でインド哲学を学んだ。1924年に東京帝国大学理学部人類学選科に入学し、先史考古学を学ぶ。選科修了後の1929年に兄の留学先パリに留学するが、結核のため志なかばで帰国。34歳で夭折し

た。（中谷 1972; 高村 1996; 大村 2014）

【著作】

中谷治宇二郎『日本石器時代提要』岡書院、1927年。

中谷治宇二郎『日本石器時代文献目録』岡書院、1930年。

【コレクションとの関係】

1928年11月19日に秋田県平鹿郡で集めた人形10点あまりをコレクションに加えた。収集の経緯は不明。

----- 執筆者：坂野徹

● 中山正則（1896-?）

なかやま・まさのり

【事績】

実業家。財団法人日本常民文化研究所理事長、石川島播磨常務。埼玉県出身。東京高等師範学校附属中学校、第二高等学校、東京帝国大学時代で渋沢敬三の同級生となり、ともに実業の道に進んだ。渋沢敬三が二度めの中学三年生として通学していた当時、東京での下宿を変えるところだった中山と帰り道でたまたま一緒になったことが縁で、学寮で共同生活を始めた。1921年2月2日、渋沢が主宰していた玩具研究グループ アチック・ミュージアム・ソサエティに参加し、渋沢一族の写真集『柏葉拾遺』の編集を担当した。のちに渋沢は、豆州内浦の漁民史料を所蔵していた大川四郎左衛門の甥を中山にひき合わせ、「あれ〔漁民史料〕はおれの学問の種だから、そこで拾ったんだから人間も拾えよ」と勧め、大川の甥を石川島播磨に就職させた。（中山編 1956; 渋沢敬三先生景仰録編集委員会編 1965; 渋沢敬三伝記編纂刊行会編 1979; 『アチックマンスリー』）

【コレクションとの関係】

1922年に北京で集めた「伎劇の面」をはじめ、数点の資料をコレクションに加えている。渋沢敬三と中学時代からの同級生という関係から資料を寄贈していたと考えられる。

----- 執筆者：小林光一郎

●夏目一平 (1890-1979)

なつめ・かずひら

【事績】

郷土史家、愛知県北設楽郡下津具村（現 設楽町）村長。渋沢敬三が奥三河地方の花祭を見学した際に親交を深めた。「その内とうとう私も早川さんに伴われ花祭見物のファンとなり、（中略）原田清・佐々木嘉一・夏目一平・窪田五郎・夏目義吉等同地方の人々と親しい交わりを結ぶに至った。」と渋沢は書いている。1922年、窪田五郎と共に「津具郷土資料保存会」を結成した。アチックミュージアム同人であった村上清文は、同じく同人であった桜田勝徳との談話の中で、アチックの民具収集について次のように述べた。「（桜田）やはり民具集めは早川〔孝太郎〕さんの花祭り時代が一番最初になるのですかね。（村上）でしょうね。やはりあすこで深めて行ったんですね。その点は夏目一平さんが自分で博物館をやっておられたですね。やはりあすこらが基準でしょうね。」窪田五郎とは従兄。（渋沢 1933b; 1961; 渋沢敬三伝記編集刊行会編 1979）

【コレクションとの関係】

渋沢敬三やアチックミュージアムの奥三河調査参加に関係したことから、1932年に火縄銃などの資料をコレクションに加えた。

----- 執筆者：小林光一郎

●夏目義吉 (?-?)

なつめ・ぎきち／よしきち

【事績】

愛知県北設楽郡田口町長江（現 設楽町）の人物。渋沢敬三が奥三河地方の花祭を見学した際に親交を深めた。「その内とうとう私も早川さんに伴われ花祭見物のファンとなり、（中略）原田清・佐々木嘉一・夏目一平・窪田五郎・夏目義吉等同地方の人々と親しい交わりを結ぶに至った。」と渋沢は書いている。（渋沢 1961）

【コレクションとの関係】

1933年9月に長江で集めた民具2点をコレクションに加えた。

----- 執筆者：小林光一郎

● 楢木範行（1904-1938）

ならき・のりゆき

【事績】

郷土史家。宮崎県西諸県郡真幸村（現 えびの市）生まれ。國學院大學高等師範部に在学中、折口信夫や柳田国男との知遇を得た。長野県上伊那農業学校や鹿児島商船学校に勤務するとともに、教職のかたわら民俗学研究に従事し、宮崎や鹿児島を精力的に採訪した。1935年、柳田国男還暦記念日本民俗学講習会に参加した。1936年、野間吉夫らと鹿児島民俗研究会を設立し、機関誌『はやひと』を創刊。33歳で夭折した。（最上 1958）

【著作】

楢木範行『日向馬関田の伝承』鹿児島民俗研究会、1937年。

【コレクションとの関係】

1936年4月17日に郷里の宮崎県西諸県郡真幸村で集めた削りかけをコレクションに加えた。

----- 執筆者：菊地暁

● 西村朝日太郎（1909-1997）

にしむら・あさひたろう

【事績】

海洋民族学者。1939年に東亜研究所所員、1940年に日本民族学会附属民族学研究所所員（兼任）となったのち、1946年より早稲田大学非常勤講師、1954年より同教授。戦後、日本民族学協会（のちに日本民族学会）で常任理事や評議員を務め、1960年には同協会の第2次東南アジア稲作民族文化総合調査（インドネシア）に参加した。日本や東南アジアの浅海域でおこなわれる漁法の比較研究をおこない、海洋民族学を提唱するとともに、早稲田大学で海洋民族学センターの運営に携わった。父は民族学者の西村真次。（藤岡・石川・西村・中沢・宮本 1960; 宮本延人編 1968; 西村 2003）

【著作】

西村朝日太郎『文化人類学論攷』日本評論新社、1959年。

西村朝日太郎『人類学的文化像』吉川弘文館、1960年。

西村朝日太郎『海洋民族学』日本放送出版協会、1974年。

【コレクションとの関係】

日本民族学協会の第2次東南アジア稲作民族文化総合調査のためにインドネシアに派遣されたおり、ジャワ島で漁具を収集した。収集年はいずれも1960年。

----- 執筆者：飯田卓

● 額田巖 (1911-1993)

ぬかた・いわお

【事績】

電気工学者、民族学者。1935年に早稲田大学を卒業したのちに日本電気KKに入社し、1945年に工学博士の学位を受けた。その後、新日本電気取締役、日本電気副支配人、日本経営協会常務理事、日本経営データ・センター代表取締役社長などを歴任。いっぽうで、回路接続の問題から結びに関心を持つようになり、1962年に「日本における結縛の歴史、民俗学的研究」で東京文科大学から文学博士の学位を受けた。この当時、東京文科大学は東京教育大学（現 筑波大学）に吸収されていたが、学位授与の機能は残されており、東京教育大学では考古学者 八幡一郎が教鞭をとっていた。八幡は、額田の研究をさまざまなかたちで指導したと推測される。（額田 1953）

【著作】

額田巖『結び』法政大学出版局、1972年。

額田巖『包み』法政大学出版局、1977年。

額田巖『結び目の謎』中央公論社、1980年。

【コレクションとの関係】

1954年にペルーのレースをコレクションに加えた。この資料の寄附者（本データベースでは表示していない）は、ペルーの天野博物館の館長を務めた天野芳太郎となっている。いっぽうで、逆に採集者が天野芳太郎、寄附者が額田巖となっている資料ははるかに多く、20点以上にのぼる。ペルーに在住していた天野から寄贈されたものを額田が日本に持ちかえり、日本民族学協会附属民族学博物館に収めたものと推測される。額田はまた、コレクションの管理者だった日本民族学協会の会員としても活発に活動しており、民族学博物館学生文庫の1冊として『結びの文化』を刊行している。

----- 執筆者：飯田卓

●野口弥吉（1899-2002）

のぐち・やきち

【事績】

作物学者。東京府東京市（現 東京都）生まれ。1924年に東京帝国大学農学部を卒業し、同大大学院修了、1930年に農学博士となった。東京帝国大学助手および講師を経て、欧米留学の後、1933年に助教授、1937年に教授に就任する。のち付属農場の場長を務め、1960年に定年退官し、名誉教授となった。退官後も日本農業研究所研究員として研究を続けた。煙草、芋、大根などの多収穫を図る「栽培学」の確立をめざし、生物学の新学説を導入するなど、農学の新天地を開いた。（外務省通商局編 1940; 日外アソシエーツ編 2004）

【著作】

野口弥吉『非メンデル式作物育種法』養賢堂、1941年。

野口弥吉『栽培原論』養賢堂、1946年。

野口弥吉『農学概論』養賢堂、1950年。

【コレクションとの関係】

1939年5月に中国の珠江デルタや海南島で集めた資料をコレクションに加えた。

----- 執筆者：井上潤

●野間吉夫（1908-1983）

のま・よしお

【事績】

民芸運動家、民俗学研究者。鹿児島生まれ。九州大学にて小出満二教授のもとで村落社会学を専攻し、卒業後、鹿児島朝日新聞社および福岡日日新聞社（現 西日本新聞社）編集局を経て、戦後は夕刊フクニチ新聞社に移った。1971年に退職するまで、同社で工務局長や監査役などを歴任した。日本民藝協会理事や福岡民藝協会会長などを務めた。

鹿児島朝日新聞社在籍中の1936年に柳田国男が来訪したのを契機として、榎本範行や永井龍一、宮武省三、兄玉幸多、内藤喬らと鹿児島民俗研究会を組織するとともに、機関誌『はやひと』を発刊し、鹿児島県における民俗学研究の基礎を築いた。自身が収集した民具の一部は、没後、福岡市立博物館に寄贈された。（松村 2017）

【著作】

野間吉夫『シマの生活誌 — 沖永良部島探訪記』三元社、1942年。

野間吉夫『玄海の島々』慶友社、1973年。

野間吉夫『椎葉の山民』慶友社、1970年。

【コレクションとの関係】

1936年に鹿児島市内の足半を3点寄贈している。野間が鹿児島朝日新聞社に勤務していた頃かと思われる。渋沢敬三らアチックミュージアムの関係者が『所謂足半（あしなか）に就いて（予報）』を発表した後の収集で、柳田国男が鹿児島を訪れた年に合致している。

----- 執筆者：小島摩文

● 萩原正徳（1896-1950）

はぎわら・せいとく

【事績】

出版社社長、編集者。現在の鹿児島県大島郡名瀬市金久生まれ。東京高等工芸学校を卒業後、海軍省水路部を経て、写真製版印刷を行う三元社を設立。東京高等工芸学校には印刷工芸科があった。萩原は、1928年から1944年まで、柳田国男の指導を受けながら月刊雑誌『旅と伝説』を発行し、この時期の民俗学の中心的な雑誌となった。弟に利用と厚生がいる。厚生は、鹿児島第一中学校から第一高等学校、東京帝国大学文学部仏文科へ進学し、一時東京帝国大学図書館に勤務して、正徳や関敬吾、岡野他家夫を柳田国男に紹介した。厚生は後に信濃毎日新聞論説委員となる。萩原正徳の母は、永井亀彦・龍一兄弟の姉よしである。（東 2008）

【コレクションとの関係】

1930年に沖永良部島の鞠と独楽を寄贈している。

----- 執筆者：小島摩文

● 朴春錫（?-?）

パク・チュンソク

【事績】

朝鮮慶尚南道蔚山邑達里（現 大韓民国蔚山広域市）出身。麻布中学校に通っていたと思わ

れる1936年の7月から8月にかけて、渋沢敬三が主宰していたアチックミュージアムの人たちが朝鮮多島海の調査をおこなったさい、達里にあった朴の実家を訪れたことが、神奈川大学の写真資料データベースからうかがえる。朴は、8月に東京のアチックミュージアムを訪問して入会し、9月には民具整理を担当することになった。とりわけ朝鮮関係資料の整理を任されたと推測される。その後、渋沢の周囲にいた若者たちでつくる柏竈社に入会した。1939年に、麻布中学校を卒業した。（『アチックマンスリー』）

【コレクションとの関係】

1936年から1938年にかけて、蔚山邑達里で集めた民具数点をコレクションに加えた。

----- 執筆者：飯田卓

● 箱山貴太郎（1907-1992）

はこやま・きたろう

【事績】

民俗学者、教員。長野県小県郡豊郷村（現 上田市）生まれ。上田中学校を卒業して教職に就いたのち、1928年に柳田国男に会い、郷土教育の重要性に開眼する。池上隆祐や有賀喜左衛門、早川孝太郎らから指導を受け、郷里の民俗を調査した。1935年、柳田国男還暦記念日本民俗学講習会にも参加した。1952年に東京教育大学に内地留学し、1953年に上田民俗研究会を設立、1960年に雑誌『上田盆地』を創刊した。（無署名1993）

【著作】

箱山貴太郎『上田付近の遺跡と伝承—忘れられて行く文化遺産をたづねて』上田小県資料刊行会、1965年。

箱山貴太郎『吉田堰』吉田堰管理組合、1969年。

箱山貴太郎『上田市付近の伝承—長村郷土資料』上田小県資料刊行会、1973年。

【コレクションとの関係】

1933年に長崎県の資料1点を、1935年に長野県と群馬県の資料約20点をコレクションに加えた。

----- 執筆者：菊地暁

●橋迫春茂 (1913-?)

はしさこ・はるしげ

【事績】

大分県南海部郡弥生町切畑（現 佐伯市）地区の切畑八坂神社宮司。400年続く社家の第22代当主。國學院大學を卒業し、戦前戦後に地元小中学校で教鞭をとり、後に佐伯豊南高校教諭を16年間勤めた。

【コレクションとの関係】

1961年に大分県の雪ぐつを寄贈した。

----- 執筆者：小島摩文

●橋詰延寿 (1902-1988)

はしづめ・のぶとし

【事績】

1948年に高知県文教協会が設立されたとき初代の常務理事となり、1977年まで務めた。

【著作】

橋詰延寿『万次郎漂流記』大日本雄弁会講談社、1947年。

橋詰延寿『夜須町風土記』夜須町、1968年。

橋詰延寿『介良風土記』高知県文教協会、1973年。

【コレクションとの関係】

高知県長岡郡稲生町の籠をコレクションに加えた。

----- 執筆者：飯田卓

●馬場脩 (1892-1979)

ばば・おさむ

【事績】

考古学者、民族学者。北海道函館区（現 北海道函館市）生まれ。函館中学校時代に考古学に興味を抱き、同窓生らと函館考古学会を結成。1923年に日本歯科医学専門学校（現 日本

歯科大学）を卒業後、米国に留学して学位を取得、1924年に東京本郷で歯科医を開業するも、1930年に廃業した。同年から北海道内でアイヌ集落の行脚を始め、択捉島では発掘調査をおこない、考古学と民族学の研究に傾倒してゆく。北千島には1933年～1938年の間に5回、樺太には1935年～1941年の間に5回赴いて調査をおこない、考古学や民族学に関する資料を収集した。

保谷民博の資料とは別に保管されていたアイヌ民族資料758点（後に750点）は、「アイヌの生活用具コレクション」として1959年に国の重要有形民俗文化財に指定され、1971年に函館市が一括購入した。翌1972年に寄贈された樺太、千島出土の考古資料1,100点とともに市立函館博物館に収蔵され、1989年に函館市北方民族資料館が開館して以後は同館に所蔵・展示されている。（財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構編 2000）

【著作】

馬場脩『北方民族の旅』北海道出版企画センター、1979年。

馬場脩『樺太・千島 考古・民族誌（1～3）』北海道出版企画センター、1979年。

【コレクションとの関係】

1937年と翌1938年に、日本民族学会の北方文化調査団の一員として、岡正雄らとともに千島と樺太で発掘調査ならびに民族学調査をおこない、多数の資料を収集した。採集者が岡と馬場両名になっている資料約180点（民博で登録されているのは168点）は、このときに収集されたものと考えられるが、地名や年月日等の情報はまったくなく、詳細がわからない。

----- 執筆者：齋藤玲子

● 浜田完（?-?）

はまだ・かん？

【事績】

鹿児島県大島郡宇検村出身。渋沢敬三が主宰したアチックミュージアムで書生をしていた浜田国義の父。アチックミュージアムからの求めに応じて、民具を製作して寄贈した。（『アチックマンズリー』）

【コレクションとの関係】

鹿児島県大島郡宇検村で使用された資料を7点、コレクションに加えた。ただしこのほかに、浜田が寄附者となり三男の国義が採集者となった資料4点が存在する（本データベー

スでは非表示)。

これらの資料は、4回に分かれて寄贈されている。1935年10月の分は草鞋1点で、「採取者：浜田完、寄付者：同人」となっている。1935年11月の分は端切れ3点で、採集者は中島吉応で、原簿備考に「浜田完氏提供」と記載されている。1936年8月の分は、鍋敷とヤギの皮、ヤギの首輪、稲扱の4点で、「採取者：浜田国義、寄付者：浜田完」と記載されている。『アチックマンズリー』16号には、「浜田君が奄美大島の民具を数十点」寄贈したことが記載されている。1938年5月の分は、「採集者：浜田完」となっており、『アチックマンズリー』35号の1938年5月5日の条に「浜田完氏より奄美大島の民具一梱到着」とある。『アチックミュージアム日誌』の1938年5月5日の項目には該当する記載はない。

----- 執筆者：小島摩文

● 浜田国義 (1912-1945)

はまだ・くによし

【事績】

渋沢敬三が主宰したアチックミュージアムの書生。渋沢の蔵書を整理していたが、張甲特が朝鮮に行った後は織田文庫の整理も担当した。大島郡宇検村宇検出身。小学校卒業後、漁業や農業をしながら奄美大島の購買組合に勤務。1934年5月に渋沢がアチックミュージアムの関係者ととも薩南十島調査で奄美大島を訪れたとき、初めて渋沢らと出会った。1935年に職を辞して上京し、目黒の知人宅に居たとき、渋沢に再び出会ってアチックミュージアムの書生となった。渋沢を囲む若者の集まりである柏竈社の会員にもなり、柏竈ニュースの編集などを担当。1937年3月に東京市立麻布商業学校を卒業、同年4月に立正商業学校第4学年に編入、1939年3月に立正商業学校を卒業した。1941年より台湾の銀行に勤務するようになったが、1942年1月まで渋沢家に居た。(渋沢史料館編 1988; 『アチックマンズリー』)

【コレクションとの関係】

1936年8月に大島郡宇検村宇検で集めた資料約50点をコレクションに加えた。奄美大島をよく知る者として薩南十島調査に参加した永井龍一は、1936年9月にアチックミュージアムを訪れた際「一昨年(注、1934年)の春、自分たちが渋沢先生一行と共に奄美十島旅行の際、宇検へ立寄ったのは、丸で浜田君を迎へに行った様なものだ」と言っている。

----- 執筆者：小林光一郎

● 浜谷浩 （1915-1999）

はまや・ひろし

【事績】

写真家。東京都下谷生まれ。写真評論家の田中雅夫は兄。関東商業学校を経て、オリエンタル写真工業に入社し、下町風俗のスナップ写真で頭角を現した。新潟県高田の取材を機に洪沢敬三の知遇を得て民俗学に傾倒、洪沢敬三が主宰するアチックミュージアムの同人たちから協力を得て、新潟県中頸城郡谷浜村桑取谷（現 上越市）の小正月行事を撮影し、『雪国』として発表した。1941年に東方社に入社し、『FRONT』誌で陸海軍関係の写真を撮影するも、プロパガンダ写真になじまず退社。柳田国男と土門拳の対立で有名な座談会「民俗と写真」（『写真文化』1943年9月号）にも参加するが、目立った発言はない。のち、新潟県高田に転居した。敗戦の日に高田で撮影した青空の写真は、日本写真界の再出発を象徴する作品として有名。1954年より〈裏日本〉シリーズの撮影に着手し、1960年の安保闘争取材を機に被写体を人から風景に変え、〈日本列島〉シリーズや〈地の貌〉シリーズを制作した。1997年、日本人として初めて英国王立写真協会名誉会員賞を受賞。国際的に高い評価を得た、昭和を代表する写真家である。（東京都写真美術館編 1997）

【著作】

浜谷浩『雪国』毎日新聞社、1956年。

浜谷浩『裏日本』新潮社、1957年。

浜谷浩『潜像残像』河出書房新社、1971年。

【コレクションとの関係】

1957年に草鞋1点をコレクションに加えた。採集地は「中華民国」とある。浜谷は1942年に満洲国、1956年に中華人民共和国を撮影しているが、後者の際に入手したものか。

----- 執筆者：菊地暁

● 早川孝太郎 （1889-1956）

はやかわ・こうたろう

【事績】

民俗学者、画家。愛知県南設楽郡長篠村大字横山（現 新城市横川）出身。柳田国男の弟である画家 松岡映丘に弟子入りし、『郷土研究』を知って投稿したのをきっかけに、柳田国男に師事するようになった。郷里である奥三河の花祭りについて研究し、柳田国男の紹介

で出会った渋沢敬三に花祭りを紹介した。渋沢敬三が主宰するアチックミュージアムでは民具研究の顧問格を務め、大蔵永常伝の編纂を担当した。さまざまな調査に参加するかたわら、モノグラフである『花祭』を著す。1933年11月、九州帝大農学部農業経済研究室の助手となったのち、農村更生協会勤務。全国農業会高等農事講習所の講師や文化財保護委員なども務めた。石黒忠篤は、早川について「彼こそこういう珍品を集める天才ですよ」と評している。(渋沢 1933b; 1961; 渋沢敬三伝記編纂刊行会編 1979)

【著作】

早川孝太郎『花祭』岡書院、1930年。

【コレクションとの関係】

1920年代終わり頃に奥三河の多数の資料をコレクションに加えはじめ、1930年代には東北地方から沖縄県まで資料収集範囲を広げ、1936年頃までに650点を超える資料をコレクションに加えた。

----- 執筆者：小林光一郎

● 林魁一 (1875-1961)

はやし・かいち

【事績】

考古学者。岐阜県加茂郡太田町太田（現 美濃加茂市）の在住者。岐阜中学校を卒業後、坪井正五郎の指導を受け、研究の道に入る。1900年ごろから郷里の美濃東部や飛騨地方を調査し、論文を発表した。有孔石器や御物石器を発見したことで知られる。渋沢敬三が主宰するアチックミュージアムがおこなった『塩俗問答集』アンケートにも回答した。このアンケートは、製塩の工業化が進んで天然の塩田が少なくなるなか、塩の貯蔵法や容器、塩の取扱いに関する慣習などの地域性を尋ねたものである。(アチックミュージアム編 1939a; 上田・西沢・平山・三浦監修 2015)

【著作】

林魁一（著）森本六爾（編）『美濃国弥生式土器図集（東京考古学会弥生式土器図集 第2集）』東京考古学会、1934年。

【コレクションとの関係】

1936年に岐阜県で集めた履物3点をコレクションに加えた。

----- 執筆者：木村裕樹

● 林友英（?-?）

はやし・ともひで

【事績】

銀行員。1934年6月頃から渋沢敬三の書生を務め、渋沢が主宰したアチックミュージアムで民具整理等の事務を、書生たちの集まりだった柏竈社では会計などを担当した。1936年3月に東京貯蓄銀行に就職したが、1938年5月まで渋沢家に寄寓した。（『アチックマンスリー』）

【コレクションとの関係】

1936年3月18日に長野県上伊那郡伊那富村辰野で集めた足半草履をコレクションに加えた。

----- 執筆者：小林光一郎

● 林英夫（1920-2007）

はやし・ひでお

【事績】

歴史家。愛知県中島郡（現 一宮市）生まれ。立教大学文学部史学科を卒業し、兵役後、本郷高等学校と開成高等学校に勤務。1955年に立教大学専任講師となり、助教授、教授を務め、退官後は東京家政大学文学部教授、日本福祉大学知多半島総合研究所客員教授を務めた。地方史研究協議会の会長や日本史学会の要職のほか、1975年から2006年まで朝日カルチャーセンターで講師を務めた。織物業史や農村工業史を専門とし、マニファクチュア論争に大きな影響を与えた。『豊島区史』などの自治体史や古文書解読字典の編纂にも関わるなど、近世古文学にも通じていた。（東京にふる里をつくる会編 1977；無署名 1987；林英夫先生お別れの会事務局編 2007）

【著作】

林英夫『近世農村工業史の基礎過程—濃尾縞木綿織物史の研究』青木書店、1960年。

林英夫『在方木綿問屋の史的展開』埴選書、1965年。

林英夫『秤座』吉川弘文館、1973年。

林英夫『絶望的近代の民衆像—地方主義の復権』柏書房、1976年。

林英夫『ロシアを見てきた三芳の兵士』三芳町教育委員会、1989年。

【コレクションとの関係】

1950年8月に千葉県夷隅郡浪花村で集めた資料と1954年1月に愛知県中島郡起町で集めた資料をコレクションに加えた。

----- 執筆者：井上潤

● 林善茂 (1922-2013)

はやし・よししげ

【事績】

農業経済学者、農業史研究者。1941年に北海道帝国大学（のち北海道大学）予科から農学部農業経済学講座へ進み、同大助手、助教授を経て、1953年に経済学部へ転じ、教授、学部長を務めた。北海道の農業史研究をするなかで、1950年ころから70年代にかけてアイヌの農耕についても研究をおこない、論文等で発表した。道内各地の古老を訪ね、聞き取りと同時に農具や作物標本も収集した。この資料は現在、北海道博物館が所蔵している。（谷本 2014）

【著作】

林善茂『アイヌの農耕文化』慶友社、1969年。

【コレクションとの関係】

1962年に平取町二風谷で収集したカブとヒエの種子、ヒエ2種の穂の4点をコレクションに加えた。

----- 執筆者：齋藤玲子

●原田清（1894-1947）

はらだ・きよし

【事績】

愛知県北設楽郡本郷町（現 東栄町）町長、同郡三ツ瀬の林業家。1927年に「山村余技研究会」を立ち上げ、1931年に「設楽民俗研究会」を組織した。同じ頃、渋沢敬三が奥三河地方の花祭を見学した際に親交を深めている。「その内とうとう私も早川さんに伴われ花祭見物のファンとなり、（中略）原田清・佐々木嘉一・夏目一平・窪田五郎・夏目義吉等同地方の人々と親しい交わりを結ぶに至った。」と渋沢は書いている。1934年にアチックミュージアムがおこなった薩南十島調査にも参加した。（渋沢 1961; 小林 2014a）

【コレクションとの関係】

1922年から1935年にかけて、住まいのあった三ツ瀬の履物や民具などをコレクションに加えた。また、県境を越えた長野県下伊那郡神原村で集めた民具もコレクションに加えている。

----- 執筆者：小林光一郎

●比嘉景常（1892-1941）

ひが・けいじょう

【事績】

美術教育者。沖縄県首里（現 那覇市首里）生まれ。東京高等師範学校を卒業後、1922年より沖縄県立第二中学校（現 那覇高等学校）に美術教師として勤務した。前任の西銘生楽の作った美術サークル「樹緑会」を受け継ぎ、名渡山愛順や大嶺政寛、大城皓也、山元恵一、安谷屋正義ら著名な洋画家を育てた。その傍ら、旧琉球王家の尚家に通うなどして琉球美術史を研究し、「琉球画人伝」を執筆したが、戦時中の空襲で失われた。比嘉は沖縄文化、特に演劇に関心を持ち、『民芸』誌や県内の新聞・雑誌にも寄稿した。21年間、沖縄県立第二中学校で美術教育に携わり、沖縄県の美術界に大きな影響を残した。（大嶺 1983）

【著作】

比嘉景常「琉球焼物考」柳宗悦（編）『琉球の陶器（民芸叢書第4篇）』107-177ページ、昭和書房、1942年。

【コレクションとの関係】

1937年3月31日に沖縄県島尻郡真和志村で使用されていた太鼓を寄贈した。『アチックマンスリー』23号（1937年4月30日）の1937年3月31日の項に「比嘉景常氏外八名参観、同氏より民具受贈」とある。

----- 執筆者：小島摩文

●樋口秀雄（1927-1992）

ひぐち・ひでお

【事績】

歴史学者。埼玉県生まれ。1951年に法政大学文学部史学科を卒業後、東京国立博物館学芸部文部技官となった。同館で図書室長を務めたほか、女子美術大学でも教鞭をとった。社会史や美術史のほか、江戸時代の出版事情や博物館学の分野でも著作を残した。

【著作】

樋口秀雄『江戸の犯科帳』人物往来社、1962年。

樋口秀雄『浅草文庫誌』日本古書通信社、1974年。

樋口秀雄（編）『博物館学講座2 日本と世界の博物館史』雄山閣出版、1981年。

【コレクションとの関係】

1959年に長崎県平戸市浦之町で集めた民具数点をコレクションに加えた。

----- 執筆者：飯田卓

●日高松男（?-?）

ひだか・まつお

【事績】

鹿児島県大島郡十島村の口之島の者か。（羽毛田 2015a）

【コレクションとの関係】

1934年5月15日に鹿児島県大島郡十島村口ノ島で集めた玩具をコレクションに加えた。この日は、渋沢敬三をはじめとするアチックミュージアムの人びとが、就航もない鹿児島-奄美大島間の定期連絡船の視察と民俗調査をかねて口之島に上陸した日。日高は口之島で

一行を迎え入れ、資料を寄贈したのだと考えられる。ちなみに採集者は「A・M同人 日高松男」となっている。A・M同人とはアチックミュージアム同人のことで、採集者の個人名にこの語が冠されているのは他に広島に住んでいた結城次郎の例があるのみ。短時間で一行と親しくなったか、何度か東京に通って親交を深めたと推測される。

----- 執筆者：飯田卓

● 樋畑雪湖（1858-1943）

ひばた・せっこ

【事績】

郵便博物館館員、交通史および郵便史の研究者。本名は正太郎。信州松代藩士 樋畑翁助の長男として1858年、江戸深川の真田邸下屋敷に生まれた。1862年に両親と松代に移り、1864年に安藤広重の弟子 酒井雪谷に師事、雪湖と号するようになった。また、山寺常山の文庫で地図の描き方を学ぶ。1875年に上京し、浮世絵の富岡判六や洋画の川上冬崖にも学んだ。この年、陸軍参謀本部の図生に採用されるも、母の病により帰郷し、1878年に長野県庁の図生となり、地図の制作にたずさわった。長野県史編纂掛、駅通御用掛兼務を経て、1885年に通信省に出向、駅通局勤務となった。1892年に郵務局経理課物品課長に就任後、切手や絵葉書の図案作成、郵便用品の改良研究などに従事するかたわら、郵便博物館（後の通信博物館、現 郵政博物館）にかかる資料の収集や保存にも尽力した。1902年に同館が設立されると、主任として館の運営に貢献した。（久保監修 1952; 横山編 1982; 井上 2010; 木村 2012）

【著作】

樋畑雪湖『江戸時代の交通文化』刀江書院、1931年。

樋畑雪湖『日本郵便切手史論』日本郵券倶楽部、1930年。

樋畑雪湖『日本絵葉書史潮』日本郵券倶楽部、1936年。

【コレクションとの関係】

1929年5月21日に中国上海で集めた「猿の面被り人形」をコレクションに加えた。

----- 執筆者：木村裕樹

●平野元三郎 (1910-1990)

ひらの・もとさぶろう

【事績】

考古学者、文化行政官。東京生まれ。早稲田大学を卒業し、1952年から千葉県教育委員会に務めた。1950年における文化財保護法の制定・施行によって飛躍的に増加した埋蔵文化財の調査や報告をひき受けると同時に、青木昆陽の伝記といった文献史学方面の業績も残した。(上田・西沢・平山・三浦監修 2015)

【著作】

平野元三郎「嘉禄の陽刻板碑」『考古学雑誌』25(1): 50-51、1935年。

平野元三郎『青木昆陽伝』隣人社、1968年。

海老名雄二・平野元三郎『千葉今昔物語—新房総歳時記』多田屋、1974年。

【コレクションとの関係】

1956年4月24日に千葉県千葉市で集めたザルをコレクションに加えた。

----- 執筆者：飯田卓

●ビルケット = スミス、カイ (1893-1977)

Birket-Smith, Kaj

【事績】

デンマークの言語学者、人類学者、考古学者。グリーンランドや北米大陸の北方先住民の研究をおこなった。1921年にKnud Rasmussenが組織した第5回トゥーレ学術調査隊に参加し、北米大陸の極北地域に暮らす先住民の実態を明らかにした。1940年にデンマーク国立博物館民族誌部門部長、1945年にコペンハーゲン大学教授となり、1952年に英国王立人類学会からハックスリー記念賞を受賞した。(Gollins 1946; 無署名 1955)

【著作】

Kaj Birket-Smith 1960 *The Eskimos*, New York: The Humanities Press.

【コレクションとの関係】

1954年8月10日に90点あまりのグリーンランド資料をコレクションに加えた。この日付は、「採集期」の欄でなく「収蔵期」の欄に記されている。おそらく、もっと古い時期に集

められていたものが日本に送られたのだろう。これらの資料が日本の考古資料や台湾の民族資料と交換されたことは、当時保谷民博を運営していた日本民族学協会の学会誌『民族学研究』で報告されている。なお、ビルケット＝スミス関連の資料の一部は、国立民族学博物館の企画展「未知なる大地 ―グリーンランドの自然と文化」（2014年）で展示された。

----- 執筆者：飯田卓

●比留間音吉（1880-1966）

ひるま・おときち

【事績】

達磨生産者。渋沢敬三の「旅譜」によると、1928年11月23日に渋沢が藤木喜久磨とともに比留間を訪ね、達磨製造を視察していることがわかる。（渋沢 1993a）

【コレクションとの関係】

1927年から1928年にかけて、埼玉県入間郡三ヶ島村と東京都北多摩郡村山村で集めた張子の達磨など20点あまりをコレクションに加えた。多数の達磨のなかには髭達磨や目無達磨もあり、達磨の木型も含まれている。押絵雛や破魔弓、羽子板などの玩具も多い。

----- 執筆者：木村裕樹

●深井五郎（?-?）

ふかい・ごろう

【事績】

日清護謨会社社員。1925年、渋沢栄一の唱導する道徳経済合一主義に基づいて主に商工業者の知徳を進め人格を高尚にすることを目的とする竜門社に、通常会員として入社した。当時の肩書きは日新護謨会社社員。1927年に大分県立日田山林学校で職を得たが同年に退職し、その後の経歴は不詳。1928年9月3日渋沢栄一宛て山田準の書翰によると、深井は鹿児島高等学校における山田の教え子であり、栄一を顧問として陽明学の読書を進める陽明会の幹事に推薦されている。（渋沢青淵記念財団竜門社編 1962; 中牧 2010; 『竜門雑誌』）

【コレクションとの関係】

1927年に大阪府や岩手県、山形県などで集めた玩具十数点をコレクションに加えた。ユニークなものとしては、和歌山県高野山で集めた朱塗りの杓文字がある。この杓文字には

3 銭の切手が貼られ、渋沢敬三に宛ててそのまま投函されたことがわかる。

----- 執筆者：木村裕樹

● 福富忠男 (1893-1970)

ふくとみ・ただお

【事績】

地質学者。第八高等学校を経て東京帝国大学地質学科を卒業し、農商務省技師、東京帝国大学講師となった。ドイツ留学を経て、1925年に北海道帝国大学教授。国内外の地質調査に従事し、退職後は大成建設の顧問を務めた。(福富 1966)

【著作】

福富忠男『北海道の金鑛』北海道地下資源開発研究会、1950年。

福富忠男『実用土土地質学』朝倉書店、1952年。

福富忠男『建設と岩石』ラティス、1968年。

【コレクションとの関係】

1927年11月8日にマーシャル諸島ヤルト島で集めたヤシの葉の団扇3点をコレクションに加えた。

----- 執筆者：菊地暁

● 藤木喜久磨 (1894-1961)

ふじき・きくま

【事績】

民俗学者、画家。本名は喜久馬。早川孝太郎と共に洋画を学んだことが縁で、早川が参加していたアチックミュージアムの専従画家および整理担当者となった。アチックミュージアムに住みこんだ最初の研究員。アチックミュージアムの活動初期から主宰者 渋沢敬三の片腕となり、戦後に渋沢が漁業制度資料調査保存事業を手がけるまで、長く渋沢の研究活動に関わった。渋沢の祭魚洞文庫では豆州内浦漁民史料を整理し、アチックミュージアム図書室では熊本縣水産誌附図を筆写したほか、郷土玩具の製作や骨董品の破損修理なども得意とした。古文書解読の能力が高く、漁業制度資料調査保存事業時代にも筆写や照合などを担当した。渋沢栄一伝記資料編纂所所員、日本実業史博物館準備室勤務、金曜会（詳

細不明) 幹事なども務めた。(洪沢敬三伝記編纂刊行会編 1979; 無署名 2006; 小林 2014b)

【コレクションとの関係】

1920年代後半から1930年代前半にかけて収集した150点の資料をコレクションに加えた。この時期は、藤木がアチックミュージアムの専従研究者として玩具や民具の収集を担当していた時期にあたり、150点の資料は藤木の活動を直接に反映している可能性が高い。

----- 執筆者：小林光一郎

● 伏根弘三 (1874-1938)

ふしね・こうぞう

【事績】

伏古（現 北海道帯広市）のアイヌ文化伝承者、活動家。農業で成功し、1895年には私財を投じて帯広にアイヌ学校を設立、道内外を回り寄付金等を得て教育所を続け、1904年の公立第二伏古尋常小学校を設立に導いた。教育のみならず、旧土人保護法の改正に奔走し、禁酒を提唱するなど、アイヌの生活向上等に尽力した。(喜多 1987; 小川・山田編 2001; 2002)

【著作】

伏根弘三「アイヌ生活の変遷」『財団法人啓明会第十八回講演集』52-72ページ、財団法人啓明会事務所、1926年。

【コレクションとの関係】

1928年3月採集とされる矢筒1、矢2、イナウ1の計4点があるが、博物館に収蔵された経緯は不明。

----- 執筆者：齋藤玲子

● 藤森康雄 (?-?)

ふじもり・やすお

【事績】

財団法人日本民族学協会附属民族学博物館（保谷民博）の職員。主任職員だった宮本馨太郎のもとで、古河静江とともに標本資料の整理や登録を担当した。1949年11月に刊行され

た『民族学博物館概要』の職員紹介欄にすでに名まえがあることから、戦後の早い時期から職員となっていたことがわかる。退職した時期は不明。(民族学博物館編 1949)

【コレクションとの関係】

1951年に古河静江とともに埼玉県入間郡入間川町で集めた七夕祭の飾り物や、1955年に東京都調布市で集めた箆など10点をコレクションに加えた。

----- 執筆者：木村裕樹

● 藤原三治 (？-？)

ふじわら・さんじ

【事績】

岩手県盛岡市加賀野の在住者。アチックミュージアムから刊行された『民具問答集』において、県内各地（上閉伊郡遠野町、九戸郡晴山村谷地渡、同郡葛巻町五葉久保、紫波郡見前村、稗貫郡内川目村）で採集したワッパ、コダシ、カゴ、ユキゲタ・クリノキゲタ、馬子ツナギノ藁馬について回答した。回答期はいずれも1934年。『民具問答集』は、民具1点1点の製作法や用法、現地での名称や由来、伝承などを使用地の人たちに尋ね、得られた情報をまとめたもの。(アチックミュージアム編 1937)

【コレクションとの関係】

1931年に岩手県で集めた50点あまりの資料をコレクションに加えた。

----- 執筆者：木村裕樹

● 古河静江 (？-？)

ふるかわ・しずえ

【事績】

財団法人日本民族学協会附属民族学博物館（保谷民博）の戦後期の職員。藤森康雄とともに標本資料の整理および登録にあたった。経歴の詳細は不明。1949年11月に刊行された『民族学博物館彙報』の職員紹介欄にすでに名まえがあること、1959年から1961年にかけておこなわれた九学会連合佐渡調査に参加して民具調査を担当していること、古河の名で登録された標本資料の登録年月が1951年8月から1962年5月にかけてであること、保谷民博が1962年に閉鎖され、1963年まで文部省史料館（当時）への標本資料移管手続きがおこ

なわれたことなどから推して、古河の勤務は1949年頃から1963年頃まで10年以上にわたったと考えられる。（宮本常一 1979; 民族学博物館編 1949）

【著作】

古河静江「民具」九学会連合佐渡調査委員会（編）『佐渡—自然・文化・社会』225-239ページ、平凡社、1964年。

【コレクションとの関係】

上述の佐渡調査時に集めた資料（受け入れは1960年）だけでなく、保谷民博が所在した保谷町近辺や伊豆諸島、北海道、長崎県など、日本国内のさまざまな場所で資料をコレクションに加えた。

----- 執筆者：飯田卓

● **古野清人**（1899-1979）

ふるの・きよと

【事績】

宗教人類学者。デュルケム宗教社会学の紹介、東アジア、東南アジア宗教の民族誌的研究などに貢献。福岡県宗像郡須恵（現 宗像市）生まれ。幼少期、同郡鐘崎町の親戚に預けられる。東筑中学校、第三高等学校を経て、東京帝国大学文学部宗教学科を卒業した。1928年、東京帝国大学附属図書館嘱託となる。1929年、帝国学士院の嘱託として台湾の高砂族慣習調査に従事。1930年、デュルケム『宗教生活の原初的形態 上巻』（刀江書院）を翻訳した。1937年、日本民族学会附属民族学研究所の開設にともない、日本民族学会主事となった。1940年、南満洲鉄道株式会社東亜経済調査局の嘱託として、大陸部の民族調査に従事。1943年、民族研究所研究員として東南アジアの民族調査に従事。戦後は天理語学専門学校長兼教授、九州大学教授、北九州大学長、東京都立大学教授、獨協大学教授、武蔵大学教授、駒澤大学教授などを歴任。文化財保護審議会専門委員や国立民族学博物館評議員なども務めた。蔵書は天理大学に収められ「古野文庫」となっている。（古野 1980; 佐々木 1988）

【著作】

古野清人『隠れキリシタン』至文堂、1959年。

古野清人『原始宗教』角川書店、1964年。

古野清人『獅子の民俗』岩崎美術社、1968年。

古野清人『古野清人著作集（全7巻＋別巻1）』三一書房、1972-1974年。

【コレクションとの関係】

コレクションに加えた資料は200点近くにのぼる。その大半は、1939年に宮本馨太郎とともに樺太（サハリン）で集めたものである。古野と宮本は、日本民族学会の同僚としてしばしば活動を共にした。

----- 執筆者：菊地暁

● 祝宮静（1905-1979）

ほうり・みやしず

【事績】

歴史学者、民俗学者。京都市下鴨の社家に生まれる。京都府立第一中学校を経て國學院大學を卒業。卒論では法制史家 植木直一郎の指導のもと、神社経済を研究した。卒業後、植木から渋沢敬三に紹介され、渋沢が主宰していたアチックミュージアムで豆州内浦漁民資料の整理作業に当たる。民俗探訪旅行にも参加。戦後、母方の郷里 大分で中学校長をしていたところ、渋沢敬三の誘いを受け、文化財保護委員会に勤務するようになる。宮本馨太郎や田原久とともに民俗資料保護体制の確立に尽力した。退職後は、神道関係者を中心に組織された民俗文化財研究協議会の中心メンバーとなり、文化財保護法の改正運動を展開。1975年の法改正において、無形民俗文化財に指定制度が導入された。（菊地 2001）

【著作】

祝宮静『豆州内浦漁民史料の研究』隣人社、1966年。

祝宮静『日本民俗資料入門』岩崎美術社、1971年。

祝宮静（編）『祝宮静博士古稀記念著作集—神道・神社・生活の歴史』祝宮静博士古稀記念著作集刊行会、1976年。

【コレクションとの関係】

1933年から1937年にかけて、近畿地方や中国地方、九州地方などから集めた履物約20点をコレクションに加えた。とくに大分県のものが多い。

----- 執筆者：菊地暁

● 細貝平作（?-?）

ほそかい・へいさく?

【事績】

新潟の人。『アチックマンズリー』第28号に「(1937年10月)10日 細貝平作氏（新潟）来訪」と記録されている。その他の詳細は不明。（『アチックマンズリー』）

【コレクションとの関係】

1935年から1936年にかけて新潟県南魚沼郡や中魚沼郡、古志郡などで集めた民具をコレクションに加えた。

----- 執筆者：飯田卓

● 保谷信伊（?-?）

ほたに・のぶよし?

【事績】

東京府北多摩郡保谷村上保谷（現 西東京市）の住民。保谷姓を持つことから、上保谷の旧家の一つと推測される。（高橋 1935; 西東京市・高橋文太郎の軌跡を学ぶ会編 2008）

【コレクションとの関係】

1962年1月に東京府北多摩郡保谷町下保谷で収集した養蚕用具など、30点以上の資料をコレクションに加えた。

----- 執筆者：木村裕樹

● 穂積真六郎（1889-1970）

ほづみ・しんろくろう

【事績】

植民地官僚。東京出身。東京帝国大学法科大学を卒業後、同大学院を経て1914年朝鮮総督府に入府した。1932年に殖産課長、1941年に依願免本官。1942年より京城商工会議所会頭、朝鮮商工会議所会頭、京城電気株式会社社長、1944年より朝鮮興業社長。1946年には朝鮮引揚同胞世話会会長を務めた。1947年に参議院議員となった。法学者 穂積陳重の三男で、渋沢敬三にとっては従兄にあたる。（秦編 2002; 『読売新聞』1970年5月25日付）

【著作】

穂積真六郎『わが生涯を朝鮮に』友邦協会、1974年。

【コレクションとの関係】

1927年に朝鮮風糸巻等、朝鮮で集めた玩具等32点をコレクションに加えた。

----- 執筆者：永井美穂

● 穂積陳重 (1855-1926)

ほづみ・のぶしげ

【事績】

法学者。愛媛県宇和島出身。開成学校で法律学を修め、イギリスとドイツに留学。1881年に東京大学講師となった。1882年に同教授。1890年に貴族院議員となる。1893年に発足した法典調査会で主査委員を務め、明治民法起草の中核を担った。1916年に枢密院顧問官、1917年に帝国学士院院長、1925年に枢密院議長を歴任。渋沢栄一の長女 歌子の夫であり、渋沢敬三にとっては伯父にあたる。渋沢家との結び付きが強く、渋沢敬三も幼少時より大きな影響を受けた。(穂積 1929; 穂積 1988; 秦編 2002; 渋沢史料館編 2011)

【著作】

穂積陳重『法典論』哲学書院、1890年。

穂積陳重『隠居論』哲学書院、1891年。

穂積陳重『法律進化論』岩波書店、1924年。

穂積重遠(編)『穂積陳重遺文集(全4冊)』岩波書店、1934年。

【コレクションとの関係】

1921年にジャワ島(インドネシア)の資料を、1922年に出身地 愛媛県宇和島の「牛鬼」2点をコレクションに加えた。

----- 執筆者：永井美穂

● 本間和助（?-?）

ほんま・かずすけ／わすけ

【事績】

経歴の詳細は不明。戦中・戦後の時期に、東京の三田綱町にあった渋沢敬三邸の敷地内に家族で寄寓していた。渋沢邸に寄寓したこれらの人々は、自らを「渋沢村」と呼んだという。（中山編 1956）

【コレクションとの関係】

1933年に新潟県西蒲原郡で集めた石臼と鉦をコレクションに加えた。

----- 執筆者：小林光一郎

● 前田長八（?-?）

まえだ・ちょうはち

【事績】

郷土史家。伊豆七島の新島出身。伊豆七島に関わる郷土研究を行った。藤木喜久磨が新島調査をおこなったさい、藤木は前田に寄宿先の斡旋を頼んだ。このことをきっかけに藤木との関係が深まり、藤木の調査後も古文書の文字を藤木に読んでもらったり、東京白木屋に古書が出ると教えてもらったりするなど、たびたび音信を交わした。（前田 1973）

【コレクションとの関係】

渋沢敬三が主宰するアチックミュージアムで藤木が仕事をしていたことから、新島で集めた民具1点をコレクションに加えた。

----- 執筆者：小林光一郎

● 増田精一（1922-2010）

ますだ・せいいち

【事績】

考古学者。1942年に東京帝国大学東洋史学科に入学するが、翌年に学徒出陣で召集された。帰還後に復学し、1948年に同学科を卒業後、東京国立博物館東洋課に勤務した。1950年から1951年にかけて九学会連合が組織した対馬調査や、1956年に江上波夫が率いる東京大学

イラン・イラク学術調査などに参加した。1965年に東京教育大学文学部史学方法論教室助教授、1975年に筑波大学歴史人類学系教授となった。退職後は東京家政学院大学教授も務め、江上波夫とともに古代オリエント博物館の創設に携わった。研究領域は日本からオリエントまで幅広い。(石田 2010; 常木 2010)

【著作】

増田精一『埴輪の古代史』新潮社、1976年。

増田精一『オリエント古代文明の源流』六興出版、1986年。

【コレクションとの関係】

20点あまりの資料をコレクションに加えているが、採集地や採集年代などはいずれも不明。

----- 執筆者：坂野徹

● 増山清太郎 (1910-2000)

ますやま・せいたろう

【事績】

1919年9月に渋沢栄一が棚橋絢子の乞いに応じて魚形の木片に遊魚銘と和歌を題したことを『渋沢栄一伝記資料』で記した。事績は詳らかでないが、登山に学究心を抱き、山岳図書の収集にも注力したことがわかっている。彼の蔵書は、旧制東京商科大学一橋山岳部およびその後身である一橋大学一橋山岳部の出身者で構成する「針葉樹会」の他の会員の蔵書とともに、南アルプス芦安山岳館の「針葉樹文庫」に収められている(渋沢青淵記念財団竜門社編 1964b; 蛭川編 2009; 藤井 2010)。

【コレクションとの関係】

1935年に長野県北安曇郡北城村で集めた履物と、1936年に新潟県東蒲原郡西川村で集めた履物をコレクションに加えた。

----- 執筆者：井上潤

●松原久治（1904-?）

まつばら・ひさじ

【事績】

鳥取県鳥取市生まれ。醇風尋常小学校、鳥取県立商業学校を経て慶應義塾大学高等部を卒業し、毎日新聞記者となる。バーバラ久治の名でコント「男・女」が『文芸時代』に掲載される。毎日新聞社終身名誉職員。（金田編 1959; 山下 1990）

【著作】

松原久治『鳥取百景—私眼』大因伯、1975年。

【コレクションとの関係】

1936年に愛媛県宇和島市で足半草履を集めているが、松原の仕事や活動との関係は不明。

----- 執筆者：卯田宗平

●松本信広（1897-1981）

まつもと・のぶひろ

【事績】

民族学者、東洋史学者。東京府芝区（現東京都港区）生まれ。慶應義塾大学史学科卒業。学生時代から柳田国男の知遇を得、1920年には柳田の東北旅行に佐々木喜善と同道した。1924年から1928年までパリ大学に留学し、日本語系統論と日本神話論の博士論文を執筆した。帰国後、慶應義塾大学に着任し、1961年に退職するまで民族学や東南アジア史などを講義した。1932年に岡正雄や杉浦健一、八幡一郎らとともに「南の会」を結成し、メンバーでニューギニア調査をおこなった。1938年、慶應義塾大学の派遣で中国江南地方を調査。1957年から58年にかけて、日本民族学協会がタイやラオス、カンボジアに派遣した第1回東南アジア稲作民族文化総合調査団で団長を務めた。蔵書は慶應義塾大学図書館に収められ、「松本文庫」になっている。（『稲・舟・祭』刊行世話人編 1982; 伊藤 1988）

【著作】

松本信広『日本神話の研究』同文館、1931年。

松本信広『印度支那の民族と文化』岩波書店、1942年。

松本信広『日本民族文化の源流（全3巻）』講談社、1978年。

【コレクションとの関係】

1957年から1958年にかけて、カンボジアを中心に大陸部東南アジアで集めた資料を30点近くコレクションに加えている。明らかに、東南アジア稲作民族文化総合調査に際して集めたものである。

----- 執筆者：菊地暁

●馬淵東一（1909-1988）

まぶち・とういち

【事績】

社会人類学者。台湾、インドネシア、沖縄で調査研究を行った。台北帝国大学文政学部史学科土俗人種学研究室で学んだ後、研究室で原住民族調査に従事する。馬淵が中心的役割を果たした『台湾高砂族系統所属の研究』は、21世紀にはいり、台湾において中文版が翻訳、刊行されており、時代をこえてその学術的価値が認められている。第二次世界大戦の前や大戦期中は、満鉄東亜経済調査局、台北帝大南方人文研究所、海軍マカッサル研究所等に所属し、大戦後は東洋大学、東京都立大学、琉球大学、南山大学の教授などを歴任した。人間の集団の動態を、呪術信仰、社会組織、政治組織、さらには移動や系譜の記憶、神話等の歴史認識、婚姻や交易の共同体意識を通して洞察した。ミクロな現象を丁寧なひろいあげながら、広い視点で対象をとらえることのできる、日本を代表する社会人類学者といえる。また、台湾原住民族の言語にも精通していた。（馬淵 1974-1988; 日本順益台湾原住民研究会編 2002）

【著作】

馬淵東一『馬淵東一著作集（全3巻＋補巻1）』社会思想社、1974-1988年。

【コレクションとの関係】

1938年から1939年にかけて台湾で集めた資料をコレクションに加えた。これらの資料の収集は、日本民族学会附属民族学博物館（保谷民博）での展示を目的としたもので、1939年の開館直前に行なっている。

----- 執筆者：野林厚志

●丸橋富五郎（?-?）

まるはし・とみごろう

【事績】

群馬県吾妻郡岩島村（現 吾妻町）の農業家。1906年、同村における有限責任信用利用組合（現在の農業協同組合金融部）の設立に参加し、監事や信用評定委員を務めた。産業組合中央会が編纂した『模範産業組合員事績』では、次のとおり優良組合員として特記されている。「組合を信用し、余裕金は必ず組合へ貯金とし、養蚕資金・製麻資金に必要な節は組合を利用し、返済期日を確守し、また出資の増加に意を致し、家族を部長として部内の貯金勧誘・出資金集金等に当たらしめたるなど、他の模範なり」（適宜現代表記に改めた）。（産業組合中央会編 1929）

【コレクションとの関係】

群馬県吾妻郡岩島村三島で集めた麻標本をコレクションに加えた。年代は不明。

----- 執筆者：飯田卓

●丸山学（1904-1970）

まるやま・まなぶ

【事績】

英文学者、民俗学者。熊本県玉名郡江田村（現 菊水町）生まれ。広島高等師範学校を卒業。1927年、熊本中学に赴任、この時の教え子に劇作家の木下順二がいる。木下は丸山の小泉八雲研究を手伝い、その成果はのちに『小泉八雲新考』（1936年）として刊行される。1929年、広島文理科大学に入学、卒業後は同校に勤務。大学在学中から民俗研究に着手、当時広島にいたアチックミュージアム同人の磯貝勇や結城次郎とともに瀬戸内を採訪する。戦時中は中国戦線にあり、軍務の一環として民俗採訪に従事した。広島原爆で蔵書・資料を失う。戦後は熊本に戻り、熊本商科大学に勤務。県下を精力的に採訪・研究し、熊本の民俗学をリードした。（「百人が語る丸山学」編集委員会編 1971；木下 1996）

【著作】

丸山学『小泉八雲新考』北星堂書店、1936年。

丸山学『大陸の思想戦』日黒書店、1942年。

丸山学『熊本県民俗事典』日本談義社、1965年。

【コレクションとの関係】

1935年に熊本県球磨郡の資料を5点コレクションに加えているほか、広島県の資料も収めている。

----- 執筆者：菊地暁

●水上一久 (1912-1962)

みづかみ・いちきゅう

【事績】

歴史学者。石川県金沢市生まれ。1932年に第四高等学校文科甲類を卒業、1935年に東京帝国大学文学部国史学科を卒業。1935年に鹿児島県史編纂委員として嘱託を受け、1943年に立命館大学文学部教授を経て、1945年より第四高等学校講師、1946年同校教授、1950年金沢大学金沢高等師範学校教授、1952年金沢大学法文学部助教授、1958年同教授を歴任した。1962年、在職中に急逝した。(福富 1963)

【著作】

水上一久『中世と荘園と社会』吉川弘文館、1969年。

【コレクションとの関係】

1959年に採集した竹製のスキーを3点寄贈している。いずれも「採集地」は金沢市で、水上が金沢大学の教授になった翌年である。

----- 執筆者：小島摩文

●水野陳好 (?-?)

みずの・のぶよし

【事績】

渋沢農場長、三本木農業会(現 三本木農業協同組合)会長、十和田市長。1920年に東京帝国大学を卒業し、渋沢農場の5代目場長として三本木に赴任した。稲生川開削をなすとげた新渡戸伝(にとべ・つとう)の偉業を知り、その遺志を継いで稲生川流域の開墾にむけて379回もの陳情を行ったため、陳情の陳好と呼ばれたという。1937年に国による事業が決定し、1944年に国営稲生川が完成した。これは、最初の稲生川が完成してから実に85年目にあたる。水野は、青森県三本木町(現 十和田市)町長就任後に町村合併を推進し、1955

年に市制を施行して初代十和田市長を務めた。（渋沢青淵記念財団竜門社編 1957; 1964a; 小笠原 1996）

【コレクションとの関係】

1926年と1927年に、青森県下（弘前市が多い）で集めた玩具を40点以上コレクションに加えた。

----- 執筆者：井上潤

● 水原洋城（1931- ）

みずはら・ひろき

【事績】

霊長類学者。1963年に日本モンキーセンター所員となったのち、東京農工大学教員。ニホンザルの野外観察を基礎として、その行動や社会を解明するのに貢献した。一般読者や子どもに向けた著作も多数ある。また、1959年に財団法人日本モンキーセンターの第二次ゴリラ探検に参加し、日本におけるアフリカ研究の草分けの役割をはたした。（河合 1961）

【著作】

水原洋城『サルの国の歴史—高崎山15年の記録から』創元社、1971年。

水原洋城『サル学再考』群羊社、1986年。

水原洋城『猿学漫才—ニホンザル、人間を笑う』光文社、1988年。

【コレクションとの関係】

1959年に、河合雅雄と連名でウガンダの鎌をコレクションに加えた。これは、上述したゴリラ探検のさいに持ち帰られたものである。寄贈の仲介をした渋沢敬三は、このとき日本モンキーセンターの会長を務めていた。河合と水原が踏破したのは、現在の国名でいうとケニア、ウガンダ、ルアンダ、コンゴ民主共和国（旧ザイール）、ブルンディ。

----- 執筆者：飯田卓

●三田村耕治 (1907-1945)

みたむら・こうじ

【事績】

民俗学者、教員。滋賀県高島郡川上村字福岡（現 高島市今津町）生まれ。今津中学を経て國學院大學を卒業し、郷里の町立大溝実科高等女学校や県立長浜高等女学校に奉職した。柳田国男の指導を受け、民俗学の調査研究に従事し、『旅と伝説』『民間伝承』などに寄稿。1935年、柳田国男還暦記念 日本民俗学講習会に参加した。37歳で没。（無署名 1975）

【著作】

三田村耕治「滋賀県長浜昔話集」笠松彬雄ほか『日本民俗誌大系 4 近畿』421-453ページ、角川書店、1975年。

【コレクションとの関係】

1936年から1937年にかけて、郷里の滋賀県高島郡川上村で集めた履物をコレクションに加えている。

----- 執筆者：菊地暁

●美濃部民子 (1886-1966)

みのべ・たみこ

【事績】

教育家 菊池大麓の三女。御茶ノ水高等女子師範学校を卒業し、1903年に法学者 美濃部達吉と結婚した。弟の菊池正士とともに、渋沢敬三と親交を深めた。（人事興信所編 1937b; 『朝日新聞』1966年1月14日付）

【コレクションとの関係】

1922年に中国の「鳳凰」とシンガポールの「水牛車」をコレクションに加えた。

----- 執筆者：永井美穂

●宮尾しげを（1902-1982）

みやお・しげを

【事績】

本名は重男。漫画家、版画家、江戸風俗研究家、民俗芸能研究家。東京都浅草生まれ。岡本一平に師事。東京毎日新聞社員となり、1922年「東京毎夕新聞」に子供向け物語漫画「漫画太郎」を連載してデビューした。漫画の代表作に『団子串助漫遊記』（講談社、1925年）がある。1934年に児童漫画会の初代会長となった。画業の参考を目的として民俗芸能や江戸風俗の研究に着手、戦後はこの方面に専念する。国や東京都の文化財保護審議会委員、国立劇場専門委員を務めたほか、日本近世文学会、日本浮世絵協会、日本風俗史学会、日本民俗芸能協会等の設立・運営で活躍した。演劇研究家の宮尾慈良や近世文芸研究家の宮尾与男は息子。（無記名 1983）

【著作】

小寺融吉・宮尾しげを・新井国次郎『をどりの小道具』丸岡出版社、1944年。

本田安次・宮尾しげを『東京都の郷土芸能』一古堂書店、1954年。

宮尾しげを（編注）『江戸小咄集（1-2）』平凡社東洋文庫、1971年。

【コレクションとの関係】

1928年に大阪府の影絵をコレクションに加えている。

----- 執筆者：菊地暁

●三宅きよ子（?-?）

みやけ・きよこ

【事績】

「三宅きよ」のことか。三宅きよは、1898年、深川福住町の渋沢篤二家に女中として入った。同家の転居に伴って三田綱町邸に移転し、1943年まで勤めた。（中山編 1956）

【コレクションとの関係】

1938年に石川県羽咋郡中荘村の馬の沓をコレクションに加えた。

----- 執筆者：永井美穂

●三宅宗悦 (1905-1944)

みやけ・むねよし

【事績】

医学者、形質人類学者。京都市生まれ。山口高等学校を卒業後に京都府立医科大学に入学し、浜田耕作や清野謙次らが牽引した京都帝国大学文学部の考古学教室でも学んだ。1930年に京都帝国大学医学部助手、1933年に同講師、1938年に満洲国立中央博物館に所属し、1939年に同奉天分館長となった。1941年に招集されてフィリピンレイテ島に赴き、同地で戦死した。

1931年に山口県の土井ヶ浜で発掘調査をおこない、戦後の調査を先がけた。また、洪沢敬三が主宰したアチックミュージアムとも交流し、1934年におこなわれた薩南十島調査に参加した。後者の報告は、岡茂雄が経営した岡書院の雑誌『ドルメン』に連載された。(三宅 1934a; 1934b; 1934c; 1934d; 1934e; 1934f; 無署名 1934; 角田 1994; 山口編 2005)

【著作】

水野清一・金関丈夫・三宅宗悦『羊頭窪— 関東州旅順鳩湾内における先史遺跡』東亜考古学会、1943年。

【コレクションとの関係】

1937年に鹿児島県大島郡東方村の履物をコレクションに加えた。薩南十島調査のときに集めたものと思われる。

----- 執筆者：飯田卓

●宮崎静思 (?-?)

みやざき・せいし?

【事績】

新潟県新井市月岡（現 妙高市）に在住。

【著作】

宮崎静思『静思抄— 句集』博物短歌会、1973年。

【コレクションとの関係】

1937年4月に新潟県中頸城郡和田村で集めた資料をコレクションに加えた。

----- 執筆者：卯田宗平

● 宮下恒（?-?）

みやした・ひさし

【事績】

東京市養育院安房分院主務。1922年6月11日に同分院開設記念会が開催されるにあたり、同院を訪れた初代院長 渋沢栄一を出迎えた。東京養育院は、明治の初めに首都東京の困窮者や病者、孤児、老人、障害者を保護する施設として、現在の福祉事業の原点として設立された。安房分院は、その事業拡大の中で、長期療養を必要とする人たちのために千葉県船形町（現 館山市）に設けられた。（渋沢青淵記念財団竜門社編 1960b; 1964b; 藤井 2010）

【コレクションとの関係】

1935年に千葉県安房郡の複数地点で集めた履物や笠などをコレクションに加えた。

----- 執筆者：井上潤

● 宮本璋（1897-1973）

みやもと・あきら

【事績】

昭和期の生化学者。渋沢敬三が主宰したアチックミュージアムの初期（アチック・ミュージアム・ソサエティ）のメンバーの一人。東京市神田生まれ。東京帝国大学卒業後、ベルリンのカイザー・ヴィルヘルム研究所に留学し、東京帝国大学医学部生化学助教授として活動したが、主任教授と衝突し、教授の職を棒にふる。1942年にジャカルタ医科大学に赴任し、電気泳動学や農村医学の分野で先駆的な仕事を行った。後に東京医科歯科大学医学部長を務めた。戦後、当時の東大や医歯大の学生自治会を牛耳っていた全学連反主流派の寄付金の強請に際して、元日銀総裁の渋沢敬三を紹介し、血の気の多い学生の度肝を抜いた逸話がある。日本山岳会の古参会員の一人。（国立民族学博物館編 2013）

【コレクションとの関係】

1914年から1928年にかけて日本各地や中国などで集めた玩具などをコレクションに加え

た。その数は70点あまり。ただし、そのほかに「採集者 宮本」とだけ記録されたものも宮本璋の収集である可能性が高く、それらを合わせると150点近くの数にのぼる。

----- 執筆者：井上潤

● 宮本馨太郎 (1911-1979)

みやもと・けいたろう

【事績】

民俗学者。東京市下谷区（現 東京都台東区）池之端出身。筆名 宮本桂太郎、桂太郎、三宅朗、三宅正雄。1935年に立教大学文学部史学科を卒業し、同大学文学部助手となる。1937年に日本民族学会附属民族学研究所研究員、1942年に立教大学文学部講師。1946年に財団法人日本民族学協会評議員、1949年に立教大学文学部教授、1950年に財団法人日本常民文化研究所理事、1951年に社団法人日本博物館協会理事、1968年に文化財保護審議会専門委員、1971年に国立歴史民俗博物館基本構想委員会委員、1975年に日本民具学会創設幹事。

1929年、父 宮本勢助とともに渋沢敬三が主宰するアチックミュージアムに出入りし始め、同人として調査研究活動を行う。勢助の影響で服飾史に関心を寄せ、勢助とともに宮本家としても資料収集を行った。器械好きが高じて、写真や動画で調査活動や資料の記録を多く残している。1937年にアチックミュージアムの民具が保谷の日本民族学会（後に日本民族学協会）附属民族学博物館に移されて以降も、長年にわたって資料の整理、管理にあたった。戦後は、博物館法制定や全国民俗資料緊急調査など文化財行政に深く関わり、各地の博物館や諸学会の設立にも尽力した。民俗学者 宮本瑞夫の父。勢助と馨太郎の関係資料は一般財団法人宮本記念財団が所蔵している。（宮本馨太郎 1985; 近藤編 2001; 宮本瑞夫 2005）

【著作】

宮本馨太郎『燈火—その種類と変遷』六人社、1964年。

宮本馨太郎『かぶりもの・きもの・はきもの（民俗民芸叢書24）』岩崎美術社、1968年。

宮本馨太郎『民具入門』慶友社、1969年。

宮本馨太郎『めし・みそ・はし・わん（民俗民芸叢書76）』岩崎美術社、1973年。

宮本馨太郎『民俗博物館論考』慶友社、1985年。

【コレクションとの関係】

1935年から1962年にかけて、多くの資料を収集している。1938年の樺太調査では、古野清人とともに「浅黄地白斑点模様衣」「ホクト」等の衣服、「浅黄地下駄」「毛皮長靴」等の履

物、「女神偶像」「巫女腰帯」等の信仰関係用具、「木皿」「匙」等の食器、「俎板」「木製長方形搗鉢」等の調理具等、178点を収集した。また、古河静江と連名で、1955年に山梨県北都留郡丹波山村の「背負縄」「杓子」等14点を収集した。単独での収集も合わせると、その数は300点以上にのぼる。

----- 執筆者：永井美穂

● 宮本勢助（1884-1942）

みやもと・せいすけ

【事績】

服飾史研究家・風俗史家。東京美術学校予備門に1年通った後、15歳で画家を志し、小堀鞆音に入門して画業に勤む。歴史画のための有職故実研究を契機に風俗史研究に移行した。1906年より、有職故実研究家の関保之助につき「仮名草子の体裁の変遷」「下総国東葛飾郡馬橋村地方の方言」などを『考古学雑誌』などに発表。大正期、雑誌『此花』に措衣や紅紐などの筆名で「八瀬大原の風俗」「カルサンの今昔」などを発表。1915年、『郷土研究』に「山袴の話」などを発表したほか、1916年創刊の『風俗研究』にも多くの論考を執筆している。実物資料を積極的に収集し、文献や絵画資料を用いて比較・検討する実証的な研究方法は、後に渋沢敬三らアチックミュージアムの研究に大きな影響を与えた。1929年頃より長男馨太郎を連れてアチックを訪れた。渋沢敬三は勢助について「アチックの顧問格」としている。民俗学者 宮本馨太郎の父、宮本瑞夫の祖父。勢助、馨太郎関係資料は一般財団法人宮本記念財団が所蔵している。（宮本馨太郎 1958; 横浜市歴史博物館・神奈川大学日本常民文化研究所編 2002）

【著作】

宮本勢助『上州館林町方言集』橘正一、1931年。

宮本勢助『民間服飾誌 履物篇』雄山閣、1933年。

宮本勢助『山袴の話』大日本総合青年団、1937年。

【コレクションとの関係】

1929年に、北海道の「布袋」「熊祭用花矢」、1930年に群馬県水上村の「革靴」「櫛」「クツ」「草履」、1932年に東京市の「山車小屋」をコレクションに加えている。また、千葉県安房郡千倉町の「手擦りつむ」関係5点をコレクションに加えている。

----- 執筆者：永井美穂

●宮本千晴 (1937-)

みやもと・ちはる

【事績】

編集者、探検家。民俗学者 宮本常一の長男として大阪に生まれ、常一の故郷である山口県周防大島で育つ。東京都立大学人文学部人文科学科を卒業後、東京都立大学・大阪府立大学合同ネパール学術調査隊に参加し、シャルブ峰に初登頂した。常一が1966年に設立した近畿日本ツーリスト 日本観光文化研究所（観文研）で、事務局長および雑誌『あるくみる きく』編集長を長く務め、同じく観文研の森本孝とともに、国立民族学博物館の和船基本形50型の収集を実現した。また、1970年から1975年にかけておこなわれた東海大学カナダ北極圏調査の企画に加わり、第1次調査隊長を務めた。1979年に、仲間とともに地平線会議を設立。1982年に観文研を辞任し、株式会社“砂漠に緑を”に参加、植林技術開発に携わり、1992年にNGO マングローブ植林行動計画を設立した。また、『あるくみる きく』の記事をもとに編んだアンソロジー『宮本常一とあるいた昭和の日本』全25巻（農山漁村文化協会、2010-2012年）も監修した。（日本観光文化研究所編 1989; 佐野 2009）

【著作】

宮本千晴（文責）街道憲久・磯野哲志・春日俊昭・西富士雄「極北の荒野の中に」『あるくみる きく』86: 6-37、1974年。

宮本千晴『ネオ・メラネシア語入門』アムカス事務局、1975年。

宮本千晴『パプアニューギニア—アムカス探検学校で』アムカス事務局、1977年。

【コレクションとの関係】

1959年に広島県や神奈川県で集めた履物5点をコレクションに加えた。

----- 執筆者：坂野徹

●宮本常一 (1907-1981)

みやもと・つねいち

【事績】

民俗学者、社会運動家。山口県周防大島に、父 善十郎、母 まちの長男として生まれる。1925年、大阪の通信講習所を卒業後、郵便局に勤務。1926年、大阪府天王寺師範学校（二部）入学。同校を卒業した後、小学校に訓導として勤務しながら民間伝承の研究を始めた。1928年、天王寺師範学校専攻科地理専攻に入学し、その後も小学校教師と民俗学研究を両

立して続けた。1935年、渋沢敬三の主宰するアチックミュージアム（後の日本常民文化研究所）に入所し、日本各地で調査を実施した。戦争をはさんで、1949年に日本常民文化研究所に復帰。1953年に全国離島振興協議会の結成に携わり、幹事長となった。1965年より武蔵野美術大学教授就任、1966年に日本観光文化研究所を設立。没後、その業績の多くが息子の宮本千晴によって紹介された。（佐野 2009; 岩田 2013）

【著作】

宮本常一『忘れられた日本人』未来社、1960年。

宮本常一『民俗学の旅』文藝春秋、1978年。

宮本常一『宮本常一著作集（全51巻＋別巻2）』未来社、1967-2012年。

【コレクションとの関係】

1935年から1939年にかけて、大阪で集めた履物などの民具をコレクションに加えた。とりわけ、複数の製作段階にある作りかけの草履はユニーク。1939年から1941年にかけては、東北や九州、四国など他の地方の資料も収めている。戦後に収めた資料のうち、年代のわかっているものは、1958年から1959年にかけてのもの。資料の総数は少なくとも40点近くにのぼる。

----- 執筆者：坂野徹

● 宮本延人（1901-1987）

みやもと・のぶと

【事績】

民族学者。慶應義塾大学で柳田国男や移川子之蔵らの教えを受け、1928年に移川の招きで台北帝国大学の助手となり、台湾原住民族の調査をおこなった。移川や学生（当時）の馬淵東一らとともに編集・出版した『台湾高砂族系統所属の研究』は、台湾原住民族研究の金字塔として名高い。戦後は1946年に台湾大学教授となり、1949年に東海大学へ異動した。一貫して台湾原住民族研究者として活躍したが、戦後には鹿児島県の奄美大島やインドネシアでも調査をおこなった。日本民族学協会が派遣した第2次東南アジア稲作民族文化総合調査団（インドネシア、1960年）では、団長を務めている。後述するように、物質文化研究との関わりも深い。（台北帝国大学土俗・人類学研究室編 1935; 日本民族学会編 1955; 藤岡・石川・西村・中沢・宮本 1960; 馬淵 2005; 角南 2005; 野林 2010）

【著作】

宮本延人「新装の台北帝国大学の土俗人種学研究室及び標本室の概観」『ドルメン』4(1): 32-34、1935年。

宮本延人（編）『バリ島の研究—第二次東南アジア稲作民族文化総合調査報告』東海大学出版会、1968年。

宮本延人『台湾の原住民族—回想・私の民族学調査』六興出版、1985年。

宮本延人・瀬川孝吉・馬淵東一『台湾の民族と文化』六興出版、1987年。

宮本延人『日本統治時代台湾における寺廟整理問題』天理教道友社、1988年。

宮本延人（口述）宋文薫・蓮照美（翻譯編輯）『我的台灣紀行』南天書局、1998年。

【コレクションとの関係】

『台湾高砂族系統所属の研究』のため社会人類学者としてのイメージが強いが、物質文化研究でも多くの業績を残している。これは、台北帝国大学土俗人種学研究室の標本室の運営に関わったことと深く関係していよう。主著『台湾の原住民族』にも、考古学的遺物についての論考が収録されている。ただし、台湾大学と日本民族学協会附属博物館（保谷民博）との架け橋としては、宮本よりも馬淵東一の活躍が顕著であり、宮本は台湾で集めた資料をコレクションに加えてはいない。九学会連合の奄美調査（1955-1956年）のさいに奄美大島で、日本民族学協会の第2次東南アジア稲作民族文化総合調査（1960年）のさいにバリ島で、それぞれ標本資料採集をおこない、コレクションに資料を加えた。その数は約60点にのぼり、日本民族学協会の会員のなかでは、集めた資料数が比較的多いといえる。奄美調査で「基層文化の構造並に物質文化の研究」を、バリ島調査で「物質文化」を担当したのも、保谷民博の要望に応じたためである可能性が高い（ただし、それ以外の点での貢献も少なくなく、バリ島の調査では写真資料を構成して「バリ島農民の生活」を描写した）。

----- 執筆者：飯田卓

●宮本ユキ（1903-1974）

みやもと・ゆき

【事績】

民俗学者 宮本常一の姉で、元教師。宮本善十郎・マチ夫妻の長女として山口県周防大島に生まれた。1923年、平生精華高等女学校（現 熊毛南高校）に編入試験を受け、入学。その後、周防大島の地蔵小学校教師をつとめた。結婚にともない、西村に改姓。1944年頃、大阪の常一宅で宮本の妻 アサ子や甥 千晴らと同居しており、同年夏、千晴を連れて周防大島へ疎開。（宮本常一 2005; 田村編 2012）

【コレクションとの関係】

1935年に山口県の周防大島で集めた履物6点をコレクションに加えた。大阪にいた宮本常一の指示を受けて保谷に送った可能性が高い。

----- 執筆者：坂野徹

● 宮良当壮（1893-1964）

みやら・とうそう／みやなが・まさもり

【事績】

言語学者。沖縄県石垣島の大浜間切（現 石垣市）大川の生まれ。1925年に國學院大學を卒業し、宮内庁図書寮に勤務する。1924年から1946年まで上田万年や新村出、柳田国男らの推薦で、帝国学士院より研究助成を受けて全国の方言調査を行った。この成果として『採訪南島語彙稿』、『八重山語彙・附八重山語総説』、『八重山古謡』、『南島叢考』を著した。1943年に日本方言研究所を創設し、所長となった。晩年は武蔵野女子学院短大国文科主任教授となり『月刊琉球文学』を発行した。上京直後は名前を本土風に「みやなが・まさもり」と読ませていたが、本人がこれはペンネームであると記述している資料がある。（加治工 1983; 宮良 1998; 『アチックマンズリー』）

【著作】

宮良当壮『採訪南島語彙稿 第1編』郷土研究社、1927年。

宮良当壮『沖縄の人形芝居』（爐邊叢書）郷土研究社、1925年。

宮良長包（採譜）宮良当壮（解説）『八重山古謡 第1集』郷土研究社、1928年。

宮良長包（採譜）宮良当壮（解説）『八重山古謡 第2集』郷土研究社、1930年。

宮良当壮『八重山語彙・附八重山語総説』東洋文庫、1930年。

宮良当壮『南島叢考』一誠社、1934年。

【コレクションとの関係】

1935年に背負梯子、蓑、草履（2点）、印籠を寄贈している。いずれも長崎県の南松浦郡福江町、西彼杵郡野母村の資料である。

----- 執筆者：小島摩文

●三吉朋十 (1882-1982)

みよし・ともかず

【事績】

東南アジアに長年暮らしてさまざまな著作を刊行した「南洋通」。1905年に札幌農学校を卒業後、マニラに渡り、1906年から1908年まで三井物産香港駐在員となる。1911年にマレー半島でゴム栽培を手がける南亜公司に入社し、ジョホールでの現場主任や南洋経済研究所嘱託なども務めた。フィリピンや南洋関係の著作を数多く著し、戦後は在野で日本民俗学者として石仏研究をおこなった。(三吉 1979-1982)

【著作】

三吉朋十『南洋動物誌』モダン日本社、1942年。

三吉朋十『パラワン・チモール・セレベス探検記』刀江書院、1942年。

【コレクションとの関係】

1955年8月23日に台湾の蕃刀をコレクションに加えた。

----- 執筆者：坂野徹

●向山雅重 (1904-1990)

むかいはま・まさしげ

【事績】

民俗学者、郷土史家。1921年から1963年まで、生地の長野県上伊那郡内で小・中学校の教員を勤める。教壇に立つかわら、三沢勝衛、有賀喜左衛門、柳田国男に学んで「郷土人の郷土研究」をすすめる。「山村小記」「信濃民俗記」などを著した。1936年6月にアチックミュージアムを訪れ、アチックミュージアムの活動や渋沢敬三の考える民俗学などについて渋沢から聞いている。1950年に、アチックミュージアムが財団法人日本常民文化研究所となったときには、評議員を務めた。1970年柳田国男賞。(財団法人日本常民文化研究所 1954; 向山 2013; 小林 2015b)

【著作】

向山雅重『向山雅重著作集(全5巻)』新葉社、1988年。

【コレクションとの関係】

有賀喜左衛門を通じた信濃の民俗学研究者コミュニケーションのなかでアチックと関係を持っていたことから資料を寄贈したと考えられる。1936年から1938年にかけて長野県上伊那郡で集めた履物10点をコレクションに加えた。

----- 執筆者：小林光一郎

● 武藤鉄城（1896-1956）

むとう・てつじょう

【事績】

考古学者、民俗学者、地方史研究者。秋田県河辺郡豊岩村（現 秋田市）に地主の四男として生まれた。1914年に慶應義塾大学文学部理財科に進学するも1918年に中退。1920年に帰郷して1922年に羽後銀行秋田支店に入行するも、3年ほどで退職。長兄の援助で秋田市にスポーツ専門店を開業するも、間もなく閉店。1926年に角館尋常高等小学校に代用教員となった。1927年に深沢多市ら10人とともに角館史考会を結成し、1929年に東北帝国大学法文学部の奥羽史料調査部嘱託となり、喜田貞吉の指導のもとで調査活動に従事。1934年に朝日新聞の地方通信員となり、続いて角館時報の記者に採用される。1936年に仙北郡中仙町豊川（現 大仙市）の水神社にある線刻千手観音等鏡像を拓本模写したことがきっかけで、この像は1938年に国宝に指定された。戦後は、1946年に角館時報社の主筆に就任するとともに、日本民族学協会などでの学会活動も盛んにおこなった。秋田県文化財専門委員や日本学術会議会員などを歴任し、1954年には秋田県体育功労賞と魁文化章（秋田魁新報社）をあわせて受賞した。（アチックミュージアム編 1937；富木 1959；渡部 1973；柴山 2003）

【著作】

武藤鉄城『羽後角館地方に於ける鳥虫草木の民俗学的資料（アチックミュージアム彙報 第3）』アチックミュージアム、1935年。

武藤鉄城『秋田郡邑魚譚（アチックミュージアム彙報 第45）』アチックミュージアム、1940年。

武藤鉄城『秋田農民一揆史（秋田農村文化叢書 第4集）』秋田県農業会、1947年。

武藤鉄城『秋田キリシタン史』角館時報社、1948年。

武藤鉄城『袖野石器時代組石群発掘報告』角館時報社、1952年。

武藤鉄城『秋田マタギ聞書』慶友社、1969年。

【コレクションとの関係】

1933年から1937年にかけて、秋田県仙北郡を中心に集めた藁沓や背負袋、イタヤ細工や貝製の皿、麻糸の見本など、地域的に特徴のある民具78点をコレクションに加えた。アチックミュージアムが刊行した『民具問答集』には、仙北郡雲沢村および河辺郡仁井田村で集めた藁製品やイタヤ細工など9点について、武藤がみずから回答している。

----- 執筆者：木村裕樹

●村上清文（?-?）

むらかみ・せいぶん／きよふみ／きよぶみ

【事績】

民俗学者。1931年からアチックミュージアムに関わり、民具の収集や研究、新潟県三面の調査研究、『民具問答集』の編集、『豆州内浦漁民史料（上巻）』の語彙編纂など、さまざまな活動に参加した。早稲田大学卒業後は、岡書院から出されていた月刊誌『民俗学』の編集も務めた。その後、1934年に設立された日本青年館郷土資料陳列所に勤めた。戦後は都立南多摩高校教諭となった。（渋沢敬三伝記編纂刊行会編 1979;『アチックマンズリー』）

【コレクションとの関係】

1930年代前半に東京で資料収集をしたほか、1935年から1936年にかけて新潟県三面村で多くの民具を集め、100点を超える資料をコレクションに加えた。

----- 執筆者：小林光一郎

●村上長次郎（1880?-?）

むらかみ・ちょうじろう

【事績】

コレクションの形成に関わった村上長次郎かどうかはわからないが、同姓同名の者に広島県の商人がいる。1910年に岩国沖で遭難した呉の第6潜航艇の乗組員たちを供養しようと発心し、翌年から広島市内を流れる太田川の土手に桜を植栽して、1916年に「長寿園」の名で一般公開した。

【著作】

村上長次郎（編）『水都の花園』村上長次郎（国立国会図書館所蔵）、1924年。

【コレクションとの関係】

1931年3月7日に「カラハシ」という民具（脱穀台か）をコレクションに加えた。採集地は不明。

----- 執筆者：飯田卓

● 村上俊順（1908-1980）

むらかみ・としゆき／しゅんじゅん

【事績】

詩人、村上書店店主。1932年に早稲田大学を卒業したのち、日本民族学会の事務に携わった。学会誌『民族学研究』では、リュシアン・レヴィ＝ブリュルなどフランス語圏の文献を書評している。また、渋沢敬三が主宰するアチックミュージアムに参加し、地名索引や文献索引を担当する「索隠室」で『文献索隠』『日本地名索引』を作成したほか、アチックミュージアム関係の各種出版に携わった。また、金曜会（詳細不明）で幹事を務め、アチックミュージアムの運動部では渋沢らとピンポン大会に出場している。その後、都立高校教員となり、日本教育連盟主事の職を経て、村上書店の自営を始めた。詩人としては、前田鉄之助が主宰する「詩洋」の同人として活躍した。著作に『村の外』『山川秘唱』『橋姫』などがある。（渋沢敬三伝記編纂刊行会編 1979; 渋沢史料館編 1988; 『アチックマンズリー』）

【コレクションとの関係】

1935年から1936年にかけて、長野県で集めた民具10点あまりをコレクションに加えた。

----- 執筆者：小林光一郎

● 守木清（?-?）

もりき・きよし

【著作】

守木清『家族の肖像—詩集』北川昭夫、1935年。

【コレクションとの関係】

1937年3月18日に新潟県西頸城郡糸魚川町で集めた履物数点をコレクションに加えた。

----- 執筆者：卯田宗平

● 森脇太一 (1906-1977)

もりわき・たいち

【事績】

学校教員、郷土史家、民話研究者。鳥根県邑智郡谷住郷に生まれる。旧姓は大谷。1927年に井原村尋常小学校本科正教員となり、その後も鳥根県内で職場を変わりながら教鞭をとった。1933年に森脇家の養子となる。『邑智郡誌』を著す過程で、鳥根民俗学会を創設することになる牛尾三千夫と出会い、同書の刊行によって同会の人びとに刺激を与えた。1939年に牛尾から民話に関する資料をすべてひき継ぎ、1940年から1950年代にかけては牛尾の収集による民話の増補版を、1960年代にはみずからが採集し整理した民話を、それぞれ民話集として多数公刊した。(酒井 1978; 松本 1996; 田中 2006; 2007)

【著作】

森脇太一『邑智郡誌』森脇太一、1937年〔森脇太一、1972年〕。

山崎マスノ(述) 森脇太一(編)『江津の昔ばなし』江津市文化財研究会、1973年。

森脇太一(編)『石見昔話集—鳥根(全国昔話資料集成36)』岩崎美術社、1984年。

【コレクションとの関係】

1940年に鳥根県邑智郡長谷村の民具をコレクションに加えた。

----- 執筆者：飯田卓

● 諸橋轍次 (1883-1982)

もろはし・てつじ

【事績】

漢字研究者。『大漢和辞典』や『広漢和辞典』(ともに大修館書店刊)の編者。新潟県南蒲原郡庭月村(現 三条市)生まれ。青年時代には中国にも留学した。東京高等師範学校を卒業後、漢学の教員として同校に勤務し、國學院大學文学部教授、東京文理科大学名誉教授となった。都留短期大学学長および都留文科大学学長等を歴任。

1925年に大修館の鈴木一平から大漢和辞典の構想を持ちかけられ、1929年に本格的な制作に着手し、1943年に第1巻を完成させて翌年の朝日賞を受賞した。1960年に大漢和辞典全13巻が完成し、1965年に文化勲章を受章、1976年に勲一等瑞宝章を受章した。(鎌田 2001; 上田・西沢・平山・三浦編 2001)

【著作】

諸橋轍次『中国古典名言事典』講談社、1972年。

【コレクションとの関係】

1921年に中国で集めた人形などをコレクションに加えた。

----- 執筆者：井上潤

● **安成三郎**（1899-1957）

やすなり・さぶろう

【事績】

秋田県北秋田郡阿仁合町（現 北秋田市）生まれ。父 正治は元長州藩士で、維新後、阿仁銅山につとめた。三郎の兄弟には、評論や翻訳を手がけた貞雄や、ジャーナリスト、歌人、小説家としても活動した二郎らがいる。三郎は秋田県立大館中学校を中退。1910年に柳田国男や新渡戸稲造が中心となって組織した「郷土会」に参加。雑誌『実業之世界』（実業之世界社）の編集者を経て、1924年に雑誌『建築の日本』（建築の日本社）を創刊するも、3号で終刊。その後は、資生堂初代社長で写真家でもあった福原信三のもとで個人秘書をつとめた。また、中国古典に造詣が深く、「山魯」の号で俳人としても活動した。一方、哲学者 西田幾多郎とも親交が深く、西田家の執事のような役割も果たし、西田の没後、鎌倉の七里ヶ浜の歌碑建立に尽力、その記念展を資生堂でひらいた。

渋沢敬三が主宰するアチックミュージアムとも関係を維持した。『アチック来訪者芳名簿』によると、1929年5月6日の例会に出席しているのが初出である。（伊藤 1987; 福田 2009）

【コレクションとの関係】

1929年と1931年に、秋田県山本郡能代の風や滑り下駄、京都市の銭袋など、10点あまりの資料をコレクションに加えた。

----- 執筆者：木村裕樹

●柳田国男 (1875-1962)

やなぎた・くにお

【事績】

民俗学者、詩人、官僚、論説記者。日本民俗学を樹立した。兵庫県神東郡田原村辻川（現神崎郡福崎町）の松岡家に生まれる。長兄 鼎は医者、次兄 井上通泰は医者・歌人・国文学者、弟 静雄は海軍軍人・民族学者、末弟 映丘は日本画家。幼少時に長兄の暮らす茨城県北相馬郡布川村（現 利根町）に転居、さらに東京に住む次兄のもとに転居し、第一高等学校を経て東京帝国大学法科大学政治科を卒業した。学生時代より田山花袋ら自然主義文学者と交遊し、自らも新体詩を創作。卒業後は農商務省に入り、のちに法制局参事官や貴族院書記官長等を歴任した。この頃、大審院判事 柳田直平の養子となった。公務のかたわら、郷土研究に着手して『遠野物語』をまとめ、雑誌『郷土研究』（1913-1918年）を刊行した。1919年に官職を辞任、1920年末から翌年にかけて沖縄を旅行する。1921年から1923年にかけて国際連盟委任統治委員としてジュネーブ（スイス）に駐在した。関東大震災を機に帰国し、1930年、東京朝日新聞の論説委員を辞任した後は学問に専念。1930年代に民俗学方法論を体系化するとともに、共同調査や学会組織の整備などを推し進めた。1941年に朝日文化賞を受賞。1947年に財団法人民俗学研究所を開設し、1951年に文化勲章を受章した。晩年は沖縄研究に多大な関心をはらい、南方から島伝いに移住した稲作民族を日本人の起源とする「海上の道」論を展開、江上波夫の「騎馬民族説」に対抗した。（後藤編 1986-1987; 柳田国男研究会編 1988; 野村・三浦・宮田・吉川編 1998; Morse 1990）

【著作】

柳田国男『遠野物語』聚精堂、1910年。

柳田国男『海上の道』筑摩書房、1961年。

柳田国男『定本 柳田国男集（全36巻）』筑摩書房、1961-1971年。

柳田国男『柳田国男全集』筑摩書房、1997-2018年現在刊行中。

【コレクションとの関係】

1929年に朝鮮やハワイ、東北・関東・中部地方で集めた資料を、1931年から1932年にかけては朝鮮や東北・九州地方で集めた資料を、1938年には兵庫県で集めた履物を、それぞれコレクションに加えている。その総数は約20点。柳田に寄贈された資料を提供したものが少なくないと推測される。

----- 執筆者：菊地暁

● 築瀬義一（1903? -1975）

やなせ・ぎいち

【事績】

文化行政官、政治家。終戦直後は上海に拠点を置いて活動していたが、詳細は不明。1951年より長崎市社会教育課に勤務し、1960年から1962年まで長崎市立長崎博物館長と長崎国際文化会館長を兼務した。1963年より長崎市議員を務め、在職したまま没した。享年72歳。

【著作】

築瀬義一「博物館設置基準の一考察」『博物館研究』33: 3-4、1960年。

築瀬義一「両陛下の御先導御案内の大役を果たして」全日本教育父母会議長崎県支部常務理事会（編）『天皇后両陛下奉迎感想文集』37-38ページ、藤木博英社、1961年。

【コレクションとの関係】

1959年に長崎の唐人人形をコレクションに加えている。

----- 執筆者：卯田宗平、飯田卓

● 山内豊中（1885-1952）

やまうち・とよなか

【事績】

海軍軍人。高知出身。1904年に海軍兵学校を卒業。1905年に海軍少尉、1907年に海軍中尉、1909年に海軍大尉。1910年に海軍大学校乙種学生、水雷学校高等科学生、1912年に東宮武官、1915年に海軍少佐、1920年に海軍中佐、1921年に皇族附武官、1924年に海軍大佐。1927年に侍従武官、1930年に海軍少将、1932年に別当（高松宮附）、1934年に待命となり予備役に編入。1945年に退役。父は土佐藩主 山内豊範。渋沢敬三の妻 登喜子の姉 美艸子の夫。敬三にとって義兄にあたる。（人事興信所編 1937b; 財団法人海軍歴史保存会編 1995）

【コレクションとの関係】

1928年に香川県琴平の達磨をコレクションに加えた。

----- 執筆者：永井美穂

●山尾薫明 (1903-1999)

やまお・くんめい

【事績】

洋画家。香川県出身。東京美術学校を卒業。フランスイタリアに留学。原始芸術研究のため東インド諸島を、オリエント古美術研究のため中近東地方を巡遊した。趣味は古美術蒐集。(藤井 1964)

【コレクションとの関係】

ジャワ島やバリ島、ボルネオ島、スマトラ島、スラウェシ島、アルー諸島など、インドネシア各地で集めた仮面、土偶、魚捕矢など155点をコレクションに加えた。採集期はいずれも不明。

----- 執筆者：永井美穂

●山貝如松 (1891-1976)

やまが い・じょしょう

【事績】

新潟県村上出身の俳人。本名は山貝久蔵。村上町尋常高等小学校尋常科を卒業後、村上銀行、第四銀行、山辺里地区農業協同組合に勤務する。1955年に村上市文化財調査委員会委員となる。固定資産評価委員も務めた。著書の『小泉一掬抄』には、鈴木鉦三氏による以下のような前書きがある。「何といっても先生の残された大きな仕事は、郷土にまつわる様々なことを色々書き留め置いて下さったことです。昭和二年から当時この地で発行されていた雑誌八紘に「村上俳諧温故録」を二〇回、同じ頃に村上時事新報に「郷土俳誌片々」、昭和二六年から田辺英太さん(昭和四〇年一月没)の村上新聞に「郷土史拾遺」を五〇回、「見聞雑記」を一〇〇回、そして「小泉一掬抄」を一〇六回、実に二五〇回以上にわたって書いて居られます。そのいずれもが先生の多年の研究や眼識の広さ深さによるものなのです」。1936年に渋沢敬三らが村上・三面地方の調査に訪れたさいには、大瀧新蔵や丹田昭一郎とともに一行を受け入れた。(新潟県史編さん室編 1981; 『アチックマンズリー』)

【著作】

山貝如松「村上のお茶と俚謡」『高志路』5(6): 60-62、1939年。

山貝如松『村上俳諧温故録』村上郷土研究グループ、1979年。

山貝如松『小泉一掬抄』村上郷土史研究出版、1989年。

【コレクションとの関係】

1937年に新潟県村上町の蓑をコレクションに加えている。

----- 執筆者：卯田宗平、飯田卓

● 山口麻太郎（1891-1987）

やまぐち・あさたろう

【事績】

民俗学者、郷土史家。長崎県壱岐郡郷ノ浦町（現 壱岐市）生まれ。長崎通信伝習生養成所を卒業後、郷ノ浦町郵便局、台湾総督府民政部通信局、市町村雑誌社、対馬商船郷ノ浦支店などに勤務する。1921年、壱岐を訪れた折口信夫の講演を聴き、民俗学に開眼し、柳田国男に入門した。1933年、壱岐出身の実業家 松永安左エ門の支援を受けて「壱岐郷土研究所」を開設、郷土資料の収集・調査研究に邁進する。著作多数。民俗学の学問的性格をめぐって、関敬吾と交わした論争も有名。1950年から1951年にかけて八学会連合対馬共同調査がおこなわれた際には受け入れ役となり、民俗学者 宮本常一や考古学者 水野清一らと親交を結んだ。（室井 2007; 宮本常一 2012）

【著作】

山口麻太郎『壱岐島方言集』刀江書院、1930年。

山口麻太郎『壱岐島民俗誌』一誠社、1934年。

山口麻太郎『壱岐島昔話集』郷土研究社、1935年。

山口麻太郎『山口麻太郎著作集（全3巻）』校成出版社、1973-1975年。

【コレクションとの関係】

1935年に長崎県壱岐郡武生水村の民具をコレクションに加えた。

----- 執筆者：菊地暁

● 山口和雄 (1907-2000)

やまぐち・かずお

【事績】

漁業経済学者、経済史家。千葉県出身。1932年に東京帝国大学経済学部を卒業し、1935年にアチックミュージアムの水産史研究室の研究員となる。戦後、北海道大学法文学部助教授、同大学経済学部教授を経て、1957年に東京大学経済学部教授となり、1967年に定年退官した。退官後は、明治大学教授、創価大学教授、三井文庫館長をつとめた。日本学士院会員。1979年勲三等旭日中綬章受勲。(桜田・山口 1935; 1936; 山口 1943; 1960; 1978)

【著作】

山口和雄『明治前期を中心とする内房北部の漁業と漁村経済(上下、アチックミュージアムノート 第2)』アチックミュージアム、1935-1936年。

山口和雄『九十九里旧地曳網漁業(アチックミュージアム彙報 第14)』アチックミュージアム、1937年。

山口和雄『近世越中灘浦台網漁業史(アチックミュージアム彙報 第36)』アチックミュージアム、1939年。

山口和雄『日本漁業史』生活社、1947年[東京大学出版会、1957年]。

山口和雄『日本漁業経済史研究』北隆館、1948年。

山口和雄『明治前期経済の分析』東京大学出版会、1956年。

山口和雄『日本の漁業』弘文堂、1959年。

【コレクションとの関係】

1935年8月から1936年10月にかけて、約40点の資料をコレクションに加えている。山口が専門とした漁業関係の資料もあるが、履物や紡績具など、民具研究者たちが関心を寄せていたと思われる資料も少なくない。アチックミュージアムのもとでは、漁業史研究者と民具研究者のゆるやかな連携があったことが推察される。

----- 執筆者：加藤幸治

● 山口常助 （1920-?）

やまぐち・つねすけ

【事績】

歴史学者、郷土史家、印刷会社社長。愛媛県北宇和郡松野町（現 宇和島市）出身。大学入学前から『民間伝承』などに研究を発表し、1935年に宇和島を訪れた大間知篤三の影響を受けて『南予民俗』の創刊に携わった。1938年に上京し、國學院大學で日本中世史を専攻。在学中に召集命令を受け、復員後は宇和島市で実業の道に進んだ。そのかわり、宇和島市に所在する有形無形の資料や文化財を世に広く知らしめることに努めた。宇和島市文化財保護委員を務め、後に委員長となった。愛媛県歴史文化博物館が所蔵している「秋田文庫」には、伊予民俗の会を主宰した秋田忠俊に宛てて山口が出した書簡やはがきが多数含まれている。（愛媛新聞社出版部出版局編 1974; 松本 1996）

【著作】

山口常助「会員通信 産育（北宇和郡）」『民間伝承』1(4): 2、1935年。

山口常助「洪沢敬三氏と宇和島」洪沢敬三先生景仰録編集委員会（編）『洪沢敬三先生景仰録』223-225ページ、東洋大学、1965年。

山口常助「四国遍路道における篠山と満願寺」『伊予の民俗』21: 1-6、1976年。

【コレクションとの関係】

1936年から1937年にかけて愛媛県や高知県で集めた履物を数点コレクションに加えた。

----- 執筆者：飯田卓

● 山口康雄 （?-1944）

やまぐち・やすお

【事績】

民俗学者。大阪府堺市出身（推定）。昭和初め頃、大阪府取石村の小学校教員を務めていた宮本常一とともに「堺木曜会」を設立し、ガリ版で雑誌『口承文芸』（1933-1936年）を刊行した。大阪府下の民俗調査にも従事していたが、1944年に若くして病死した。（堺民俗研究会 1968）

【著作】

山口康雄「北河内の昔話一つ——大阪府北河内郡水本村打上」『近畿民俗』1: 55、1936年。

山口康雄「泉南郡昔話」『昔話研究』2(5): 41-43、1936年。

【コレクションとの関係】

1935年から1936年にかけて、奈良県や長崎県、鹿児島県などで集めた履物をコレクションに加えた。

----- 執筆者：菊地暁

● 山下久男 (1903-83)

やました・ひさお

【事績】

民俗学者、口承文芸研究者。石川県江沼郡南郷村（現 加賀市）生まれ。慶應義塾大学文学部国文学科を卒業後、金沢第一高等女学校、飯田中学校、遠野中学校、輪島高等学校、大聖寺高等学校などで教鞭をとる。大学在学中より折口信夫に師事し、郷里や赴任先で民俗資料を採訪する。1935年、柳田国男還暦記念 日本民俗学講習会に参加した。遠野中学校在職時に、『遠野物語』に関わる資料整理に従事した。（山下 2000）

【著作】

山下久男『江沼郡手鞠唄集』谷作書房、1934年。

山下久男『加賀江沼郡昔話集』小川書店、1935年。

【コレクションとの関係】

1935年と1936年に石川県の履物をコレクションに加えた。

----- 執筆者：菊地暁

● 山本勇 (?-?)

やまもと・いさむ

【事績】

『渋沢栄一伝記資料』編纂委員の一人。1935年には渋沢敬三が主宰したアチックミュージアムのために足半（履物）を収集した。ただし、山本が集めた資料の「採集者」欄は空欄になっており、山本の名は「寄附者」欄にある。この欄は、プライバシー保護のため本データベースでは公開していないため、山本関連資料として本データベースで確認できるのは

「大黒さま」1点のみである。（渋沢青淵記念財団竜門社編 1964b; 藤井 2010; 大谷 2015）

【コレクションとの関係】

1935年4月26日に「大黒さま」をコレクションに加えた。収集場所は不明。

----- 執筆者：井上潤

● **山本二三丸**（1913-2011）

やまもと・ふみまる

【事績】

経済学者。愛知県豊橋市出身。1936年に東京帝国大学経済学部を卒業し、株式会社東京貯蓄銀行書記となった。1938年より東亜研究所所員、1940年より日本鉄鋼联合会書記、1941年より鉄鋼統制会書記、日本鋼管株式会社書記、1942年より立教大学経済学部講師、1948年より同教授1978年より愛知大学法経学部教授を務めた。マルクス経済学の価値論・再生産論・恐慌論を専攻。東京帝大時代より渋沢敬三が主宰したアチックミュージアムの同人となり、文献索隠（地方凡例録）を担当した。（住谷編 1978; 『アチックマンズリー』）

【著作】

山本二三丸『恐慌論研究』青木書店、1950年。

山本二三丸『価値論研究』青木書店、1962年。

山本二三丸『社会主義の虚像と実像』青木書店、1991年。

【コレクションとの関係】

1935年に愛知県渥美郡、同豊橋市、長野県諏訪郡豊田村の足半を、1936年に、群馬県の藁靴と草履をコレクションに加えた。

----- 執筆者：永井美穂

● **八幡一郎**（1902-1987）

やわた・いちろう

【事績】

先史考古学者。1924年に東京帝国大学理学部人類学選科を修了後、人類学教室の助手、助手、講師を経て、1943年に民族研究所所員となった。選科の同窓だった山内清男や甲野勇

とともに縄文土器の編年に取り組み、「編年学派」のひとりとも目されるが、研究テーマは幅広く、ミクロネシア各地でも発掘調査をおこなっている。戦後は東京国立博物館と東京大学文学部講師を務めたのち、1961年に東京教育大学教授となった。1966年に定年退職した後は上智大学教授。日本考古学協会委員長も務めた。(斎藤 2006; 大村 2014)

【著作】

八幡一郎『八幡一郎著作集 (全6巻)』雄山閣、1979-1980年。

【コレクションとの関係】

1950年から1961年にかけて日本各地やハワイ、東南アジアなどで集めた資料をコレクションに加えた。その数は500点近くにのぼる。タイやラオス、カンボジアで集められた資料は、年代が1957年から1958年となっており、明らかに、第1次東南アジア稲作民族文化総合調査の際に集められたものである。

----- 執筆者：坂野徹

● 結城次郎 (1892-1945)

ゆうき・じろう

【事績】

教員、昆虫学者、民俗学者、登山家。広島県立広島工業学校(現 広島工業高等学校)で教鞭をとりながら、広島山岳会および広島昆虫同好会の運営に関わった。職場の広島工業学校では、山岳部の創設に関わった。1936年、広島山岳会の活動の一環として宮島(厳島)一周をおこなったとき、ふつうには人跡が及ばない島の裏側の山白浦を訪れ、ミヤジマトンボを発見して命名者となった。新種記載の論文は、当時朝鮮にいた土居寛暢との共著で1938年に発表された。いっぽうで結城は、アチックミュージアムで民具整理をおこなっていた広島出身の儀貝勇とも交友があり、アチックミュージアムを主宰していた渋沢敬三が1937年に広島を訪れたときには、広島民俗学同好会のメンバーとして儀貝宅で歓待した。(鍵本 2001; 『アチックマンズリー』)

【著作】

結城次郎「テナウムシの群居に就て」『動物学雑誌』37(440): 261-262、1925年。

結城次郎・儀貝勇『広島を繞る山の研究—登山・史蹟(第1輯、第2輯)』1930年。

結城次郎「安芸国齋島民俗相(一)」『旅と伝説』86: 20-31、1935年。

結城次郎・土居寛暢「Orthetrumの一新種に就て」『あきつ』1(4): 153-155、1938年。

結城次郎「民具の学名に関する私案」『アチックマンズリー』31-32: 1-2、1938年。

【コレクションとの関係】

1935年から1937年にかけて、広島県や香川県、山口県などで集めた資料をコレクションに加えた。それら資料のひとつの採集者名は「A・M 同人 結城次郎」となっている。A・Mはアチックミュージアム（所在地は東京）の略称で、広島に住む者としては特別な待遇を受けていたことがわかる。おそらく、磯貝勇と緊密な連絡をとっていたものと推測される。

----- 執筆者：飯田卓

● 横内正直（?-?）

よこうち・まさなお

【事績】

渋沢敬三が主宰したアチックミュージアムの書生。長野県出身。1935年10月に渋沢家でくらしはじめ、『民具問答集』の編集やアチックミュージアムの事務などを担当していたが、1936年3月に小野若木が横内に代わってアチックミュージアムの業務に携わった。横内は書生部屋に移り、渋沢家書生となった。日本大学第三商業学校を卒業し、1937年に東京製綱株式会社に入社した。渋沢敬三の書生たちが中心の柏竈社の会員。（『アチックマンズリー』）

【コレクションとの関係】

1936年1月26日に長野県南安曇郡穂高町で集めた民具数点をコレクションに加えた。

----- 執筆者：小林光一郎

● 吉岡重三（?-?）

よしおか・じゅうぞう

【事績】

埼玉県深谷の郷土史家。1982年7月時点で渋沢栄一を顕彰する青淵記念事業協賛会副会長を務めていた。同会と深谷市八基公民館建設推進協議会が企画して刊行された『新藍香翁』に執筆している。この本は、1909年に刊行された尾高惇忠の伝記『藍香翁』（塚原蓼州著）を現代口語文に書き改めて利用しやすくしたもの。吉岡の本業は大里蚕種の代表で、全国蚕種協会の6代目会長や全国蚕種輸出事業協同組合初代理事を歴任した。（塚原 1979; 山

本 1987; 全国蚕種協会編 1990)

【コレクションとの関係】

1930年に埼玉県大里郡八基村血洗島で集めた藍製造のための道具などをコレクションに加えた。

----- 執筆者：井上潤

● 吉岡高吉 (?-?)

よしおか・たかよし

【事績】

高知県室戸市浮津の生まれ。土佐の捕鯨業について研究すると同時に、近代捕鯨の経営事務の職にあった経験から、浮津捕鯨会社の資料の調査に携わった。詳細な経歴は不明だが、アチックミュージアム彙報第35号『土佐室戸浮津組捕鯨実録』の執筆を担当し、同じく彙報第36号『土佐室戸浮津組捕鯨史料』の編纂に深く関与した。(アチックミュージアム編 1939b)

【著作】

吉岡高吉『土佐室戸浮津組捕鯨実録 (アチックミュージアム彙報 第35号)』アチックミュージアム、1939年。

【コレクションとの関係】

1935年から1936年にかけて、漁具を中心とした高知県安芸郡の資料を数度にわたってコレクションに加えている。その数は50点以上にのぼる。1937年1月の『アチックマンズリー』第20号に「吉岡高吉氏 (高知) より漁具着荷」の記事がある。

----- 執筆者：加藤幸治

● 吉田三郎 (1905-1979)

よしだ・さぶろう

【事績】

秋田県南秋田郡脇本村 (現 男鹿市) 出身の農業家。大正時代以後に盛んとなった農民運動に参加し、1934年に大西伍一からアチックミュージアムの主宰者である洪沢敬三を紹介さ

れる。1935年、『男鹿寒風山麓農民手記』をアチックミュージアムから出版。東京に出たさいには、アチックミュージアムの民具を継承した保谷民博の管理をしながら、渋沢らに農業指導をおこない、地元秋田に戻ってから開拓村で農家を継続した。開拓村入植中の1946年8月、リュックを背に地下足袋を履いた渋沢から訪問を受け、「星の見えるあばら小屋で蚊に食われながらお泊り、開拓者に力づけて下さった。」という。入植後も数多くの執筆をおこない、自著『もの言う百姓』を地で行った人物。戦後は男鹿に戻った。（渋沢敬三先生景仰録編集委員会編 1965; 大西 1972; 渋沢敬三伝記編纂刊行会編 1979）

【著作】

吉田三郎『男鹿寒風山麓農民手記（アチックミュージアム彙報 第4）』アチックミュージアム、1935年。

吉田三郎『男鹿寒風山麓農民日録（アチックミュージアム彙報 第16）』アチックミュージアム、1938年。

吉田三郎『もの言う百姓』慶友社、1963年。

【コレクションとの関係】

1935年に故郷の秋田で集めた資料十数点をコレクションに加えた。

----- 執筆者：小林光一郎

● 吉田末四 （?-1928）

よしだ・すえよし

【事績】

渋沢家の書生。1920年より渋沢家に来るも、1928年9月に郷里の海岸で急逝した。同期の書生に歌川節雄がいる。歌川は、渋沢敬三を囲む人たちで発行していた『アチックマンズリー』第1号（1935年7月30日発行）に「HAKUSO NEWS 柏竈社」という記事を寄せているが、その末尾に吉田への追悼が述べられている。柏竈社は1933年に結成された書生たちの会で、渋沢家の家紋である「丸に違い柏」と、同じ竈（かまど）の飯を食べた「書生部屋本位の会」であることに因んで名づけられた。アチックミュージアムのコレクションにはこうした書生たちの活躍も少なからず関与している。吉田は柏竈社結成以前に没したが、もし健在であったなら、その会員であったに違いない。（中山編 1956; 『アチックマンズリー』）

【コレクションとの関係】

1922年というきわめて早い時期に、福島県田村郡三春で集めた達磨1点をコレクションに加えている。これは『A・M・S日誌』によると、「アチック・ミュージアム・ソサエティ」の会合が持たれるようになって、間もない頃の収集である。アチックミュージアムは玩具研究からスタートしたが、とくに達磨を収集対象とするのは、藤木喜久磨が関わる1927年頃である。

----- 執筆者：木村裕樹

● 米沢百合太郎 (?-?)

よねざわ・ゆりたろう

【事績】

高知室戸地方の旧網漁捕鯨組の羽指。吉岡高吉『土佐室戸浮津組捕鯨実録』に、体験談を聞きした協力者の筆頭に名前が挙げられている。詳細は不明。(吉岡 1939)

【コレクションとの関係】

1937年に高知県安芸郡室戸町で集めた鯨銛や松明などをコレクションに加えた。

----- 執筆者：加藤幸治

● 和田格 (?-?)

わだ・かく

【事績】

医師。詳しい事績は不明だが、日本民族学協会が1957年から1958年にかけて派遣した東南アジア稲作民族文化総合調査(第1次)に現地から参加した。(東南アジア稲作民族文化総合調査団編 1959)

【コレクションとの関係】

カンボジアで集めた家畜用鈴をコレクションに加えた。採集期などは不明。ただし、データベースでは公表していない「寄附者」欄をみると「第一東南ア調査団」と書かれており、調査団の派遣の後に収蔵されたと推測される。

----- 執筆者：飯田卓

● 和田上俊夫（?-?）

わだがみ・としお

【事績】

保谷民博に資料を寄贈した時（1955年）には、「北多摩郡保谷町上保谷」に在住。1948年と1953年10月に、日本復帰前で米軍統治時代の沖縄に渡航したか在住していた可能性がある。

第2次『同時代』4号（発行「黒の会」、発売 法政大学出版局、1957年3月発行）に、和田上俊夫の詩が掲載されている。『同時代』は、1948年、哲学者の矢内原伊作やフランス文学者の宇佐見英治らを中心に創刊され、7号をもって終刊となった。1955年には、矢内原や宇佐美に加え、詩人の宗左近らが参加して第2次『同時代』が刊行された。一時中断を挟み、1996年に第3次『同時代』として復刊したが、第41号（2016年12月）をもって解散した。

【著作】

和田上俊夫「枯草は余白を埋めぬ」『同時代（第2次）』4: 36-37、1957年。

【コレクションとの関係】

「クバオージ（檳榔の扇）」と「盃」を寄贈した。どちらも製作地は沖縄県。「盃」は、製作地が那覇市となっているので壺屋焼か。1948年に購入し、「昭三十一（1956）年現在使用中のものを寄贈された」と備考に記されている。クバオージは、採集地が沖縄県「八重山郡石垣島」。「採集期」が「昭二八（1953）一〇」で、「使用年代」が「昭二八から三〇（1953～1955）年」となっており、「盃」同様、保谷の自宅で使っていたものを寄付したと思われる。

----- 執筆者：小島摩文

● 渡部小勝（?-?）

わたなべ・こかつ

【事績】

秋田県仙北郡雲沢村雲然（現 仙北市角館町）の農家、雲沢村青年団の一員。渡部の回想によると、1934年11月3日を中心に日本青年館で計画された民俗展のため、角館のイタヤ細工についてレポートを作成し、上京してイタヤ細工の製作実演をおこなった。終了後は三田綱町の渋沢敬三邸を訪問し、箕と足半の製作を実演した。箕の製作工程は渋沢が、足半

の製作工程は村上清文が16ミリフィルムで撮影した。現像までの4～5日間、渋沢が主宰したアチックミュージアムに逗留し、上映会で石黒忠篤と面会した。1939年に、早川孝太郎の依頼で農村更生協会の仕事を手伝うため再度上京し、アチックミュージアムの同人たちと親交を持った。太平洋戦争末期には兵役に就き、1946年に復員した後は町の農政関係を担当した。(渡部 1964)

【著作】

渡部小勝「羽後雲然村のイタヤ細工」アチックミュージアム(編)『民具問答集 第1輯(アチックミュージアムノート 第1)』88-99ページ、アチックミュージアム、1937年。

【コレクションとの関係】

仙北郡雲沢村雲然のイタヤ細工の材料や製品、製作用具などをコレクションに加えた。

----- 執筆者：木村裕樹

● 渡部尚一 (??)

わたなべ・しょういち／わたべ・なおかず

【事績】

詳しい経歴は不明。1925年12月4日に渋沢敬三らがアチック・ミュージアム・ソサエティ(のちにアチックミュージアムと表記されることが多くなる)の会合を開催したさい、独楽の玩具の収集や研究を小林正美とともに担当した。コレクションの登録はそれよりも早い時期と推測され、初期のコレクション形成に大きな役割をはたしたといえる。(『アチックマンスリー』)

【コレクションとの関係】

玩具数点をコレクションに加えた。採集期の判明しているものは、1922年が2点と1927年が1点。

----- 執筆者：小林光一郎